文部科学省　「産学連携による実践型人材育成事業」

『公共的対話と知的共同作業をベースに
イノベーティブな「心の習慣」と「イノベーション評価能力」を養成し、
地域的競争力の強化にコミットメントする中核的人材育成事業』

最終成果報告書

平成２３年３月

滋賀大学経済学部

序

文部科学省のサービス・イノベーション人材育成事業に2008年度採択され、2010年度末までの2年7ヶ月の期間、滋賀大学経済学部は、サービス・イノベーション人材育成の教育カリキュラムの開発に鋭意努めてきた。その結果、2010年度4月よりサービス・イノベーション専攻コースを学部の専攻コース制の一つとして整備することができた。文部科学省の補助事業を活用し、学部カリキュラムの新規の開発と充実を進めることができたのは、国立大学法人化後はじめてのことで有り、経済学部にとっても貴重な経験であった。文部科学省補助金が、学部教育改革を加速度的に促進し、学部内によい影響を与えた点は特筆に値する。

本事業は教育プログラムの開発を主眼に置いた委託事業でスタートし、その後、補助事業への制度変更が文部科学省によってなされた。本事業は、経済学部のサービス・イノベーション教学調整会議のメンバー10名に加えて、学部教員の応援団（サービス・イノベーション・サポーター十数名）の協力も受けながら推進してきた。また、2010年度中には、行政事業レビューへの対応を求められるなどカリキュラム開発以外の作業も発生し、大学の事務当局（学務課教育改革室）と調整しながらサービス・イノベーション教学調整会議としても資料づくりに取り組んできた。滋賀大学経済学部では、申請書段階で企画した教育プログラムの開発だけにとどまらず、新たな学問体系の確立への貢献も常に意図しながら教育プログラムの開発に当たってきた。今般、補助事業期間の終了を迎え、成果報告書を作成したので、ここに報告する。

只友景士（経済学科・准教授）

お知らせ

平成２３年度以降、滋賀大学経済学部のサービス・イノベーション関連事業の窓口は、井手一郎（ファイナンス学科・准教授）になります。連絡先は下記の通りです。

氏名　井手　一郎
住所　522-8522 彦根市馬場 1-1　滋賀大学経済学部

電子メール：　ide@biwako.shiga-u.ac.jp

研究室電話：　0749-27-1105
経済学部総務係：　0749-27-1030

目次

序

お知らせ

目次

１．事業の概要
　１．１　申請内容の概要と到達点……1
　１．２　事業採択の経緯と略年表……5
　１．３　教育プログラム開発の状況……6
　１．４　滋賀大学経済学部サービス・イノベーション専攻コースの概要……8
　１．５　教育プログラム開発の実践から得られた教訓……10

２．教育実践報告
　２．１「イノベーション概論」教育実践報告……11
　２．２「社会システム論特殊講義」教育実践報告……13
　２．３「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト」教育実践報告……14
　２．４「仕事と現代経済プロジェクト」教育実践報告……16
　２．５「ものづくり、人づくり、地域づくり」「創造的仕事の技術と知識」教育実践報告……18
　２．６「教える経験１００人計画プロジェクト」教育実践報告……21

３．開発中の新規科目及び教育・研究基盤づくり
　３．１　新規科目「サービス経済論」の開発……23
　３．２　滋賀大学アーカイブづくりに向けた取り組み報告……25
　３．３　公共的対話システムの構築と教育実践報告……27

４．外部評価……28

５．滋賀大学経済学部の教育カリキュラムの充実に向けて……30

資料

１．　サービス・イノベーション専攻コース科目表（再掲）
２．　平成22年度サービス・イノベーション専攻コース科目講義概要
３．　コース科目履修登録者数一覧（平成21年度・22年度）
４．　平成22年度専門コース制認定実績
５．　TA/SAの任用実績（平成22年度春学期・秋学期）
６．　社会システム論特殊講義　授業内容
７．　映像関係のプロジェクト科目で学生が制作した映像作品のリスト
８．　プロジェクト科目企画申請書「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト」関係
９．　プロジェクト科目企画申請書「仕事と現代経済プロジェクト」関係（平成21・22年度）
１０．プロジェクト科目企画申請書「教える経験100人計画」（平成20年春、20年秋、21年春、21

年秋）
１１．公共的対話システムの使用例
１２．公共的対話システムの利用に関する学生アンケート

１３．申請書「産学連携により実践型人材育成事業－－－サービス・イノベーション人材育成－－－」（名称『公共的対話と知的共同作業をベースにイノベーティブな「心の習慣」と「イノベーション評価能力」を養成し、地域的競争力の強化にコミットメントする中核的人材育成事業』）

１４．成果報告会・外部評価委員会進行表
１５．滋賀大学広報誌「しがだい」関連記事（29号 p. 4-7 平成21年3月、31号 p. 10-11 平成22年3月）

1　事業の概要

只友景士（経済学科・准教授）

1．1　申請内容の概要と到達点

申請書の目標	到達点の評価・課題・今後の対応策 ●課題○今後の対応策
1．経済学部専門コース制に「サービス・イノベーション専攻コース」を新設する。 【申請書p2】	1．2010年春学期から専門コース制の一つとして、「サービス・イノベーション専攻コース」を新設した。 ●最大の課題は、コースを持続的に維持していくことである。 ○サービス・イノベーション教学調整会議を中心としたコース管理を今後もすすめる。教学調整会議のメンバーは全学科からの選出を今後もすすめる。
2．専門コース制の教育体制の充実は、①学部の既存の教育資源の活用しながらも新規科目の開発・整備を推進し、②公共的対話システムにおける相互評価（レフェリー）を経験し、４つの現場（プロジェクト科目）の知的共同作業体験を通じて、サービス・イノベーションの基礎となる「心の習慣」と「イノベーション評価能力」の養成を図るという二本柱で進める。二本柱の総合的教育体系の整備を推進することで、①サービス・イノベーションの知識・手法に関わる個々人の力量アップを図り、②「新しくしていこう、新しいものを見つけよう、創ろう」といったイノベーティブな「心の習慣」と「イノベーション評価能力」を養成し、③個人・企業の枠を超えたイノベーションを育む地域的ネットワークなど「イノベーティブな地域」を創り、地域競争力を高めていくことに主体的にコミットメントする（心の習慣を持った）中核的人材の養成をめざす。 【申請書p2】	2．専門コース制の教育体制の充実をすすめた。 ①既存科目の活用及び新規科目の開発に取り組んだ。 ②公共的対話システムにおける相互評価（レフェリー）の経験を複数の科目で、試験的に実施した。四つの現場プロジェクトについては、滋賀大学アーカイブ形成のプロジェクトは、後述の別項で触れるように開講しなかった。プロジェクト科目としては、「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト」と「仕事と現代経済プロジェクト」の２科目を開講し、この部分でプロジェクト科目の当初計画部分をカバーしていると考えている。 ●コース教育維持のために、コース選択必修科目を中心に開講を保証する必要がある。 ○教学調整会議を中心に開講に向けた取り組みを進める。
3．指定する科目表から所定の単位数（４０単位）を習得した者に対してコース認定を与える。コース認定目標数を学部定員１学年550名に対して年間200名を目標とする。 【申請書p2】	3．2010年度にスタートしているために、2010年度卒業生の段階ではコース認定者は出ていないが、在校生から１名(3回生)のコース認定が行われた。今後、年間200名のコース認定を実現するには、コース制そのものの見直しも必要になると考えられる。 【別紙資料参照】 ○コース制の再検討は、経済学部体制整備委員

	会の所管事項のため、体制整備委員会と教学調整会議との調整が必要となる。
4．公共的対話システムにおける相互評価（レフェリー）の経験の導入 【申請書p3】	4．一部の科目で試験的な相互レフェリーの経験を積むことが出来た。 ●2010年度、一部の科目でしか、実験的な相互レフェリーの経験を実施することが出来ていない。 ●公共的対話システムの操作マニュアルの整備が求められる。 ●レポートの書き方、レフェリーの作法などの教育も必要となることが判ってきた。 ○2011年度春学期中には、公共的対話システムの操作マニュアルの整備を進める。 ○2011年度、講義や大学入門セミナー等で、公共的対話システムを活用した相互レフェリーの経験を多くの学生に経験してもらう予定である。 ○レポートの書き方、レフェリーの作法など教育実践を通じて、指導体系の整備を進める。
5．外部連携新規科目の新設（案） 教養科目 ◇「創造的仕事の技術と知識ー学ぶこと、働くこと、生きることー」（仮称） 専門基礎 ◇「モノづくり、人づくり、地域づくり」（仮称） ◇「リスク基礎」（仮称） 【申請書p3】	5．外部連携新規科目の新設を行った。 「創造的仕事の技術と知識ー学ぶこと、働くこと、生きることー」は、「教養科目」ではなく、「専門科目」として科目を配置し、科目名称も「創造的仕事の技術と知識」とした。 「創造的仕事の技術と知識」「ものづくり、人づくり、地域づくり」の2科目を2009年度秋学期に開講した。申請書段階では、2科目ともそれぞれ15回2単位を考えていたが、実施可能性を考慮して、「創造的仕事の技術と知識」「ものづくり、人づくり、地域づくり」の2科目合同で開講し、それぞれ1単位の2科目として開講した。 「リスク基礎」は、「リスクマネジメント基礎」に名称変更。「モノづくり、人づくり、地域づくり」「創造的仕事の技術と知識」「リスクマネジメント基礎」は、学部共通専門科目の「その他科目」に配置した。 ●コース教育維持のために、コース選択必修科目を中心に開講を保証する必要がある。（再掲） ○教学調整会議を中心に開講に向けた取り組みを進める。（再掲）
6．現場重視のプロジェクト科目 【申請書p3-4】	6．「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト」は、2008年秋学期から開講し、5セメスター連続で開講してきた。「仕事と現代経プロジェクト」は、2009年度、2010年度と

	2年連続で開講した。 ●特任教員の雇用継続が出来ないために、今後の開講の在り方を検討する必要に迫られている。 ○教学調整会議を中心に開講に向けた取り組みを進めるとともに、本部からの事業継続費を活用した代替的な開講方法を検討し、実施する。
7．基礎文献研究 【申請書p5】	7．特段の取り組みは行わなかった。
8．インターンシップ 【申請書p5】	8．特段の取り組みは行わなかった。
9．「サービス・イノベーション専攻コース教育調整会議」を設置 【申請書p5】	9．「サービス・イノベーション専攻コース教育調整会議」を設置し、執行体制を確立した。 ○サービス・イノベーション教学調整会議を中心としたコース管理を今後もすすめる。教学調整会議のメンバーは全学科からの選出を今後もすすめる。（再掲）
１０．「教える経験１００人計画」 【申請書p5】	１０．プロジェクト科目「教える経験１００人計画」の開講、コアセッションＴＡ・ＳＡ、プロジェクト科目のＳＡなどにより、７１名（2010年度）の教える経験を実現した。 この他に、プロジェクト科目内では、非公式な教える経験を随所に埋め込んで実施した。
１１．４つの現場から外部評価委員会 【申請書p5】	１１．2010年度だけ外部評価委員会を開催した。 ○2011年度中の文部科学省とサービス・イノベーション推進会議による事後評価点検への準備もすすめなければならない。今後は、外部評価委員会からの指摘事項も踏まえ、事業推進体制の維持検討を進める。なお、2011年3月段階で、経済学部執行部から支援と協力を惜しまないとの確約を得ている。
１２．公共的対話システムによる学生も参加した評価コミュニティの形成 【申請書p5】	１２．システム自体の開発と試行をすすめてきた。しかしながら、公共的対話システムによる評価コミュニティの形成までには到らなかった。 ○2011年度、講義や大学入門セミナー等で、公共的対話システムを活用した相互レフェリーの経験を多くの学生に経験してもらう予定である。

	（再掲）
１３．予算 公募要項によると1件3000万円程度であった。そのため平成20年度申請書では、2974万円を要求した。3000万円程度の予算配分を3年間受けることを想定して事業計画を作成した。	１３．予算 平成20年度配分額（委託事業）20,576,097円 平成21年度配分額（補助事業）15,254,500円 平成22年度配分額（補助事業）14,990,980円 実際の予算配分は、初年度から2000万円程度と申請額の3分の2程度しか配分されなかった。予算が削減されたために当初計画の事業の一部を実施することが出来ない部分もあった。また、平成22年度には、事業仕分けにより廃止と判定された。 ●これまで、本省補助金で実施してきた特任教員に関わる事業部分の継続が困難になる。 ○平成23年度以降は、大学本部から140万円程度の事業継続費を2年間継続してもらう予定である。この予算を有効に利用して事業継続を図る。

1．2　事業採択の経緯と略年表

2008年（平成20年）　4月30日　申請書提出締切
2008年（平成20年）　7月18日　面接審査
2008年（平成20年）　9月 1日　平成20年度採択校発表・事業準備開始

2008年（平成20年）10月1日
・土江真樹子特任准教授採用
・秋学期講義から試験的講義の先行実施
・「社会システム論特殊講義（授業題目：ジャーナリズム論）」
　・プロジェクト科目「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト2008」
　・プロジェクト科目「教える経験100人計画」

2009年度　新規科目の開講

2010年度　サービス・イノベーション専攻コースの正式立ち上げ
　・滋賀大学経済学部の専門コース制（認定コース制）の一つとして、コース設置。

注：　専門コース制とは、卒業要件ではないが、学科とは別に一定の専門的・体系的な知識を習得したことを認定するもの。卒業証書には記入されないが、成績表（成績証明書）等には、認定されたコース名が明記される。

１．３　教育プログラム開発の状況

■事業進行の状況と基本戦略

・土江特任准教授が担当する「社会システム論特殊講義（授業題目：ジャーナリズム論）」、プロジェクト科目「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト」の２科目を2008年10月からの秋学期に開講。

・大濱・弘中が中心となり、プロジェクト科目「教える経験100人計画」を2008年10月から開講。「教える経験」「人前で話そう」などの名称で４セメスターで開講。

・2009年度から「現場重視のプロジェクト科目」の開発、外部連携科目「ものづくり、人づくり、地域づくり」「創造的仕事の技術と知識」の開発

→現場重視のプロジェクト科目「仕事と現代経済プロジェクト2009」の開講と外部連携科目「ものづくり、人づくり、地域づくり」「創造的仕事の技術と知識」の開講。

・2009年度からその他の科目開発に本格的に取り組む。

・土江特任准教授が担当する「社会システム論特殊講義（授業題目：ジャーナリズム論）」、プロジェクト科目「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト」の２科目の先行的開講など映像制作に関わる講義により、イノベーション全般及びＳＩへの学生の関心を惹き付ける先行的な取り組みとして位置づけ。

■本事業により開発された新規科目等は下記の通りです。

・サービス・イノベーション専攻コース教育の中核科目。

・下記の科目７科目から４科目６単位以上取得。

［１－３］サービス・イノベーション教育のために必要とされる新規開講科目

・「サービス経済論」→2011年度開講予定

・「サービス・イノベーション事例研究」

→2011年度開講非常勤講師の水野由香里氏（西武文理大学・専任講師）による集中講義で開講予定。

・「イノベーション概論」

→2010年度開講済み、2011年度も開講予定。

［４－６］外部連携科目（新規開発）

・「創造的仕事の技術と知識」

→2009年度より開講

・「ものづくり、人づくり、地域づくり」

→2009年度より開講

・「リスクマネジメント基礎」

→未開講科目、2011年度集中講義による開講を検討

［７］学部指定のプロジェクト科目（既存科目の活用）

・プロジェクト科目「仕事と現代経済プロジェクト」

・プロジェクト科目「教える経験プロジェクト」

・プロジェクト科目「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト」

■本事業により開講された特色的科目

・特任教員（土江真樹子特任准教授）が担当した開講科目

・「社会システム論特殊講義（授業題目：ジャーナリズム論）」

・「社会システム論特殊講義（授業題目：現代のジャーナリズム）」

・プロジェクト科目「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト」

・特任教員（土江真樹子特任准教授）の支援により開講可能となった科目

・「創造的仕事の技術と知識」

・「ものづくり、人づくり、地域づくり」

・プロジェクト科目「仕事と現代経済プロジェクト」

■本事業により開発されたシステム

・公共的対話システム

１．４　滋賀大学経済学部サービス・イノベーション専攻コースの概要

■『滋賀大学経済学部　講義概要』掲載内容

【コースの概要】

サービス経済化した現代経済をさまざまな角度から眺め、サービス科学の基礎知識を学際的に習得します。あわせて、常に革新的なことを考える習慣（イノベーティブな「心の習慣」）とそうしたイノベーションを評価できる能力を養成します。

【将来の進路・職業・取得可能な資格】

イノベーションと関わる全ての職業(例：サービス分野をはじめとするあらゆる分野で生産性向上や変化に寄与する人材、技術マネージャー、会計士、公務員、ジャーナリスト、社会的起業家など)

サービス・イノベーション専攻コース科目表

修了要件及び単位数	科目区分、授業科目名及び単位数		備考
コア選択必修科目	コア科目	統計学Ａ	８科目１６単位から４科目８単位以上取得
		統計学Ｂ	
		ミクロ経済学Ａ	
		ミクロ経済学Ｂ	
		経営学	
		簿記会計Ａ	
		簿記会計Ｂ	
		科学方法論	
コース選択必修科目	その他科目	サービス経済論	7科目から4科目6単位以上取得
		サービス・イノベーション事例研究	
		イノベーション概論	
		ものづくり、人づくり、地域づくり	
		創造的仕事の技術と知識	
		リスクマネジメント基礎	
	プロジェクト科目	学部指定のプロジェクト科目	
選択科目	経済学科	情報とリスクの経済学	コア選択必修科目、コース選択必修科目と合わせて40単位以上取得
		産業政策論	
		産業組織論	
		応用統計学	
		数理統計学	
		計量経済学Ⅰ	
		計量経済学Ⅱ	
		地域経済論	
	企業経営学科	近江商人経営論	
		流通システム論	
		マーケティング論	
		ブランドマネジメント	
		企業と文化	
	ファイナンス学科	金融のミクロ経済学Ⅰ	
		ファイナンス基礎数学	
		ファイナンス数学	
		ベンチャーファイナンス論	

	情報管理学科	データベースシステムⅠ	
		データベースシステムⅡ	
		経営システムの数理Ⅰ	
		経営システムの数理Ⅱ	
		経営情報システム設計論Ⅰ	
		経営情報システム設計論Ⅱ	
		マルチメディア情報処理	
	会計情報学科	管理会計総論Ⅰ	
		管理会計総論Ⅱ	
		財務諸表分析論Ⅰ	
		財務諸表分析論Ⅱ	
	社会システム学科	マス・メディア論	
		産業心理学Ⅰ	
		産業心理学Ⅱ	
		消費者心理学Ⅰ	
		消費者心理学Ⅱ	
		科学哲学Ⅰ	
		科学哲学Ⅱ	
		認識論Ⅰ	
		認識論Ⅱ	
		認知心理学	
		行動科学Ⅰ	
		行動科学Ⅱ	
		文化人類学	
		社会システム論特殊講義（学部が指定したもの）	
	実践・体験科目	現代の経済	
		現代の経営	
		リーダーシップ論	

備考：2010年3月1日現在

１．５　教育プログラム開発の実践から得られた教訓

①学生参加による講義の構築

「ものづくり、人づくり、地域づくり」・「創造的仕事の技術と知識」・プロジェクト科目「仕事と現代経済プロジェクト」の連携実践により、学生参加による講義企画が可能であることが実証されるとともに、学生満足度も高い講義を構築することができた。

②知的共同作業による社会力の養成

一連のプロジェクト科目による知的共同作業を通じて、学生に主体的に学習する「心の習慣」、より良いモノをつくろうとするイノベーティブな「心の習慣」を身につけさせることや学生の総合的なコミュニケーション能力を向上させることができた。また、外部連携科目や現場重視のプロジェクト科目との相互作用により、「気づき」と「行動力」の重要性について、自覚する学生が多く生まれたこと、他者への「共感力」の養成など一部の学生には、「知性のビッグバン」を起こすこともできた。こうした経験や学生を観察する中から人材育成には、普遍的に修得可能な技能的知識と技能的知識を超えた「知性」の養成と二面があるのではないかと考えている。

③外部講師の活用等による学生の問題意識の涵養

本プロジェクトでは、多くの外部講師の登壇を願うことが多かった。「社会システム論特殊講義」では、現役のジャーナリストが様々な社会問題について講演する機会を設けた。「ものづくり、人づくり、地域づくり」・「創造的仕事の技術と知識」では、経済界や様々な分野のプロフェッショナルの人びとの仕事に関わる講義をしていただいた。こうした取り組みから通常講義では養うことが難しい、学生の問題意識の涵養を進めることができ、学生の勉学上の問題意識の明確化に貢献できた。

④公共的対話システムの運用により、学生同士の相互レフェリーの経験をさせることが出来た。学生からは、「今までにない経験で面白かった。」「他の人からのコメントをもらってうれしかった。」「レポートの書き方を研究することが出来て良かった。」などの評価があった。レポート作成の指導やコメントの作法など今後指導指針を検討する必要性も痛感したところである。

⑤イノベーション研究への関心の拡がり

サービス・イノベーション専攻コース教育の構築のための学内の様々な教育上の取り組みから従来の経営学アプローチ以外からのイノベーションへの関心が高まった。例えば、公共政策との関連から「イノベーションと市民社会」への関心、イノベーションの質を考える「スロー・イノベーション」の考察などである。

また、「サービス経済論」の開発に関わり、経済学・経営学からのサービスに関する議論にとどまらない講義内容の検討を進めている。この科目開発により、諸学の中で「サービス」がどのように扱われているのかを整理・横断的に見渡せる視点を提供できるのではないかと考えている。

⑥今回、文部科学省からの競争的資金を受けることによって、学部内の教育改革の進展に大いに効果があった。しかしながら管理コストがかかるために事務的な労力が多大であったことも否めない。また、残念ながら大学の事務手続き等において外部講師等との揉め事も発生し、外部講師招待者が板挟みで困ったことも発生した。

2　教育実践報告

2．1　「イノベーション概論」教育実践報告

陳韻如（企業経営学科・准教授）

1　当該講義のねらい

イノベーションは企業・産業の盛衰や国の経済成果を大きく左右します。本講義は技術という側面から、イノベーションがどのように発生・普及し、どのように企業・産業の存続や国の経済に影響を与えるかについて学びます。そのねらいは、以下の3点です。

1）受講者がイノベーションの基本概念を身に付けること。
2）受講者にイノベーションに関する視点や枠組みを提供すること。
3）受講者が企業のイノベーションマネジメントの仕組みを理解すること

2　実際の講義プログラムの具体的内容

（*月曜日開講。実際の講義プログラムはほとんどシラバス通りに行われました）

第1回　（10月4日）　イントロダクション（イノベーションとは）
第2回　（10月18日）イノベーションの歴史
第3回　（10月25日）ドミナントデザイン
　　（11月1日）　学生イベントのため休講
第4回　（11月8日）　イノベーションと産業革新
第5回　（11月15日）イノベーションの普及
第6回　（11月22日）イノベーションのパターン①
第7回　（11月29日）イノベーションのパターン②
第8回　（12月6日）　イノベーションと企業戦略①
第9回　（12月13日）イノベーションと企業戦略②
第10回　（12月20日）新製品開発マネジメント
　　（12月24日）休講
第11回　（1月17日）　イノベーションと企業間システム
第12回（1月24日）イノベーションのジレンマ

3　講義の概要と教育上の効果として評価できる点

【講義の概要】

講義内容は、大きく2つの部分から構成されています。

1）イノベーションはどのようなものかを扱う部分です。ここでは、イノベーションの特質や、歴史、普及メカニズム、パターン等のイノベーションの基本について紹介しました。
2）企業のイノベーションマネジメントを検討する部分です。イノベーションは様々な側面に影響を与えますが、本講義は企業の視点に立ち、企業は如何に主体的にイノベーションと関わっていけるのかを説明しました。具体的に、イノベーションにまつわる企業戦略、マネジメントプロセス、外部資源の利用などのトピックスを挙げました。最後は、イノベーションが企業にもたらすプラス効果だけでなく、マイナス効果も存在するということを紹介し本講義を締めくくりました。

【教育上の効果】

ミニッツペーパーから読み取れる本講義の教育上の効果は、まず、受講生がイノベーションの基本的なありさまを理解したことが挙げられます。第2に、事例を取り入れてYoutubeなどのメディアを用いて説明したことで、イノベーションが身近に存在していることを受講者に認識させることができ、彼らのイノベーションへの関心を高めたと思われます。

4　講義実施上の課題及び今後の課題

1)　講義内容の修正

本講義は様々なバックグランドを持つ受講者に理解してもらうために講義内容の難易度の設定が難しいと感じました。また、本講義の内容はほかの経営関係科目の内容と重複するところがあるようです。いずれにしても、今後の講義内容は科目の位置づけやほかの科目との関係をもっと意識しながら修正する必要があると考えます。

2)　事例を分析する能力の養成の必要性

講義では一方的な解説に留まる感じがしました。受講者に実際の事例について自ら考えてもらい、物事を分析する能力を身に付けさせることを今後の課題にしたいと思います。

２．２　「社会システム論特殊講義」教育実践報告

土江真樹子（特任准教授）

１ 講義のねらい

新聞、テレビといったメディアとはどのようなものなのかを理解することによってメディアとのつきあい方（メディアリテラシー）を学ぶ。ジャーナリズムやメディアリテラシーを「論」としてだけでなく、身直なものとして現実感を持って自身の関わりや視点を身につることを目標とする。また毎回レポートを提出することによって「考える」「分析する」「書く」力を養う。

２ 実際講義プログラム内容

別紙参照

３ 教育上の効果

・ 新聞社、テレビ局、制作プロダクション、フリーランスといった多様なメディアの一線で活躍する人たちを外部講師として招聘し「現場の生の声」を聞く機会を持った。「貴重な体験だった」と評価した。
⇒日頃接することがない「メディアの現場」を、現実感を感じながら触れる機会を得る。
・ 最小限の資料のみ配布。
⇒「話を聞く「メモを取る」技術の習得
担当教員および外部講師と講義の中で議論する場を作り出す。
・ 授業内容と「リサーチ」「分析」「自身の視点」を盛り込んだレポートを毎週の提出。
⇒「考える」力を養う。
多くの学生が「感想」ではなく「分析」「視点」をレポート化できるようになった点を評価したい。
・ ドキュメンタリー（ドキュメンタリーを見ない、見たことが無いという学生が毎学期の最初には多い）を見る
⇒多様な視点、表現方法を学んだ。
・ 地方紙、中央紙の新聞を読み比べる。
⇒新聞の読み方、メディアの意図、伝え方を学んだ。

４ 講義実施上の課題及び今後の課題

近年、新聞やテレビ離れが進んでいる。携帯やインターネットの情報への依存や信憑性ということに対する疑問を持たない状況がある。このような状況下で学生に興味を持たせてメディアリテラシーの基礎を身につけさせるための機会が必要であると痛感する。ニュース、報道を自身の身直な情報として考える姿勢を育てる授業が求められる。

２．３　「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト」教育実践報告

土江真樹子（特任准教授）
井手一郎（ファイナンス学科・准教授）

1 講義のねらい

・きわめて汎用性が高い映像技術・映像メディアへの習熟。
・映像作品を作るまでのプロジェクト過程が持つ実践的作業遂行能力の育成。チームとし映像作品を仕上げることを通じる、チームワークや統率力の育成。年長者へのインタヴュー等を通じる多角的なコミュニケーション能力の育成。
・合評会への参加等を通じる評価能力の育成。大学や地域など、取材対象への理解の促進。

2 講義プログラム内容

企画、リサーチ、構成など全体に関わる指導・・・土江真樹子（本学・特任准教授）
撮影指導　・・・言美幸一氏（ニュースタイムジャパン）
　　山本勝英氏（キッズカンパニー）
編集指導　・・・岡田勉氏（INE’X）
　　別所順平氏（キッズカンパニー）

学生の制作作品は別紙。

3 教育上の効果

・映像制作の企画を構築するためのリサーチ、企画力の育成。
・映像制作をするためのスキルの修得。（テーマ設定、撮影、構成、編集技術）
・取材申請や交渉を経験することで社会との関わりを習得した。
　コミュニケーションスキルを磨く。

・主要な作品と評価点
「ネマニャくんが教えてくれたこと」
　共感力を磨き、自身のなかの能力の再発見を行った。「平和協同ジャーナリスト基金」
　最終選考にノミネートされた。
「俺たちのガンバ」
　Final Cut Pro と Photo Shop の技術を習得し、技術を最大限生かした映像表現。
「彦根散歩」
　制作者がインタビューする側とされる側のコミュニケーションに注目、気付かされた作品。
「ヴォーリーズ建築を訪ねて」
　第３回デジタル映像コンテスト（びわ湖 e-まち映像協議会主催）努力賞を受賞。
　美しい映像制作を行った。
「Achaper」
　学生が起業したＴシャツショップ（オンライン）のためのＰＶを制作。映像から訴える、という視点に特化した。
「滋賀大７不思議」
　滋賀大学を紹介するのに「ホラー」というアプローチを使うという実験的な試みを行った。
「祖父母の記憶」　「おばあちゃんの子供のころ」
　聞き取る能力を育成した作品。世代を超えた問題意識を表現した。

学生にとっては初めての映像作品であったが中にはプロ並みのカメラワークやドキュメンタリーとして視点が優れたものなどもあり、映像を通して表現する自分の能力に学生自らが驚くものも多

かった。

4　講義実施上の課題及び今後の課題

・ほとんどの学生が映像初心者であるため15回ほどの講義から映像作品を作り上げることが難しい。授業外に面談、メール、電話などでの細かな指導が必要となった。学生も講義時間のみでの制作は難しく、時間外の制作を余儀なくされた。特に、テーマ設定、構成、ナレーション制作には指導時間がより必要となる。映像には興味があっても時間が必要であることや短時間に完成できないことから安易な考えで試みた学生は作品を完成させることができないケースがある。
・作品の上映について「学内での上映に限る」という条件の下で取材に応じていただけるケースが少なくなかった。上映を完全に管理するためには、映画館あるいは上映室の確保が望まれる。また、ドキュメンタリー以外の映像については、映像や音声の加工によって作品の現実性を低める技術（例えば、自動アニメ化）も上映の機会を増やすために活用できるかもしれない。
・映像や音響の解析技術・解析装置の本格的な導入が望まれる。
・映像の知的財産権に関して、人材の戦略的な充実が望まれる。
・純粋な映像作品とは言えないが、文章レポートに動画を埋め込むタイプの動画レポートも、多様な分野で活用できる可能性がある。

２．４　「仕事と現代経済プロジェクト」教育実践報告

只友景士（経済学科・准教授）
土江真樹子（特任准教授）

１　当該講義のねらい

「サービス経済の現場プロジェクト」の一つとして、「映像の現場プロジェクト」との共同企画として、「仕事と現代経済のプロジェクト」を立ち上げる。本プロジェクトは、外部連携新規科目「創造的仕事の技術と知識」と「モノづくり、人づくり、地域づくり」の講義の企画・運営も含めた共同調査研究プロジェクトである。講義で使用する教材の制作を行うとともに、講義時の映像と映像教材は、web を通じた公開を行うとともに映像アーカイブズとして蓄積することを目的とする。

２　実際の講義プログラムの具体的内容

サービス・イノベーション人材育成事業の「現場重視のプロジェクト科目」の一つである。このプロジェクト科目は、外部連携科目「モノづくり、人づくり、地域づくり」及び「創造的仕事の技術と知識」の２科目の企画・調査を本学教員と共同研究を行うプロジェクト科目である。共同研究の成果に基づき、「モノづくり、人づくり、地域づくり」「創造的仕事の技術と知識」の講義で使用する映像教材を制作する。そして当該講義の記録（アーカイブ化）もおこなう。
「障害者雇用」
「産業とデザイン」（トネリコ　産業デザイン）
「菓匠禄兵衛～木之本からの挑戦～」（菓匠禄兵衛　製菓業）
「文系にとってのイノベーション」戸田一雄氏（松下電器産業（株）元副社長・滋賀大学特任教授・本学 OB）
「全ては夢のために」（日本電産株式会社　製造業）
「ソーシャル・アセット」（ソーシャル・アセット　不動産業）（講義では上映せず）
以上６作品が完成。

2010 年度
「日本電気硝子～人とガラスをつなぐもの～」（日本電気硝子株式会社　製造業）
「ホロニック～コミュニティホテルへの挑戦～」（株式会社　ホロニック　ホテル業）
「たねや―伝統からの革新―」（株式会社　たねや　製菓業）
「ＦＣ岐阜」（ＦＣ岐阜　プロスポーツ球団）（講義では上映せず）
以上４作品が完成。上記完成チームに加えて、「麗光　製造業」「滋賀大学彦根地区生協食堂　食堂・協同組合」「黒壁（滋賀県長浜市）　まちづくり会社」の取材取り組みを行うも完成には至らず。

３　講義の概要と教育上の効果として評価できる点

外部連携科目「創造的仕事の技術と知識」「ものづくり、人づくり、地域づくり」への企画運営への学生参加を進めるためのプロジェクト科目として開講した。

「仕事と現代経済プロジェクト」の第一の成果は、「創造的仕事の技術と知識」の外部講師、「ものづくり、人づくり、地域づくり」協力の企業への取材・調査研究を行い、講義で使用する映像教材の制作を行ったことである。「仕事と現代経済のプロジェクト」の受講生らは企業分析を行ったり、協力企業の広報課を通じた実際の取材依頼を行ったり、企業人らへのインタビューを行ったりしたことを通して貴重な体験を得る事ができた。さらに取材映像素材を活用し、映像教材を制作した。プロジェクト科目の受講学生が制作した映像教材を「創造的仕事の技術と知識」「ものづくり、人づくり、地域づくり」の講義に提供することができた。これらの作品はドキュメンタリーとして、企業分析として優秀なものもあり、今後の成長が期待できる。

受講学生は、一連の知的共同作業を通じて、主体的に学習する「心の習慣」、より良いモノをつくろうとする「心の習慣」を身につけること、総合的なコミュニケーション能力を向上させることがで

きたことが第二の成果である。また、共同研究の成果として、障害者雇用と経営上のイノベーションに関わる知見、商品開発における市場の声と技術のリンクに関する知見などを取材の中で学生が発見してきたことは第三の成果として特筆すべきである。本プロジェクトの取材成果に基づいて制作され、講義に活用した一連の映像教材および講義における講演の模様などは、今後、映像教材としてアーカイブ化する予定である。

第四の成果としては、教育プログラムとして、プロジェクト科目「仕事と現代経済プロジェクト」と外部連携科目「創造的仕事の技術と知識」「ものづくり、人づくり、地域づくり」の連携した教育の仕組みを構築することができたことである。また、本プロジェクト科目を通じて、協力企業との産学連携による教育プログラムの開発を進めることができたことも有益な成果である。

4　講義実施上の課題及び今後の課題

・取材先企業の開拓から取材企業とのコーディネーター機能、企業研究の取材から映像教材に仕上げていく全プロセスにおいて、担当教員の負担が大きい。
・申請書段階では、映像教材のweb公開まで検討していたが、教材の権利関係が複雑で、web公開はもとより、他大学利用をする際にもクリアーすべき課題が多い。

２．５「ものづくり、人づくり、地域づくり」「創造的仕事の技術と知識」教育実践報告

只友景士（経済学科・准教授）

１　当該講義のねらい

「ものづくり、人づくり、地域づくり」

本講義では、製造業に限らずサービス産業など多様な企業による講義を計画しています。多様な企業から「製造・営業の戦略」「人的資源管理の戦略」「財務戦略」を講義していただくことを通じて、現代企業戦略、産業ごとの戦略特性を学ぶことを第一のねらいとしている。そして、第二のねらいとして、製造業のサービス化、サービス経済化、グローバル化の中でのイノベーションの源泉を探ります。また、あわせて企業の地域貢献の在り方も議論します。本講義は、企画段階からプロジェクト科目「仕事と現代経済プロジェクト」と連携している学生参加型科目です。

「創造的仕事の技術と知識」

社会の各方面で活躍中の方々を講師としてお招きして、創造的な仕事を支える技術と知識の身につけ方などを講義していただきます。本講義は、企画段階からプロジェクト科目「仕事と現代経済プロジェクト」と連携した学生参加型科目であり、講演形式もしくはインタビュー形式で進行する。本講義では、プロが仕事のノウハウをどのように形成し、伝承しているのかといった点に着目し、その秘密を学ぶことを第一のねらいとしている。様々な仕事の具体的事例の検討を通じて、仕事やサービスの質的向上・効率性向上にとって何がクリティカルなのかを明らかにしていくことも第二のねらいである。

２　実際の講義プログラムの具体的内容

2009年度（※は、学生制作の映像教材あり）

開講ガイダンスの後、講師を招聘した。

10月20日　澤地久枝氏（ノンフィクション作家）
「歴史への近づき方～澤地久枝・人生の生き方～」

10月27日　高橋信二氏（滋賀県中小企業家同友会）※
「障害者雇用とイノベーション」

11月10日　君塚賢氏（トネリコ）※
「産業とデザイン」

11月17日　山田将志氏（ニューロ・スカイ・本学3回生）

11月24日　居川信彦氏（菓匠禄兵衛・代表取締役）※

12月 1日　渡部隆夫氏（ワタベウエディング株式会社・会長）
「変化の中の創造」

12月 8日　藤本祥徳氏（コクヨマーケティング株式会社）
大西達也氏（コクヨマーケティング株式会社）

12月22日　戸田一雄氏（松下電器産業（株）元副社長・滋賀大学特任教授・本学OB）※
「中村改革とV商品づくり」

2010 年

1月12日　井上仁氏（日本電産株式会社・滋賀技術開発センター所長）※
「製造業の開発戦略」

1月19 日　中野桂氏（滋賀大学経済学部・教授）
「スロー･イノベーションを考える」

2010年度

10月 5日　開講ガイダンス

10月12日　元川美雪氏（神戸市産業振興財団）「ベンチャービジネスを支援する」

10月19日　学内ゼミナール大会のため休講

10月26日　冨田直子氏（「記憶の銀行」日本代表）
11月 2日　黒田福美氏とアリカワコウヘイ！氏について紹介する講義
11月 9日　黒田福美氏（俳優）
11月16日　アリカワコウヘイ！（画家）「アリカワコウヘイ！の仕事」
11月30日　井筒雄三氏（日本電気硝子株式会社・会長　製造業）「企業―継続こそ使命」（学生制作映像教材あり）
12月 7日　NHKスペシャル「スモールハンドレッド」を観る。
12月14日　久保田裕氏（コンピューターソフトウエア著作権協会・専務理事）
12月21日　「学生制作の映像作品を観よう！公共的対話システムで議論しよう」2009年度プロジェクト科目「仕事と現代経済プロジェクト2009」制作の4本の映像教材を観て、公共的対話システムで議論しました。
①菓匠禄兵衛(滋賀県長浜市木之本町)
②日本電産株式会社(京都市)
③戸田一雄氏（松下電器株式会社元副社長・滋賀大学特任教授・経済学部OB）
④障害者雇用

1月11日　大石尚子氏（スロー・クローズ運動家）「スロー･クローズの挑戦」
1月18日　長田一郎氏（株式会社　ホロニック　ホテル業）（学生制作映像教材あり）
映像教材「株式会社ホロニック―コミュニティ・ホテルの挑戦―」
1月25日　川嶋民親氏（たねや近江文庫・理事長）（学生制作映像教材あり）
映像教材「たねや―伝統からの革新―」

3　講義の概要と教育上の効果として評価できる点

・外部連携科目「創造的仕事の技術と知識」「ものづくり、人づくり、地域づくり」を開講し、企業の現場の生の声を聞いたり、プロフェッショナルの仕事の仕方、その技術と知識の身につけ方に触れたりする機会をつくることができた。企業の現場でイノベーションがどのように起きているのかといったことに関して、企業の現場の生の声を聞くことにより、学生は製造やサービスの現場への具体性のある知的関心を持つことができた。また、サービス・イノベーション専攻コース科目を始め、経営学・経済学の関連する科目における教育内容との関連性を学生自身が自覚するようになり、これまで学んだ経済学･経営学の知識の統合的な理解・鳥瞰的な理解をすすめる効果がある。
・プロジェクト科目「仕事と現代経済プロジェクト2010」と連携しながら講義を展開した。企業や各方面の専門家を外部講師として招聘し、多様な産業や専門家の知識と技術の修得のプロセスなどを講演して頂いた。
・教育上の効果としては、学生の講義レポートから読み取れる点として、①イノベーションへの学生の関心を飛躍的に高めた点、②各講義から「気づき」と「行動力」の重要性について感銘を受けている点などが挙げられる。

4　講義実施上の課題及び今後の課題

・申請書段階では、「創造的仕事の技術と知識」「ものづくり、人づくり、地域づくり」の2科目をそれぞれ15回2単位と計画していたが、15回ずつ2科目運営することが実施上難しく、2009年度、2010年度ともに合同講義の形で開講した。今後この2科目を別々に開講するには、相当の人的資源を投入する必要がある。現実的には、7回と8回の合計15回で、合同講義とするのが実施可能性からは妥当な範囲であると考えられる。
・プロジェクト科目「仕事と現代経済プロジェクト」が講義の企画に参画することで、学生参加の講義を実現できた点は特筆に値する。しかし、全ての講義コマに対して、「仕事と現代経済プロジェクト」から映像教材を提供することは出来なかった。2009年度は5つの講義に提供したが、2010年度は講義に提供できたのは3件に留まった。
・この科目は、プロジェクト科目「仕事と現代経済プロジェクト」とのセットによる開講が必要である。そのため、継続的に開講するには、講義負担を勘案した専任教員の配置と映像制作に関わる特

任教員等の配置等の措置が必要である。

2．6　教える経験100人計画プロジェクト教育実践報告

大濱厳（経済学科・准教授）
弘中史子（企業経営学科・教授）

1　講義のねらい

「教える」という行為は，相手の立場・理解度に合わせて表現・伝達する行為であり，それをするには教える内容以上のことを理解していないと不十分である．本プロジェクトは「教科を教える」「自分の考えを伝える（教える）」という経験を通じて，「どのようにすればよりわかりやすい授業，スピーチになるのか」ということを学生自身に考えさせることが主題である．その際受講生は教える（話す）相手の立場・理解度を客観的に分析するだけでなく，自身の理解度やそのテーマに対する考察を深めることもでき，そしてこのことがよりわかりやすい授業・スピーチにつながっていく．これは言うならば「教える側と教わる側のイノベーションサイクル」であるが，受講生にそれを実感させサービス・イノベーションを実現する能力の向上につなげることが本プロジェクト科目のねらいである．また受講生同士にお互いの授業・スピーチを評価させることにより，イノベーション評価能力を養うこともねらいとしている．

2　講義プログラムの具体的内容

本事業においてこのプロジェクト科目は内容，形式を変えながら計4回開講された．各回の概要は以下のとおりである（詳細は別添資料（プロジェクト科目申請書）を参照）．

・H20秋「教える経験100人計画　ー話す力・教える力を育むー」
「教える」という経験を通じて，相手の立場・理解度に合わせて表現・伝達すること，そのためには教えること以上の理解と十分な準備が必要であることを体感させた．授業は座学（話し方，板書の仕方など基本的なこと）と実習（教える経験）をほぼ半々で行った．

・H21春「人前で話そうプロジェクト　ー教える経験100人計画Ⅱー」
様々なテーマ・条件下で「話す」ことを体験させることを主目的とした．それは前回のプロジェクト科目を通じて「教科を教える」以前の「人前で話す」という力の育成も必要であるという考えにいたったからである．受講者同士も評価を行うことによって，より様々な意見（フィードバック）を得られるようにした．

・H21秋「教える経験100人計画Ⅲ　ー話す力・教える力を育むー」
目的・内容はH20秋のものと同じであるが，座学の回数を減らし短期集中型とした．実習の回数を増やすことにより反省点を次の実習にいかせるようにした．

・H22秋「相手に理解してもらうための技法　ー教える経験100人計画Ⅳー」
H21春のプロジェクト科目よりも「相手に理解してもらう」ということを強調した内容とした．学生のスピーチを録画しそれを学内のLMSで閲覧やコメントを記入できるようにしたことにより，受講生は自身のスピーチを客観的に見て問題点の発見・改善をすることができた．
なお4回とも上回生をサポートにつけ，自身の就職活動や学習アシスタント（本学独自の制度で，問題演習クラスを担当する教務補助員）としての経験を受講生である後輩にアドバイスしたため，受講生のモチベーションをあげることができた．また実習の様子の録画はH22秋だけではなくその他の時でも一部取り入れていた．

3　講義の概要と教育上の効果として評価できる点

講義の概要は資料10を参照のこと．教育上の効果としては以下のような点が挙げられる．
・普段は意識しない「話す」「教える」ということを意識させることによって自己改革のきっかけと

なった.

・他者を評価することによって評価する際の注意点，適切な評価方法（コメントの仕方）などの評価能力が向上した.

・ほとんどの学生に不足している「人前で話す（パブリックスピーキング）」という経験を積ませることができた.

・人前で話すことが苦手という学生に自信を持たせることができた.

・一般的なプレゼンテーション能力が向上した.

・副次的効果ではあるが，このプロジェクト科目を受講した2回生の多くが，次の春学期に学習アシスタントになった（H20秋：12名中8名，H21秋：10名中8名，H22秋：10名中7名）.

4　講義実施上の課題及び今後の課題

・実習主体の授業なので多くの受講生を受け入れることができない（1クラス16名が限界か）．その一方適切な指導をするためには複数の教員や学習アシスタントの手を借りる必要があり，どうしても「ハイコスト」な授業となってしまう.

・本当であれば50人前後の人の前で話す・教える経験を積ませたいが，上記理由からそれができない.

・2回生くらいの段階でのこのような科目（人前で話す経験を積ませる科目）を受講させたほうがよいのだが，「プロジェクト科目」という形式では多くの学生を受講させることはできない.

・話す力・教える力がどれだけ向上したのかという判断は，自己評価にしても他者からの評価にしても判断者の主観的なものでしかありえない.

3　開発中の新規科目及び教育･研究基盤づくり

3．1　新規科目「サービス経済論」の開発

井手一郎（ファイナンス学科・准教授）

「サービス経済論」の講義内容の概略について、現時点での基本的な考え方を記します。

Ⅰ．　基本戦略

11. サービス科学という単一の専門分野の樹立を目指すのではなく、諸学を動員して現実の分野横断的な課題に取り組むことができるように、個別科学を「開く」ことが重要。諸学を総合的に使っていく練習の場として、プロジェクトを位置づけ、教室での講義と関連させる。
12. 本学は経済学部であるので、経済学の教育内容の改革が主要な課題。理論としては金融契約理論の発想が手がかりになる。学部の授業では、分析手法とともに、イノベーションを支える基本的な価値観・世界観を伝えることが重要。
13. プロジェクトの準備として、教室で確認できる内容は教室で講義しておく。分析、総合、説得、評価などの意義と手順を明確にする。

Ⅱ．　主要内容

21. 仕組みの設計と契約。
- 投入から産出までを生産関数で要約するような教科書的なミクロ経済学に対して、それとは異なる系列として金融契約理論を位置づける。例えば、金融契約の一例として保険契約を考えると、保険契約では将来時点で判明する各人の状態（例えば、発病、あるいは、被災）に応じて富の再分配を行うことが事前に約束されている。保険の締結は実体としては保険証書の印刷を伴うが、保険証書を産出として生産関数を援用しても理解は深まらない。保険理論では状態間での富の再分配を明示的に分析できる枠組みが活用される。
- 金融契約においては貨幣的な富を対象としてさまざまな契約や資源配分メカニズムが考察される。これに対して、サービスの経済理論では、貨幣的な富以外を含めた様々な財・サービスが考察の対象になる。この面では、サービスの経済理論は金融契約理論の拡張と言える。
- 以下の概念は基本的である。契約可能性、情報の非対称性、誘因、状態の立証可能性、契約の不完備性・遂行可能性・確約可能性、センサー、オプション、計算可能性、制御可能性、事故、共感的理解、コミュニケーション能力、トータル・ソリューション、課金装置、システムの価格付け、セキュリティ。
- 以下の問いは基本的である。サービス化の条件は何か、サービスの市場化の条件は何か、システムの価格付けをどのように行うか、サービスの規範経済学をどのように構想するか。

22. 分権・意味・実験。
- 今日、分権の下での実験やイノベーションが求められる理由や独創の条件を考える。個人の使命、独創・イノベーションの意欲が、社会的な記憶や評価のための装置を前提にして、挑戦の伝統によって動機付けられることを説明する。自然科学での独創の意義を社会的に認定し承認する際には、社会科学の分析対象となる装置が介在し、しばしば人文学的なレトリックが援用されることを論じる。
- 主体の行動の意味が社会的に生成される条件を理論的に考える。特に、著者という制度の機能を考える。
- 参加者が生成するメディアが、参加の装置の条件に応じて、どのように異なる機能を見せるのかを理論的に分析する。
- 一つの価値観の軸の上での精緻化の競争と、既存の価値観とは異なる新たな価値観の軸を打ち出すことを狙う革新の競争とを区別する。
- 優れた小企業が短期間で大企業まで成長するための社会的条件を考える。

23. 身体の経済理論。
・身体を取り巻く環境が個人の生成に影響する経路を経済理論的に考察する。財を身近に所有することの意義や、居住環境や都市環境が個人の生成に果たす役割を堅固なミクロ経済理論の中に取り入れる方法、美や財のデザインの効果をどのように扱えばよいかを考える。
・機械と身体との共存の条件を考える。
・身体的スキルのトレーニングのためのインフラの条件を考える。
・個人が自分の身体に対して持つ関係として倫理の問題を考える。

III.　プロジェクトの準備

31. プロフェッショナルの概念。現存する諸制約の下で、分野横断的に諸学の知見を動員しつつ問題解決に当たる主体としてのプロフェッショナルの条件を考える。
32. フレームワークの概念。実践的な制約条件の下で、問題状況に解決を与えるための枠組み（フレームワーク）を、経済学部の諸専門科学を使って構成し更新することの意義と手順について考える。
33. 映像プロジェクト。映像プロジェクトが、教室と現場を架橋し、作品を作り出し、新たな情報共有やコミュニケーションの機会をもたらすことを確認し、映像文章レポートや映像作品の意義、合評会を通じる相互批評のルール等を考える。

３．２　滋賀大学アーカイブづくりに向けた取り組み報告

阿部安成（社会システム学科・教授）
青柳周一（経済学部附属史料館・教授）

アーカイブづくりに関しては、研究代表者・阿部安成、研究分担者・青柳周一によって推進した。当初この研究課題を掲げるにあたって設定した目的は、以下の通りである。

1　滋賀大学における自校史研究・教育を発展させるとともに、日本における高等教育史研究に貢献するための基盤を形成する。
2　アーカイブを拠点とする大学の情報管理・公開システムの改良を通じて、大学組織自体のイノベーションを実現することを目指す。

日本においては、社会保険庁での記録廃棄（いわゆる「消えた年金記録」事件）などにも顕著に現れているように、諸外国と比較してアーカイブ・システムの構築がきわめて遅れており、同様のことが各大学での行政文書管理や情報公開への取組みについても指摘できる。しかし一方で、旧帝大系大学や総合大学を中心とする大学にあっては、自校史編纂事業や、2001年施行のいわゆる「情報公開法」などと関わって、保存期限を満了した文書を移管・活用するための大学アーカイブの設置を進めてきた（全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイヴズ』（京大学術出版会、2005年）には31の機関のレポートが掲載）。これら大学アーカイブは、学内での効率的な文書管理を実現する拠点として、さらに大学が「情報公開法」に基づいて社会への説明責任を果たす窓口として機能している。また、将来にわたって継続性のある大学運営を実現するためには、過去および現在の研究・教育・事務的業績に対する評価と再検討が不可欠であるが、その作業のためには研究・教育・事務に関する文書が学内で集中的・体系的に保管されている必要がある。そうした課題に応えることができるのが、大学アーカイブという施設なのである。

さらに2009年には、いわゆる「公文書管理法」が国会で可決され、本年４月より施行されることとなった。同法は、「国及び独立行政法人等の諸活動や歴史的事実の記録である公文書等」の管理に関する基本的事項を定め、「現在及び将来の国民に説明する責務が全うされるようにすることを目的とする」もので、保存期限を満了した公文書のうち、歴史資料として重要な価値を有する文書（「歴史公文書等」）を「国立公文書館等」へ移管することなどを定めている（この「国立公文書館等」は、国立大学の大学アーカイブ等の施設を含み得る）。ここに来て、日本でもようやく本格的なアーカイブ・システムの構築に向かう法整備がなされたのであり、今後は各国立大学もより積極的な対応を求められるであろう。

翻って本学にあっては、全学また学部における保存期限満了文書の保管・公開への取り組みは、今日までほとんど意識的に行われてこなかった。歴史資料として重要な文書についても大量廃棄が進んでいることの問題性を十分に認識した上で、「情報公開法」や「公文書管理法」に基づく文書管理システムの構築が目指されなくてはならない。

そこで我々は、本学の組織自体のイノベーションをはかり「開かれた大学」を創造するためにも大学アーカイブづくりが必要との認識に立ち、そのための基盤となる作業と大学アーカイブに関する研究を推進することとした。まず本学では、経済学部の前身である彦根高等商業学校（大正11年〈1922〉設置）以来の文書948点を「滋賀大学経済学部大学史関係資料」（別添資料参照）として保存・公開対象としているが、これをデジタルカメラによって撮影して、デジタル画像を通じた調査・研究および公開体制を整備することを目指した。（なお本学で「滋賀大学経済学部大学史関係資料」として特別な取扱いを定めているのは、保存期間満了後に廃棄を免れた文書のごく一部である。現在も学内には保存期間の延長や未廃棄といった理由で、大量の文書が原課やその他の保管場所に散在している。）

これまで撮影できた文書の点数は221点、画像の数は33,506点に及ぶ（2011年３月現在）。大正期～昭和初期の歴史的価値の高い文書については、ほぼ撮影を終えることができた。
また2008年度末には学生を雇用して、文書整理と撮影作業を実施した。学生数は５名、作業実施時間はのべ60時間である。この作業を通じて、学生たちに公文書を保管することの意義や、歴史的資料の取扱いについて、実体験を通じて学ばせることができたと考える。

2009年度には、滋賀大経済学部ワークショップ＜Asian studies Workshop伍＞との共催で、東北大学史料館准教授・永田英明氏による「東北大学史料館における史料情報の公開―大学アーカイブズの

管理・公開をめぐる課題」と題する報告および討論を行った。この報告を通じて、東北大学での先進的な文書保管・公開システムを学び、「利用者ニーズの高い画像データベースの整備の必要性」や「大学毎の特性に応じた、身の丈にあったアーカイブづくり」といった、本学でのアーカイブ事業を構想する上で有益な知見を得た。この報告については、阿部安成・永田英明「大学史関係資料の保存と公開と活用について－滋賀大学経済経営研究所と東北大学史料館を事例として」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.125、 2010年1月）として公表済みである。また、これ以降も永田氏からは、「公文書管理法」への対応に関する情報などの提供を逐次受けている。

おなじく同年度には、小樽商科大学百年史編纂室研究員（当時）の平井孝典氏による「小樽商科大学百年史編纂室の活動と『資料集』」と題する報告および討論をおこなった。この機会を得て、大学が所蔵する史資料のデジタル化をめぐる現状の課題と論点を整理することができた。この成果は、阿部安成、平井孝典「デジタル化の誘引－滋賀大学経済経営研究所と小樽商科大学百年史編纂室を事例として」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.128、2010年3月）として公表済みである。（http://mokuroku.biwako.shiga-u.ac.jp/WP/index.htm）

今後の課題

「公文書管理法」の施行を目前に控えて、本学でも文書管理規則の改正や、今後の文書管理体制のあり方をめぐる議論が急ピッチで進められつつある。遅きに失した感は否めないものの、我々がここまで進めてきたアーカイブづくりに関する実作業、および研究によって得られた知見および情報を貴重な財産として、いよいよ本学での情報管理・公開システムの改良と組織的イノベーションに取り組まなければならない。「滋賀大学経済学部大学史関係資料」の画像データベース整備も、今後の重要課題である。

なお、当初はアーカイブづくりに関するプロジェクト科目を立ち上げる予定であったが、文書を扱うには高度な専門的技能が必要であり、学生にその訓練を施すには現有スタッフでは不十分であることや、文書に記された組織の機密や個人のプライバシーについて厳密に保護する必要があること等の問題から、科目化は見送らざるを得なかった。しかし、大学が責任をもって文書の調査と整理を進め、文書公開と機密・プライバシー保護の規則を作り、ある程度までアーカイブの構築を進めることができれば、たとえばアーカイブ運営の実習的なプロジェクト科目を立ち上げたり、「文書保全と組織運営のイノベーション」に関わるような教育の素材としてアーカイブを活用することは可能である。その延長線上に、新規科目（科目名未詳）を開発することも考えられる。

さらに大学アーカイブは、自校史や日本高等教育史など歴史学的な教育・研究のほか、効率的・継続的な組織運営論、また高度な社会的要請に対応し得る情報公開・情報活用論など、新しい教育・研究を生み出す資源としての可能性をも有している。（なお近年、学習院大学が人文学科研究科に「アーカイブズ学専攻」を新設したが、これも同様の目論見によるものと思われる）

上記の点とも関連して、我々は環境問題に関する超学的研究・教育の基盤となるデータベースと活用システムを形成する目的から、宮本憲一氏が1960年代以来収集した豊富かつ貴重な「宮本コレクション」（文書・写真・ビデオ・８ミリフィルム・スライド・音声テープ等の媒体で保管されている公害関係資料）の調査も行った。そのデータベース化は遺憾ながら未だ作業の緒についていないが、大学が社会に対して果たし得る学問的責任の一端として、今後も何らかのかたちで実現を目指したいと考えている。

３．３　公共的対話システムの構築と教育実践報告

井手一郎（ファイナンス学科・准教授）

Ⅰ．　狙い

発展のフロンティアに立って分権的実験的に新たな発展可能性を模索すること、すなわち、教科書のない状況での各個人の試行錯誤的実験を擁護し、その結果を相互評価して個人の可能性のある試みを的確に支援することが、わが国の新たな発展のための不可欠の手順になっている。この意味で、学生の独創意欲とともに評価能力を育成することが、現在の学部教育にとってきわめて重要である。

相互評価の仕組みは、科学者の世界での査読誌や、映像制作者の世界でのコンテストや合評会など、様々な実例がある。本プロジェクトでは、１００人を越える参加者の相互評価を円滑に行うために、相互評価の電子インフラを構築し、それを含む教育システムの全体を公共的対話システムと名づけた。このシステムに学生を参加させ、相互評価の実験を試みた。

Ⅱ．　開発と運用の状況

・電子システム。教員が課題を提示し、学生がレポートを投稿し、それを他の学生たちが閲覧しコメントして評価できるシステムを電子的に構築した。教員は課題の提示期間やレポートの受け入れの期間を自分で設定できる。教員・学生は自分のページから、自分の活動状況を一覧できる。全ての投稿は自分で決めた独自のペンネームを使って行うことができ、したがって、厳しいコメントについても書き手の名前が読み手に判明することはない。評価点等のデータは集計され、自分のページから閲覧できる。コメントの文章については、用語解析を自動的に行う。映像データについても、ＰＤＦファイルに埋め込むことでアプロードが可能。認証は滋賀大ＩＤを用い、独自のパスワードを登録させた。
・授業との連携。基本的な活用として、授業中に課題をアナウンスし、課題に取り組むための諸条件を提示して、学生からレポートを求め、そのレポートに対して別の学生にコメントを書かせた。他の学生のレポートを読み、コメントを書くこと、コメントをもらうことについては、巻末資料のアンケート調査が示すように、比較的良好に受け止められているようである。
・コメントの質を高めるための工夫として、コメントの枠組み（フレームワーク）を提示することを試みた。フレームワークを提示する前と後とで、コメントの記述を改善した学生と、フレームワークを無視する学生とが現れた。フレームワークの機能と意義については、別途授業等で学生の理解を深めることが重要である。
・コメントの中に私事を書かないといった、基本的なマナーの徹底も必要である。
・公共的対話システムを起動させ、授業で実験することで、このシステムの教育的可能性を確認できたことが現時点での最大の成果である。電子システムが実装すべき追加的機能も具体的に明らかにでき、電子システム以外の教育的準備の重要性についても明確になってきている。

Ⅲ．　課題

・電子システムについては実装すべき機能が少なくない。特に、新しい要件として、今後、社会人や外国人にシステムへの参加を促していく場合、滋賀大固有の強固に保守されるべきシステムと、実験的に外へ開かれるシステムとの共存時におけるセキュリティの問題や、外国語対応のための機能整備が必要になる。
・電子システム以外の教育的準備のマニュアルを確立することが必要。コメントの手順やマナー等、システムの使用スキルについて、わかりやすい導入のトレーニングがいる。
・コメントに専門科目の知見を動員するためには、制限時間等現実的な諸条件の下で使いやすい枠組み（フレームワーク）を準備しておくことが重要。諸学の活用を具体的なフレームワークの更新に活かしていくことが求められる。
・映像レポートの外部流失を抑制する技術が必要である。

4　外部評価

外部評価委員会外部評価報告書

■外部評価委員会
　□評価委員
　　久保田裕（コンピューターソフトウエア著作権協会・専務理事）
　　平井祐子（テレビ東京・「カンブリア宮殿」担当プロデューサー）

　□実施日時：2011年3月25日（金）13時30分から17時00分
　□実施場所：滋賀大学経済学部第二校舎棟

■評価意見
（総論）
おおむね申請書段階の構想を実現してきたと評価できます。評価の根拠としては、①企画申請書段階の構想を具体化することに務め、「サービス・イノベーション専攻コース」の設置が完成している点、②サービス・イノベーション専攻コースに関連する科目開発及び科目の開講を進めてきている点などが挙げられます。

「ものづくり、人づくり、地域づくり」「創造的仕事の技術と知識」や各種プロジェクト科目に代表される学生参加型の講義の開発など全般的に、学生の「主体的学び」の取り組みを行ってきたことは、学びの主体化をすすめる知的な取り組みとして高く評価できます。

映像制作を経済学部教育プログラムに導入した点は、大変チャレンジングで面白い取り組みとして高く評価します。完成した映像教材も質が高く、座学にとどまらず能動的にリサーチを行い、「動いている経済」と「学び」を結びつける実践的な教育プログラムとしての完成度は高いと評価できます。また、本プロジェクトで、学生たちが映像制作の過程で学ぶことは、ただ単に手段としての映像制作技術の習得にとどまりません。映像制作の過程では、撮影協力者との間で取り交わす交渉（契約）など様々なプロセスを必要とするので、社会で生きる能力が培われると考えられます。そうした視点で評価すると様々な学問に活用可能な手法だといえますし、教員から「映像教材を外部に公表できないので、云々」と言った説明がありましたが、学生はそういった映像制作に関わる全プロセス（情報収集、まとめる、表現する、他者との交渉等々）で様々なことを学んでおり、そうしたことは、社会人が実社会の様々な場面で行っている普遍的なことで有り、オールマイティに活躍できる能力が身につくと思われます。そういった意味では、社会が求める人材を育成できると考えられます。全体的な評価として、経済学部教育として興味深い実践的な教育プログラムの開発を行ってきたと評価できます。申請領域のサービス・イノベーションの枠組みとの関係では、その枠を基盤としながらもその枠をはみ出したクリエイティブでアカデミックな経験をさせるプログラムとしては高く評価します。

最後に総括的な評価として、地方国立大学の滋賀大学が、特徴ある挑戦を行って、極めて高い成果を上げたと評価しています。滋賀大学経済学部の生き残りのヒントを見つけることができたのではないかと考えます。今後の滋賀大学経済学部の発展に役立てて頂きたいと考えます。

（今後の留意事項）
文部科学省からの補助金が切れた後、経済学部に設置された専門コースを維持することが困難なのではないかと危惧を持っています。コースの維持・持続については、経済学部及び大学本部が責任をもって取り組むことを求めます。とりわけ、映像制作は指導が難しいと思われますが、その映像制作の指導の核になる特任教員の雇用継続ができなかった点などは、今後の取り組みの持続可能性に疑問が残ります。事業継続については、2011年度は、大学本部からの時限的な事業継続費を計画中であるとの説明を受けましたが、単年度の事業費でよいのか、学部教育の水準を上げるための重点事項として取り上げる必要はないのかなど多角的な視点から全学的な議論を深め、事業継続に努めることを求めます。

本コースは大変興味深いコースですが、履修登録者数などは現段階では少ない状態で有ります。今後は、学生への周知を行い、履修学生の拡大に向けた取り組みを求めます。当初予定のコース認定目標200名は、学部のコース制の規定変更が必要との説明でしたが、規定変更が必要であると考えるの

であれば、学部の責任で制度変更を進めることを求めます。

5　滋賀大学経済学部の教育カリキュラムの充実に向けて

只友景士（経済学科・准教授）

サービス･イノベーション人材育成事業への申請が可能であった背景の一つに、2004年度(平成16年度)カリキュラム改革が行われていたことが大きい。2004年度(平成16年度)カリキュラム改革により、①専門コース制が導入可能となっていたこと、②そのコース制を運用することで、学科単位による教育カリキュラム開発・整備だけでなく、学科横断的な教育体制の整備が可能となっていたこと、③プロジェクト科目が導入されていたので、問題発見型の教育を行う制度が整備されていたことなど事業化の枠組みを既存の学部制度を活用することで可能となった。

学科横断的な学際的・総合性をもったコースの設定を行うことが出来た。また、経済学部は、6学科体制(経済学科、ファイナンス学科、企業経営学科、会計情報学科、情報管理学科、社会システム学科)であり、とりわけ情報管理学科が存在していることが、文理融合型の教育を実施できる可能性を持っている点は、今回の採択に当たり、有利に働いたと考えている。サービス･イノベーション人材育成事業を展開することで、学科を超えたカリキュラム運営の意義と限界も明らかとなった。滋賀大学は、今回のプロジェクト採択の経験を一過性のものとすることなく、継続的な教学改革の取り組みとして定着させていく必要がある。今後とも情報管理学科との連携強化も視野に入れながら6学科間の連携強化を進めていくことも必要である。

企画段階で構想していた取り組みは、すべて行っているが、不十分だったのはその個別の取り組みの横の連携強化である。とりわけ、公共的対話システムを活用した横の連携強化は今後の課題となろう。今後は、コース科目間の横の連携や教育カリキュラムの総合的な調整を随時行っていく必要がある。

プロジェクト科目により、問題発見･問題解決型の実践的教育を展開することが出来た。その過程で、学生の「能力」を引き出すことに成功した事例（スーパー滋賀大生）もみうけられる。学生参加による教育プログラム作りは画期的で有り、学生の主体的な学びの確立と学生による学びのコミュニティづくりの創造を今後もいっそう推進することが求められる。また、そうした取り組みを支える教学に関わる基本政策の確立も求められる。

最後に、サービス・イノベーション及びイノベーション、サービス化経済などをキーワードとする学際性が高く、文理融合型の特色ある教育を展開の可能性を模索していく必要がある。そのためにも新たな学問領域を切り開いていく研究を基礎にした教育・研究上の様々な取り組みが必要であることは言うまでもない。

資料1

サービス・イノベーション専攻コース科目表（再掲）

修了要件及び単位数	科目区分、授業科目名及び単位数		備考
コア選択必修科目	コア科目	統計学A	8科目16単位から4科目8単位以上取得
		統計学B	
		ミクロ経済学A	
		ミクロ経済学B	
		経営学	
		簿記会計A	
		簿記会計B	
		科学方法論	
コース選択必修科目	その他科目	サービス経済論	7科目から4科目6単位以上取得
		サービス・イノベーション事例研究	
		イノベーション概論	
		ものづくり、人づくり、地域づくり	
		創造的仕事の技術と知識	
		リスクマネジメント基礎	
	プロジェクト科目	学部指定のプロジェクト科目	
選択科目	経済学科	情報とリスクの経済学	コア選択必修科目、コース選択必修科目と合わせて40単位以上取得
		産業政策論	
		産業組織論	
		応用統計学	
		数理統計学	
		計量経済学Ⅰ	
		計量経済学Ⅱ	
		地域経済論	
	企業経営学科	近江商人経営論	
		流通システム論	
		マーケティング論	
		ブランドマネジメント	
		企業と文化	
	ファイナンス学科	金融のミクロ経済学Ⅰ	
		ファイナンス基礎数学	
		ファイナンス数学	
		ベンチャーファイナンス論	

	情報管理学科	データベースシステムⅠ	
		データベースシステムⅡ	
		経営システムの数理Ⅰ	
		経営システムの数理Ⅱ	
		経営情報システム設計論Ⅰ	
		経営情報システム設計論Ⅱ	
		マルチメディア情報処理	
	会計情報学科	管理会計総論Ⅰ	
		管理会計総論Ⅱ	
		財務諸表分析論Ⅰ	
		財務諸表分析論Ⅱ	
	社会システム学科	マス・メディア論	
		産業心理学Ⅰ	
		産業心理学Ⅱ	
		消費者心理学Ⅰ	
		消費者心理学Ⅱ	
		科学哲学Ⅰ	
		科学哲学Ⅱ	
		認識論Ⅰ	
		認識論Ⅱ	
		認知心理学	
		行動科学Ⅰ	
		行動科学Ⅱ	
		文化人類学	
		社会システム論特殊講義（学部が指定したもの）	
	実践・体験科目	現代の経済	
		現代の経営	
		リーダーシップ論	

備考：2010年3月1日現在。なお、この科目表は本文中の科目表と同じである。

資料2

平成22年度サービス・イノベーション専攻コース科目講義概要

科目名：統計学A（春） **中野 裕治**

(04～06)統計学A・(00～03)統計学Ⅰ

◇授業の目的と概要：

滋賀大学経済学部学生として最低限知っておいてほしい統計知識、統計手法の取得が本講義の目的である。本講義で学ぶことを今後の専門科目の履修、卒業論文作成に役立ててもらいたい。統計学Aの主な内容は「データの整理」「代表値」「確率」「確率変数と確率分布」である。統計学Aを学ぶことにより、受講生は与えられたデータの特徴を的確に捉えられるほか、データとはその背後にある現象から生成された実現値であるという考え方を学ぶ。なおコアセッション（統計学A）を一緒に履修することを強く勧める。

◇教科書・参考書：

教科書：『基本統計学〔第3版〕』（宮川公男著、有斐閣）問題集：『穴埋め式 統計数理 らくらくワークブック』（黒住英司著、講談社）

◇成績評価の方法：

期末試験のみで評価する。

科目名：統計学A（秋） **得田 雅章**

(04～06)統計学A・(00～03)統計学Ⅰ

◇授業の目的と概要：

滋賀大学経済学部生として最低限知っておいてほしい統計知識、統計手法の取得が本講義の目的である。データとは、代表値、確率の基礎、確率変数と確率分布を講義する。講義中に配布される演習問題の解説は「コアセッション」で行うので、「コアセッション」を併せて受講することを、数学の苦手な学生はさらに「経済学の基礎ツール」を春学期に受講しておくことを強く推奨する。

◇教科書・参考書：

教科書：藤田岳彦監修、黒住英司著「穴埋め式統計数理らくらくワークブック」講談社。また参考書として、宮川公男著「基本統計学[第3版]」有斐閣、の購入を強く勧める。

◇成績評価の方法：

試験で評価する。

科目名：統計学A（夜） **大濱 巌**

(04～06)統計学A・(00～03)統計学Ⅰ

◇授業の目的と概要：

滋賀大学経済学部学生として最低限知っておいてほしい統計知識、統計手法の取得が本講義の目的である。本講義で学ぶことを今後の専門科目の履修、卒業論文作成に役立ててもらいたい。統計学Aの主な内容は「データの整理」「代表値」「確率」「確率変数と確率分布」である。統計学Aを学ぶことにより、受講生は与えられたデータの特徴を的確に捉えられるほか、データとはその背後にある現象から生成された実現値であるという考え方を学ぶ。なお問題を実際に解いていかないと理解が深まらないことに注意すること。

◇教科書・参考書：

教科書：『基本統計学[第3版]』（宮川公男著，有斐閣）問題集：『穴埋め式 統計数理 らくらくワークブック』（黒住英司著，講談社）

◇成績評価の方法：

「期末試験(100%)」か「期末試験(75%)+毎週の宿題(25%)」のどちらか高いほうで評価する。

科目名：統計学B（春） **大濱 巌**

(04～06)統計学B・(00～03)統計学Ⅱ

◇授業の目的と概要：

滋賀大学経済学部学生として最低限知っておいてほしい統計知識、統計手法の取得が本講義の目的である。本講義で学ぶことを今後の専門科目の履修、卒業論文作成に役立ててもらいたい。統計学Bの主な内容は「主な確率分布」「標本分布」「推定」「統計的仮説検定」「相関と回帰」である。統計学Bを学ぶことにより、受講生は具体的な推定や検定ができるようになるほか、データ間の関係を回帰という視点から捉えることができるようになる。なおコアセッション(統計学B)を一緒に履修することを強く勧める。

◇教科書・参考書：

教科書：『基本統計学[第3版]』(宮川公男著，有斐閣)問題集：『穴埋め式 統計数理 らくらくワークブック』(黒住英司著，講談社)

◇成績評価の方法：

期末試験のみで評価する。

科目名：統計学B（秋） **中野 裕治**

(04～06)統計学B・(00～03)統計学Ⅱ

◇授業の目的と概要：

滋賀大学経済学部生として最低限知っておいて欲しい統計知識、統計手法の取得が本講義の目的である。統計学Bの主な内容は、主な確率分布、標本分布、推定、仮説検定、相関と回帰、である。統計学Bを学ぶことにより、受講生は基本的な数理モデルのパラメータの推定やモデルの妥当性を検定できるようになるほか、データ間の関係を回帰という観点から捉えることができるようになる。なお、コアセッション(統計学B)を同時履修することを強く推奨する。

◇教科書・参考書：

教科書：『基本統計学〔第3版〕』(宮川公男著、有斐閣) 問題集：『穴埋め式　統計数理　らくらくワークブック』(黒住英司著、講談社)

◇成績評価の方法：

期末試験のみで評価する。

科目名：統計学B（夜） **大濱 巌**

(04～06)統計学B・(00～03)統計学Ⅱ

◇授業の目的と概要：

滋賀大学経済学部学生として最低限知っておいてほしい統計知識、統計手法の取得が本講義の目的である。本講義で学ぶことを今後の専門科目の履修、卒業論文作成に役立ててもらいたい。統計学Bの主な内容は「主な確率分布」「標本分布」「推定」「統計的仮説検定」「相関と回帰」である。統計学Bを学ぶことにより、受講生は具体的な推定や検定ができるようになるほか、データ間の関係を回帰という視点から捉えることができるようになる。なお問題を実際に解いていかないと理解が深まらないことに注意すること。

◇教科書・参考書：

教科書：『基本統計学[第3版]』(宮川公男著，有斐閣)問題集：『穴埋め式 統計数理 らくらくワークブック』(黒住英司著，講談社)

◇成績評価の方法：

「期末試験(100%)」か「期末試験(75%)+毎週の宿題(25%)」のどちらか高いほうで評価する。

科目名：ミクロ経済学A（秋） **河相 俊之**

(04～06)ミクロ経済学A・(00～03)ミクロ経済学概論

◇授業の目的と概要：

近代経済学の二大分野（ミクロ経済学とマクロ経済学）のうち、経済の構成者である消費者や企業の行動、またそれらの関連性等を分析するミクロ経済学を、基本部分から講義する。以後の種々の経済学講義の基礎にもなり、科学的な分析の基礎であるから、徹底的に理解することを目標としたい。なお、2年生春のミクロ経済学Bに接続し、基礎的理論が継続して講義される。

◇教科書・参考書：

レジメを配っての講義形式で、参考書は授業開始時に提示する。（「ミクロ経済学」と名の付く本は極めて多く、書店、図書館で手にとって見られたし）

◇成績評価の方法：

期末試験の結果による。

科目名：ミクロ経済学B（春） **和田 佳之**

(04～06)ミクロ経済学B・(00～03)ミクロ経済学

◇授業の目的と概要：

本講義の目的は、ミクロ経済学Aにおいて修得した知識を拡張・発展させ、より複雑な経済現象に対する分析能力を養成することにある。ミクロ経済学Aが基本的に一財のみの経済における静学的問題を分析対象としたのに対し、同Bでは複数の財が存在する経済において動学的問題も考慮しつつ、いかに経済主体が合理的な意思決定に基づく行動をとるのかを解明する。取り上げる具体的なテーマは、消費者行動、企業行動、一般均衡理論、パレート効率、寡占、厚生概念などである。

◇教科書・参考書：

受講生の予習・復習に支障を来さないように教科書を指定する予定でいるが、具体的な文献名はガイダンス時に紹介する。

◇成績評価の方法：

学期末試験（持込み参照一切不可）の結果に基づき、成績評価を行なう。単位取得には、コアセッション（ミクロ経済学B）の同時履修が実質的に不可欠である。

科目名：経営学（春） **柴田 淳郎**

(04～06)経営学・(00～03)経営学基礎Ⅰ

◇授業の目的と概要：

コア科目として，経営学の基礎的な概念を幅広く学習することを目的としている。経営学の様々な理論を理解していくためには，企業経営が関わる現象と理論領域の全体像をまず学習しておく必要がある。本講義は，自身が経営者の視点に立って，企業を経営していく際に，具体的にどのようなことを考慮しなければならないのか？という基本的な問題について学習すると共に，経営戦略，組織，制度等々，様々なテーマとそれらの相互の関係ならびに，現象と理論について学習する。

◇教科書・参考書：

加護野忠男・吉村典久『1からの経営学』硯学社，2006年．伊丹敬之・加護野忠男『ゼミナール経営学入門－第2版－』東洋経済新聞社，1989.

◇成績評価の方法：

60点未満→不可（D） 60点以上70点未満→可（C） 70点以上80点未満→良（B） 80点以上→優（C）

科目名：経営学（秋） **柴田 淳郎**

(04～06)経営学・(00～03)経営学基礎Ⅰ

◇授業の目的と概要：

コア科目として，経営学の基礎的な概念を幅広く学習することを目的としている。経営学の様々な理論を理解していくためには，企業経営が関わる現象と理論領域の全体像をまず学習しておく必要がある。本講義は，自身が経営者の視点に立って，企業を経営していく際に，具体的にどのようなことを考慮しなければならないのか？という基本的な問題について学習すると共に，経営戦略，組織，制度等々，様々なテーマとそれらの相互の関係ならびに，現象と理論について学習する。

◇教科書・参考書：

加護野忠男・吉村典久『1からの経営学』碩学社，2006年．伊丹敬之・加護野忠男『ゼミナール経営学入門－第2版－』東洋経済新聞社，1989．

◇成績評価の方法：

60点未満→不可(D) 60点以上70点未満→可(C) 70点以上80点未満→良(B) 80点以上→優(C)

科目名：簿記会計A（春） **稲山 訓央**

(04～06)簿記会計A・(00～03)簿記Ⅰ

◇授業の目的と概要：

本講義は、簿記・会計の基本的な習得を目的としている。具体的には、以下の計画に沿って講義を行う。1．簿記・会計の基礎概念2．貸借対照表と損益計算書3．取引と仕訳4．決算と財務諸表5．会社の設立と資金調達6．仕入・生産活動7．販売活動なお、本講義では内容の解説に重きをおいているが、簿記の理解のためには問題練習が必須であるので、コアセッションもあわせて履修することが必要である。

◇教科書・参考書：

渡辺泉他『会計基礎論』第3版，森山書店，2007年（出版予定）。加古宜士他編『新検定簿記ワークブック3級商業簿記』中央経済社，最新版。

◇成績評価の方法：

期末試験により評価する。

科目名：簿記会計A（秋） **衣笠 陽子**

(04～06)簿記会計A・(00～03)簿記Ⅰ

◇授業の目的と概要：

本講義では、簿記・会計の基礎的な知識の習得を目的としている。具体的には，以下の内容の講義を行う。1.簿記・会計の基礎概念 2.貸借対照表と損益計算書 3.取引と仕訳 4.決算と財務諸表 5.会社の設立と資金調達 6.仕入・生産活動 7.販売活動 簿記の理解のためには問題練習が必須であるので，コアセッションもあわせて履修することが必要である。

◇教科書・参考書：

1.本講義用の講義ノート集。2.渡部裕亘他著『新検定簿記ワークブック3級商業簿記』中央経済社、最新版。

◇成績評価の方法：

期末試験で評価する。

科目名：簿記会計A（夜） **可児島 達夫**

(04～06)簿記会計A・(00～03)簿記Ⅰ

◇授業の目的と概要：

本講義は，はじめて簿記・会計を学ぶ人を対象にして，基本的知識の習得を目的とします。具体的には，簿記・会計の基礎概念，貸借対照表と損益計算書，取引と仕訳，決算と簡単な財務諸表作成，会社の設立と資金調達，仕入・生産活動，販売活動です。なお，簿記の理解のためには問題を解くことが大事なので，適宜，演習も織り交ぜます。

◇教科書・参考書：

①講義ノート(初回授業に配布します。) ②渡辺泉他編『会計基礎論』最新版，森山書店。③加古宜士他編『新検定簿記ワークブック3級商業簿記』中央経済社。

◇成績評価の方法：

定期試験の成績で評価します。

科目名：簿記会計B（春） **赤塚 尚之**

(04～06)簿記会計B・(00～03)簿記Ⅱ

◇授業の目的と概要：

簿記会計Aに引き続き、本講義は、入門レベルの簿記・会計を学ぶ受講生を対象としたものである。日商簿記検定3級レベルの論点を取り上げた後、初歩的な原価計算の手法についても取り上げる。なお、本講義では、商品売買の方法は3分法による記帳が、精算表については8桁精算表の作成が前提である。講義に出席する際には、必ず電卓を持参すること。

◇教科書・参考書：

『会計基礎論』森山書店『新検定簿記ワークブック3級商業簿記』中央経済社別途、講義冊子を配布する。

◇成績評価の方法：

期末試験によって評価する。

科目名：簿記会計B（秋） **稲山 訓央**

(04～06)簿記会計B・(00～03)簿記Ⅱ

◇授業の目的と概要：

本講義は、簿記会計Aの講義内容を理解している受講生を対象とする。本講義の目的は、簿記・会計の基礎的知識を習得することにある。講義前半では、簿記会計Aに続いて、日商簿記検定3級レベル後半にあたる内容と、関連する基本的な会計理論について解説する。講義後半では、工業簿記・原価計算および管理会計の入門的な内容についても学習する。受講生は、必ずコア・セッション簿記会計Bを併せて履修すること。

◇教科書・参考書：

渡辺泉他『会計基礎論』第3版，森山書店，2007年(出版予定)。加古宜士他編『新検定簿記ワークブック3級商業簿記』中央経済社，最新版。

◇成績評価の方法：

期末試験により評価する。

科目名：簿記会計B（夜） **笠井　直樹**

(04～06)簿記会計B・(00～03)簿記Ⅱ

◇授業の目的と概要：

本講義では,簿記会計の基礎的な知識を身につけることを目的とします。講義内容は，主に日商3級レベル後半の商業簿記の内容（諸取引の簿記処理や決算手続）およびそれらの応用論点について学習します。なお，本講義は簿記会計Aの講義内容を既に理解している学生を対象とします。

◇教科書・参考書：

(1)渡辺泉他『会計基礎論』第3版，森山書店，2007年(2)渡部裕亘他編『新検定簿記ワークブック3級商業簿記』中央経済社　＊最新版(3)講義ノート

◇成績評価の方法：

基本的に期末試験のみで評価します。場合によっては小テストを実施する場合もあります。

科目名：科学方法論（秋） **黒石　晋　柴山　桂太　西村　正秀　渡邉　凡夫**

(04～06)科学方法論

◇授業の目的と概要：

本学部で学ぶ以上、学生諸氏はすでに社会科学者であり、またその卵である。したがって、科学的な思考法、論理やさまざまなツールを身に付ける必要がある。 本講はこうした見地から、科学的記述や説明の基本的な約束事の修得を目指すものである。

◇教科書・参考書：

各教員が指定またはレジュメを配布する。

◇成績評価の方法：

筆記試験によって評価する。期末試験の他に、中間試験を行うことがありうる。

科目名：イノベーション概論 **陳 韻如**

◇授業の目的と概要：

イノベーションは企業・産業の盛衰や国の経済成果を大きく左右します。本講義は技術という側面から、イノベーションがどのように発生・普及し、どのように企業・産業の存続や国の経済に影響を与えるか、イノベーションに関する基本知識を学びます。講義は大きく三つのテーマを中心に進めていきます。① イノベーションはどのようなものか。② イノベーションと企業戦略。③ イノベーションを興すためのシステム構築。

◇教科書・参考書：

① 教科書は使いませんが、毎回講義資料を配布します。② 参考書：一橋大学イノベーション研究センター編『イノベーション・マネジメント入門』日本経済新聞社

◇成績評価の方法：

以下の①と②を合わせて評価を行います（変更の場合があります）。①と②の比率は状況により調整する。通常、①は60～70%、②は30～40%の比率で計算する。① 主要評価方法：期末試験 ② 平常点：小テスト（事前に予告の上で実施します。掲示等に注意してください。）

科目名：ものづくり、人づくり、地域づくり **土江 真樹子 只友 景士**

◇授業の目的と概要：

本講義では、製造業に限らずサービス産業など多様な企業による講義を計画しています。多様な企業から「製造・営業の戦略」「人的資源管理の戦略」「財務戦略」を講義していただくことを通じて、現代企業戦略、産業ごとの戦略特性を学びます。そして製造業のサービス化、サービス経済化、グローバル化の中でのイノベーションの源泉を探ります。また、あわせて企業の地域貢献の在り方も議論します。本講義は、企画段階からプロジェクト科目「仕事と現代経済プロジェクト」と連携している学生参加型科目です。

◇教科書・参考書：

藤本隆宏『ものづくりの経営学』光文社新書、藤本隆宏『能力構築競争』中公新書、今井賢一『創造的破壊とは何か日本産業の再挑戦』東洋経済新報社適宜指示する。

◇成績評価の方法：

毎回の講義へのリアクションペーパー、課題レポートによって評価する。

科目名：創造的仕事の技術と知識 **土江 真樹子 只友 景士**

◇授業の目的と概要：

社会の各方面で活躍中の方々を講師としてお招きして、創造的な仕事を支える技術と知識の身につけ方などを講義していただく。本講義は、企画段階からプロジェクト科目「仕事と現代経済プロジェクト」と連携した学生参加型科目であり、講演形式もしくはインタビュー形式で進行する。本講義では、プロが仕事のノウハウをどのように形成し、伝承しているのかといった点に着目する。様々な仕事の具体的事例の検討を通じて、仕事やサービスの質的向上・効率性向上のクリティカルな点を明らかにしていく。

◇教科書・参考書：

石井淳蔵『ビジネスインサイトー創造の知とは何かー』岩波新書原田多加司『職人暮らし』ちくま新書追加的参考文献等は適宜指示する。

◇成績評価の方法：

毎回の講義へのリアクションレポート、課題レポートによって評価する。

科目名：プロジェクト 仕事と現代経済プロジェクト 2010　　**只友 景士　土江 真樹子　弘中 史子　伊藤 博之　竹中 厚雄**

◇授業の目的と概要：

サービス・イノベーション人材育成事業の「現場重視のプロジェクト科目」の一つです。このプロジェクト科目は、2010年度秋学期開講予定の外部連携科目「モノづくり、人づくり、地域づくり」及び「創造的仕事の技術と知識」の2科目の企画・調査を本学教員と共同研究を行うプロジェクト科目です。共同研究の成果に基づき、「モノづくり、人づくり、地域づくり」「創造的仕事の技術と知識」の講義で使用する映像教材を制作します。そして当該講義の記録（アーカイブ化）も行います。

◇教科書・参考書：

◇成績評価の方法：

受講レポートの作成と提出を求める。評価は、各人のプロジェクト全体への貢献度によって総合的に評価する。

科目名：情報とリスクの経済学 **酒井 泰弘**

(04～06)情報の経済学

◇授業の目的と概要：

情報・リスク・経済・思想・歴史――これら五者間の関係について、できるだけ易しく教えます。新しい教科書(3月刊)を使用しますので、生協売店で購入をお奨めします。次のようなトピックを取り上げます。①社会のあり方とリスク観、②リスクの経済学の歴史、③リスク・不確実性・期待効用、④サイコロの賭けと「考える葦」、⑤不確実性とアニマル・スピリッツ、⑥対立抗争とゲーム論、⑦コイン合わせと「グー・チョキ・パー」、⑧中古車市場の悩み

◇教科書・参考書：

教科書　酒井泰弘『リスクの経済思想』ミネルヴァ書房、2010年3月(最新刊)

◇成績評価の方法：

一回の学期末試験によって評価します。大きな問題で、自由度は大です(ユニークな解答を歓迎します)。持ち込みは、教科書を含めてすべてOKです。受講者多数の場合には、定員220名程度に限らせていただきます。

科目名：産業政策論 **中野 桂**

(00～06)産業組織論Ⅱ

◇授業の目的と概要：

企業の戦略的行動を中心に、産業構造の決定と、それに対する政府のとるべき政策について検討する。授業では、理論だけなく、できるだけ具体的事例も取り上げたい。取り上げるトピックスは、製品差別化、広告の経済学、研究開発投資、カルテル、水平的・垂直的企業結合、ネットワーク経済学などである。

◇教科書・参考書：

【参考書】川濱・柳川、「競争の戦略と政策」、有斐閣、2006年。【参考書】小田切宏之、「新しい産業組織論」、有斐閣、2001年。

◇成績評価の方法：

期末試験を主とし、適宜小テスト、宿題等を課し、総合評価する。

科目名：応用統計学 **大濱 巌**

(04～06)応用統計学・(94～03)数理統計学Ⅱ

◇授業の目的と概要：

SPSSという統計分析ソフトウェアの使い方と、いろいろな分析方法を学ぶことを目的とする。分析方法に関しては理論的な理解よりも、でてきた結果の統計学的意味を理解することを主眼とする。本講義を受講することにより、受講生はSPSSの基本的な使い方と、得られた結果の解釈の仕方を学ぶことができる。なお本講義は統計学A・Bの単位を習得済み(少なくとも一通り受講済み)であることを前提とする。また、ライセンス数(約50名)を超える受講希望者がいる場合は、統計学A・Bの成績を基に選考する。

◇教科書・参考書：

・『文系のためのSPSS超入門』(秋川卓也著，プレアデス出版)または・『SPSSとAmosによる心理・調査データ解析』(小塩真司著，東京図書)

◇成績評価の方法：

平常点(講義中の作業点)、授業期間中のレポートで評価する。

科目名：計量経済学Ⅰ **得田　雅章**

(00～06)計量経済学Ⅰ

◇授業の目的と概要：

計量経済学とは、経済諸変数間の関係を定量化し、その経済学的意味合いを読み取ることを目的とする学問である。本講義では消費関数、投資関数、輸出入関数、フィリップス曲線、貨幣需要関数といった題材を用いることで、マクロ経済学の定量的側面を習熟してもらう。日本経済の最新マクロデータを利用し、計量分析の面白さも伝えていく所存である。なお、本講義は統計学の基礎を理解していることが望ましいが必要条件とはしない。さらに講義内容を確実なものとするため、履修者には適時課題の提示を行う。

◇教科書・参考書：

テキスト：白砂堤津耶『例題で学ぶ初歩からの計量経済学[第2版]』(日本評論社)2007

◇成績評価の方法：

出欠3/4以上必須、課題提出40%、期末レポート60%をもとに総合的に評価する。

科目名：地域経済論 **只友　景士**

(00～06)地域経済論

◇授業の目的と概要：

経済のグローバル化が進行する中で、地方都市や条件不利地域の衰退が大きな問題となっている。その上、昨今の大不況は地域経済に深刻な影響を与えている。本講義では、地域経済論の基礎理論について講義するとともに、グローバル化時代の地域経済を多面的に捉える視点を提供し、地域経済のイノベーションシステム形成の政策論、持続可能な地域づくりの事例研究を通じた人が豊かになる持続可能な地域経済づくりの政策論を講義する。なお、本年度は、大不況下にある地域経済分析から現代経済の構造分析も試みたい。

◇教科書・参考書：

(教科書)岡田・川瀬・鈴木・富樫著『国際化時代の地域経済学(第3版)』有斐閣アルマ(参考書)岡田知弘著『地域づくりの経済学入門』自治体研究社

◇成績評価の方法：

試験により評価する。

科目名：金融のミクロ経済学Ⅰ **井手　一郎**

(04～06)現代ファイナンス論・(00～03)ファイナンス概論Ⅱ

◇授業の目的と概要：

本科目では現代ファイナンスの理論と方法の解説に力点を置く。主な内容は、金融のミクロ理論の基礎、金融のミクロ理論の応用とマクロ経済の金融的側面、金融工学の基礎である。本科目は以後の現代ファイナンス系専門科目の導入を兼ねており、現代ファイナンスに関心を持つ学生に広く受講を勧めたい。学部中級水準のミクロ経済学、マクロ経済学、統計学の知識を前提する。

◇教科書・参考書：

参考書：『エコノミックス　入門　金融論』池尾和人編著、ダイヤモンド社、2004年。他の参考文献は授業の中で指示する。

◇成績評価の方法：

期末試験の成績による。

科目名：ファイナンス基礎数学 **池森 均**

(04～06)ファイナンス基礎数学・(01～03)ファイナンス計画特殊講義1

◇授業の目的と概要：

(基礎的数学の準備)金融における工学的アプローチを総称して金融工学と呼びますが、その中でも特に理論的な構成や数理的な手法を強調する場合は、数理ファイナンスなどと呼ばれることが多くあります。この授業では、数理ファイナンスの基礎を理解することを目的として、そのために必要な数学的な道具の準備などを行います。

◇教科書・参考書：

教科書「基礎から学べる投資・運用関連数式集」砺波元 金融財政事情研究会，参考書「ゼロからわかる金融・証券のためのビジネス数学」岸本光永 日本経済新聞社

◇成績評価の方法：

試験による評価を基本としますが、演習の成果なども総合して評価します。

科目名：ファイナンス数学 **池森 均**

(04～06)ファイナンス数学・(01～03)ファイナンス計画特殊講義2

◇授業の目的と概要：

金融商品のリスクを定量的に把握して管理を行う。証券価格の動きを分析して投資に利用する。新しい金融商品を開発する。など金融における工学的アプローチを金融工学、そのための数理的手法を数理ファイナンスと呼びます。この分野を学ぶためには、微分・積分や確率・統計の理解が必要ですが、経済学部は文系であるという先入観からか、これらの知識を習得する機会が得られず、基礎的な技術が身についていないのが実情です。この授業では、金融工学・数理ファイナンスに必要な基礎的な数学知識を学びます。

◇教科書・参考書：

教科書「やさしく学べる微分積分」石村園子 共立出版，参考書「Excel&VBAで学ぶファイナンスの数理」木島正明 青沼君明 金融財政事情研究会

◇成績評価の方法：

試験による評価を基本としますが、演習の成果なども総合して評価します。

科目名：近江商人経営論 **宇佐美 英機**

(00～06)近江商人経営論

◇授業の目的と概要：

この授業では、近世商人の典型的一類型である近江商人について講義します。現在、巷ではCSRの源流として近江商人が再評価されていますが、かなりいい加減な話しも少なくありません。授業では最新の研究をもとにして、近江商人の実態を明らかにし、その歴史的意義を説明したいと思います。

◇教科書・参考書：

参考書：小倉榮一郎『近江商人の理念』サンライズ出版　　：末永國紀『近江商人学入門』サンライズ出版

◇成績評価の方法：

学期末試験とレポート、出席状況を総合的に勘案して評価します。

科目名：マーケティング論 **野本 明成**

(00～06)マーケティング論

◇授業の目的と概要：

マーケティングは、企業等を取り巻くマーケティング環境を制約条件として、顧客のニーズを把握し、顧客ニーズにあった製品・サービスを開発し、販売することである。そのような企業等がとりうる手段をマーケティング手段と呼ぶ。授業においては、マーケティング環境と、マーケティング手段について学ぶ。授業においては、毎回小テストを行う。

◇教科書・参考書：

教科書：コトラー＆ケラー著『ｺﾄﾗｰ＆ｹﾗｰのﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ・ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ』ﾋﾟｱｿﾝ・ｴﾃﾞｭｹｰｼｮﾝ社。

◇成績評価の方法：

小テスト(30%)、期末試験(70%)

科目名：管理会計総論Ⅰ **上總 康行**

(00～06)管理会計総論Ⅰ

◇授業の目的と概要：

つい最近まで世界最大の企業であったゼネラル・モーターズ(GM)が倒産した。GMで実践された事業部制組織，投資利益率(ROI)，チャートシステムなどは，もはやGMの経営を支えきれなくなったのである。他方，日本航空(JAL)も倒産した。このJALの経営再建には，京セラを創業し，アメーバ経営で1兆円企業まで成長させた稲盛和夫名誉会長が陣頭指揮に当たる。両社に共通するのは管理会計の重要性である。 本講義では，基本的には，テキストに則して講義を行なう。現代管理会計のトピックスに関しては，資料を配賦する予定である。

◇教科書・参考書：

教科書：上總康行『管理会計論』新世社。参考書：講義の中で指示します。

◇成績評価の方法：

定期試験の結果を重視する。

科目名：管理会計総論Ⅱ **上總 康行**

(00～06)管理会計総論Ⅱ

◇授業の目的と概要：

ゼネラル・モーターズや日本航空の倒産を例にみるまでもなく，企業内外の環境変化に対応できなければ，長期損失の後には，倒産に至ることが多い現代企業の経営では，管理会計がきわめて重要である。 本講義では，管理会計総論Ⅰに続いて，テキストに則して講義を行なった後に，日本企業で実践されている管理会計実務を資料によりながら紹介する予定である。

◇教科書・参考書：

教科書：上總康行『管理会計論』新世社。参考書：講義の中で指示します。

◇成績評価の方法：

定期試験の結果を重視する。

科目名：財務諸表分析論Ⅰ（夜） **宮西　賢次**

(00～06)財務諸表分析論Ⅰ

◇授業の目的と概要：

本講義では、財務諸表を用いた企業の業績分析について学ぶ。現代の財務諸表分析の標準的な内容は、さまざまな財務比率を用いた、いわゆる伝統的な財務諸表分析と統計的手法やファイナンスを応用した比較的テクニカルな手法に大別できる。本講義では、財務諸表の各項目の計算過程及び伝統的な財務諸表分析の基本的なテクニックについて概説する。

◇教科書・参考書：

教科書：「財務諸表分析」最新版、桜井久勝著、中央経済社

◇成績評価の方法：

期末試験（80点）とグループワークでの課題(20点)によって評価する。

科目名：財務諸表分析論Ⅱ（夜） **宮西　賢次**

(00～06)財務諸表分析論Ⅱ

◇授業の目的と概要：

本講義では、財務諸表を用いた企業の業績分析について学ぶ。現代の財務諸表分析の標準的な内容は、さまざまな財務比率を用いた、いわゆる伝統的な財務諸表分析と統計的手法やファイナンスを応用した比較的テクニカルな手法に大別できる。本講義では、財務諸表分析Ⅰの知識を踏まえ、統計的手法やファイナンスを応用した、より高度な分析手法について学ぶ。

◇教科書・参考書：

教科書：「財務諸表分析」最新版、桜井久勝著、中央経済社

◇成績評価の方法：

期末試験（80点）とグループワークでの課題(20点)によって評価する。

科目名：データベースシステムⅠ **谷口　伸一**

(01～06)データベースシステムⅠ・(00)データベースシステム論Ⅰ

◇授業の目的と概要：

データベースシステムⅠ，Ⅱを通して，データベースの基礎理論と設計・構築技術、インターネットとWebサーバの基礎，プログラミング技法とデータベース応用など情報技術を習得する．データベースシステムⅠでは，”データベースとは何か”からはじまって，関係データベースの基礎理論と演習によるデータベースの設計・構築，SQLによる検索方法などを習得する．将来SEを目指す人には，データベースシステムⅠ・Ⅱは必修科目と言えよう．また、高校教員免許『情報』の必修科目である．

◇教科書・参考書：

講義資料を配布。「IT Text データベース」速水治夫他、オーム社の併読を薦める。

◇成績評価の方法：

PC入力による出席、講義中の質問回答状況，レポート，基礎知識に関する筆記試験を総合的に評価する。

科目名：データベースシステムⅡ **谷口 伸一**

(01～06)データベースシステムⅡ・(00)データベースシステム論Ⅱ

◇授業の目的と概要：

データベースシステムⅠ，Ⅱを通して，データベースの基礎理論と設計・構築技術、インターネットとWebサーバの基礎，プログラミング技法とデータベース応用など情報技術を習得する．データベースシステムⅡでは，文系・理系を問わず要求される情報システムの設計・開発の基礎をプログラミング＋データベースによるWeb情報システム技法について演習主体に学ぶ．将来SEを目指す人には，データベースシステムⅠ・Ⅱは必修の科目であると言えよう．また、高校教員免許『情報』の必修科目である．

◇教科書・参考書：

講義資料を配布。VBScriptやASP関連の参考図書の併読を勧める。

◇成績評価の方法：

PCによる出席状況，質問の回答結果，小レポート、総合課題等を評価する．筆記試験は課さない．

科目名：経営システムの数理Ⅰ **内藤 雄志**

(00～06)経営システムの数理Ⅰ

◇授業の目的と概要：

企業経営において、科学的基礎に基づいた計画・意思決定を行うことや経営情報システムを設計する上で基礎となる、経営システム科学の理論や手法を紹介する。特に、生産、販売、投資などに関して、単一品目に対する最適在庫政策、経済的に有利な案を選択する理論や技術、関連する確率や統計の理論、数理モデルの作り方を紹介する。

◇教科書・参考書：

原則としてプリントを配布する。参考書は、配布プリントに掲載する。

◇成績評価の方法：

主に学期末試験（筆記試験の予定）と中間試験（レポートの予定）によって評価する。

科目名：経営システムの数理Ⅱ **内藤 雄志**

(00～06)経営システムの数理Ⅱ

◇授業の目的と概要：

企業経営において、科学的基礎に基づいた計画・意思決定を行うことや経営情報システムを設計する上で基礎となる、経営システム科学の理論や手法を紹介する。特に、生産や輸送の最適化に関する数理モデルの作り方、配送計画問題の近似解法、割当やスケジューリングの基本モデルに対する解法を紹介する。

◇教科書・参考書：

原則としてプリントを配布する。参考書は、配布プリントに掲載する。

◇成績評価の方法：

主に学期末試験（筆記試験の予定）と中間試験（レポートの予定）によって評価する。

科目名：マルチメディア情報処理 **冨田 健一　柴田 直樹**

(00～06)マルチメディア情報処理

◇授業の目的と概要：

(冨田担当部分) 本講義では，マルチメディアデータ(静止画像・動画像・音声)の表現方式，マルチメディアデータの加工，およびマルチメディアデータをコンテンツとするプレゼンテーションの作成について学ぶ. (柴田担当部分) 三次元グラフィックスの原理について講義を行った後，Java言語により実際にそのようなプログラミング演習を行ってもらう. 情報ネットワークIとIIを受講した後に本講義を受講することが望ましい. 高校で習った数学の知識を必要とする.

◇教科書・参考書：

プリントを配布します.

◇成績評価の方法：

レポートにより評価します.

科目名：消費者心理学Ⅰ **神山 進**

(00～06)消費者心理学Ⅰ

◇授業の目的と概要：

この講義では、成熟社会における消費を、企業のマーケティング戦略と消費者の生活戦略の観点から、また両者のダイナミックな関わりから学ぶ。テーマはマーケティングと消費であり、講義内容は、Ⅰ. 成熟社会における消費、Ⅱ. 成熟社会におけるマーケティング(現代企業のマーケティング戦略の概要、戦略各論、マーチャンダイジングと小売ミックス)、Ⅲ. 消費者の意思決定(消費者の購買意思決定、商品購入基準／使用基準／廃棄基準、購買後消費者行動)、Ⅳ. リスク敢行としての消費者行動、などである。

◇教科書・参考書：

教科書：神山進著『消費者の心理と行動』サンライズ出版参考書：杉本徹雄編著『消費者理解のための心理学』福村出版

◇成績評価の方法：

学期末のマークシート方式の試験(60点)、通常授業時に行う5回の論述テスト(40点)による。

科目名：消費者心理学Ⅱ **神山 進**

(00～06)消費者心理学Ⅱ

◇授業の目的と概要：

商品の獲得を通して多様な欲望や価値を実現しようとする、消費者の心理や行動を論じる。講義内容は、1. 商品価値と消費文化、2. 記号・快楽消費、3. 消費の地域差・年代差、4. 社会階層と消費、5. 商品の普及と集団過程、6. 消費者の購買態度とその変容、7. 広告と消費者の心理、8. 心理的財布、9. 消費の個人差を規定する要因、10. 商品知覚と購買心理、11. ブランド商品・高級品の購入心理、12. 購買動機を説明する理論的試み、などである。

◇教科書・参考書：

教科書：神山進著『消費者の心理と行動』サンライズ出版参考書：杉本徹雄編著『消費者理解のための心理学』福村出版

◇成績評価の方法：

学期末のマークシート方式の試験(60点)、通常授業時に行う5回の論述テスト(40点)による。

科目名：認識論Ⅰ **西村　正秀**

(00～06)認識論Ⅰ

◇授業の目的と概要：

ある事柄を知っていることと、単に信じていることとは何が違うのだろうか？本講義では、「ある事柄を「知っている」ために必要な条件とは何か」という問題を検討する。具体的には、最初に「信念」、「知識」、「正当化」などの基本概念を説明した後に、内在主義、外在主義、基礎付け主義、整合主義といった代表的な知識の理論を取り上げて検討する。

◇教科書・参考書：

参考書：戸田山和久『知識の哲学』、産業図書、2002年。参考書：ローレンス・バンジョー＆アーネスト・ソウザ 『認識的正当化』、産業図書、2006年。

◇成績評価の方法：

出席、中間試験、期末試験によって評価する。詳細は第一回講義で説明する。

科目名：認識論Ⅱ **西村　正秀**

(00～06)認識論Ⅱ

◇授業の目的と概要：

我々は普段多くの事柄を知っていると思っているが、本当は知らないのではないか？このような「知識は不可能だ」ということを示す議論を「懐疑論」と言う。本講義では、我々はどうすれば懐疑論を退けることができるのか(あるいは、できないのか)という問題を検討する。そのために、最初に懐疑論の幾つかのタイプを紹介し、その後で、近世と現代における代表的な懐疑論反駁の試みを吟味する。なお、本講義は認識論Ⅰとは独立の講義であり、その履修にあたり後者の履修を必要とはしない。

◇教科書・参考書：

参考書：戸田山和久『知識の哲学』、産業図書、2002年。参考書：バリー・ストラウド『君はいま夢を見ていないとどうして言えるのか』、春秋社、2006年。

◇成績評価の方法：

出席、中間試験、期末試験によって評価する。詳細は第一回講義で説明する。

科目名：認知心理学 **谷上　亜紀**

(00～06)認知科学入門

◇授業の目的と概要：

人間の心の働きを一種の情報処理過程とみなし、そのプロセスを明らかにしようとするのが認知心理学です。この授業では、記憶、思考、言語などの心の働きについて、認知心理学の立場から得られた知見を学びます。人の心とコンピューターとはどのように似ているのか、また違っているのかということを考えながら、人間についての認識を深めることを目的とします。

◇教科書・参考書：

なし

◇成績評価の方法：

試験による。

科目名：文化人類学 **福浦　厚子**

(04～06)文化人類学・(94～03)文化人類学Ⅰ

◇授業の目的と概要：

この授業の目的は文化人類学というものについて概説し、個々の文化人類学の研究方法や理論について俯瞰することで、理解することにある。 そのため、さまざまな社会の出来事についての見方、考え方を文化人類学的な側面から行うとどうなるのか、といったことを検討します。

◇教科書・参考書：

テキストの購入は義務ではありません。どういうテキストを用いるかについて初回の講義のなかで説明します。

◇成績評価の方法：

講義のなかで書いて提出してもらうものに対して評価する平常点評価。

科目名：社会システム論特殊講義 ジャーナリズム論 **土江　真樹子**

◇授業の目的と概要：

私たちの生活のなかにある「新聞」、「テレビ」をはじめとするメディアを通してジャーナリズムとは？ジャーナリストとはどのような仕事なのかを学びます。授業では現役のジャーナリストを外部講師に迎え、ジャーナリズムの「現場」の生の声を聞き、ディスカッションを行う事からメディアの基本的な読み方、接し方、「メディアリテラシー」を身につけることを目的とします。新聞を読み、テレビ、ドキュメンタリーを見る事を薦めます。

◇教科書・参考書：

「可視化のジャーナリスト」/ 早稲田大学出版社「ジャーナリズムの条件　1－4」/ 岩波出版「闘うドキュメンタリー～テレビが再び輝くために」川良浩和著 / NHK出版社「密約」　澤地久枝著 / 岩波出版「プロフェッショナル」/ NHKエンタープライズ「ジャーナリズムの思想」/ 原寿雄　岩波書店

◇成績評価の方法：

毎回の授業時のレポートをメインに、理解度、出席、授業への積極的参加（外部講師とのディスカッションなど）を総合し判断します。

科目名：社会システム論特殊講義 現代のジャーナリズム **土江　真樹子**

◇授業の目的と概要：

新聞やテレビといった身近なメディアを通してジャーナリズムとは何なのか？ジャーナリストは何を伝えるべきなのかを考える講義です。ドキュメンタリー番組や新聞記事を使用して、「今」を読み解きます。また、現役のジャーナリストを講師に「報道の現場」を生の言葉で伝えてもらい、ディスカッションなどを交えて理解を深めます。さらにメディアの基本的な読み方と接し方、広い意味での「メディアリテラシー」を身につけることを目的とします。講義の対象は全学年。授業内容によっては公開授業の可能性もあります。

◇教科書・参考書：

「可視化のジャーナリスト」/ 早稲田大学出版社「ジャーナリズムの条件　1－4」/ 岩波出版「闘うドキュメンタリー～テレビが再び輝くために」川良浩和著 / NHK出版社「密約」　澤地久枝著 / 岩波出版「プロフェッショナル」/ NHKエンタープライズ「ジャーナリズムの思想」/ 原寿雄　岩波書店

◇成績評価の方法：

毎回の授業内容にそってレポートを提出。また授業への積極的参加、外部講師とのディスカッション、授業内容の理解度などを考慮に入れて評価します。

科目名：リーダーシップ論　　陵水会OB

◇授業の目的と概要：

・リーダーシップを身につけるきっかけづくりの場をめざす。・リーダーシップは理論を鑑賞するだけでなく、実体験に基づく持論を聞くことによってリーダーシップの実践を感じる。・持論と理論を結び付けてリーダーシップへの理解を深める。

◇教科書・参考書：

◇成績評価の方法：

講義ごとのレポートにより評価する。

資料3

コース科目履修登録者数一覧（平成21年度）

	科目名	春学期開講	履修登録者数	秋学期開講	履修登録者数
コア科目	統計学A	○	503	○	171
	統計学B	○	316	○	102
	ミクロ経済学A			○	590
	ミクロ経済学B	○	233		
	経営学	○	336	○	548
	簿記会計A	○	623	○	43
	簿記会計B	○	288	○	723
	科学方法論				
経済学科	情報とリスクの経済学				
	産業政策論			○	136
	産業組織論	○	150		
	応用統計学				
	数理統計学				
	計量経済学Ⅰ	○	72		
	計量経済学Ⅱ			○	47
	地域経済論	○	237		
ファイナンス学科	金融のミクロ経済学Ⅰ			○	62
	ファイナンス基礎数学	○	95		
	ファイナンス数学			○	58
	ベンチャーファイナンス論				
企業経営学科	近江商人経営論			○	163
	流通システム論			○	485
	マーケティング論	○	249		
	ブランドマネジメント				
	企業と文化			○	465

会計情報学科	管理会計総論Ⅰ	○	165		
	管理会計総論Ⅱ			○	133
	財務諸表分析論Ⅰ	○	131		
	財務諸表分析論Ⅱ			○	103
情報管理学科	データベースシステムⅠ	○	77		
	データベースシステムⅡ			○	51
	経営情報システム設計論Ⅰ				
	経営情報システム設計論Ⅱ				
	経営システムの数理Ⅰ	○	118		
	経営システムの数理Ⅱ			○	133
	マルチメディア情報処理				
	オペレーションズ・リサーチ				
社会システム学科	マス・メディア論				
	産業心理学Ⅰ				
	産業心理学Ⅱ				
	消費者心理学Ⅰ	○	377		
	消費者心理学Ⅱ			○	282
	科学哲学Ⅰ	○	253		
	科学哲学Ⅱ	○	121		
	認識論Ⅰ				
	認識論Ⅱ				
	認知心理学				
	行動科学Ⅰ				
	行動科学Ⅱ				
	文化人類学				
	社会システム特殊講義（ジャーナリズム論）	○	21	○	37
実践・体験科目	現代の経済			○	121
	現代の経営				
	リーダーシップ論			○	38

外部連携科目	創造的仕事の技術と知識			○	73
	ものづくり、人づくり、地域づくり			○	74
プロジェクト科目	人前で話そうプロジェクトー教える経験100人計画Ⅱー	○	16		
	話す力・教える力を育むー教える経験100人計画ー			○	10
	映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト2009春	○	29		
	映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト2009秋			○	20
	仕事と現代経済プロジェクト2009	○	23	○	23

灰色の科目は21年度に開講なし

コース科目履修登録者数一覧（平成22年度）

	科目名	春学期開講	履修登録者数	秋学期開講	履修登録者数
コア科目	統計学A	○	417	○	434
	統計学B	○	325	○	244
	ミクロ経済学A	○	263	○	717
	ミクロ経済学B	○	258	○	112
	経営学	○	192	○	584
	簿記会計A	○	726	○	173
	簿記会計B	○	241	○	773
	科学方法論			○	651
経済学科	情報とリスクの経済学	○	616		
	産業政策論			○	98
	産業組織論				
	応用統計学			○	31
	数理統計学				
	計量経済学Ⅰ	○	50		
	計量経済学Ⅱ				
	地域経済論	○	125		
ファイナンス学科	金融のミクロ経済学Ⅰ			○	94
	ファイナンス基礎数学	○	145		
	ファイナンス数学			○	60
	ベンチャーファイナンス論				
企業経営学科	近江商人経営論			○	260
	流通システム論				
	マーケティング論	○	317		
	ブランドマネジメント				
	企業と文化				

会計情報学科	管理会計総論Ⅰ	○	145		
	管理会計総論Ⅱ	○	103		
	財務諸表分析論Ⅰ	○	98		
	財務諸表分析論Ⅱ			○	72
情報管理学科	データベースシステムⅠ	○	76		
	データベースシステムⅡ			○	61
	経営情報システム設計論Ⅰ				
	経営情報システム設計論Ⅱ				
	経営システムの数理Ⅰ	○	160		
	経営システムの数理Ⅱ			○	125
	マルチメディア情報処理			○	65
	オペレーションズ・リサーチ				
社会システム学科	マス・メディア論				
	産業心理学Ⅰ				
	産業心理学Ⅱ				
	消費者心理学Ⅰ	○	272		
	消費者心理学Ⅱ			○	241
	科学哲学Ⅰ				
	科学哲学Ⅱ				
	認識論Ⅰ			○	185
	認識論Ⅱ			○	103
	認知心理学			○	313
	行動科学Ⅰ				
	行動科学Ⅱ				
	文化人類学	○	123		
	社会システム特殊講義（ジャーナリズム論）	○	74	○	230
実践・体験科目	現代の経済				
	現代の経営			○	197
	リーダーシップ論			○	205

外部連携科目	創造的仕事の技術と知識			○	93
	ものづくり、人づくり、地域づくり			○	112
プロジェクト科目	彦根映像	○	33		
	ビジネス・ゲーム	○	30		
	速修・株式会社会計	○	16		
	相手に理解してもらうための技法			○	16
	THE 彦根学			○	48
	彦根映像プロジェクト10秋			○	21
	BATIC Subject			○	14
	仕事と現代経済	通年　33			

灰色の科目は平成22年度開講なし

資料4

平成22年度専門コース制認定実績

平成22年度卒業生の専門コース申請者数・合格者数一覧

コース名	申請者	合格者
社会経済システムコース	8	7
現代経済分析コース	5	1
公共政策コース	5	2
国際経済コース	2	1
金融システムコース	2	0
現代ファイナンスコース	2	0
企業分析コース	6	0
戦略マネジメントコース	8	3
マーケティングコース	6	0
企業会計コース	7	4
経営情報コース	5	0
情報システムコース	2	0
法システムコース	1	0
歴史と経済コース	0	0
環境コース	3	0
現代社会分析コース	5	4
グローバリーゼーションコース	5	1
サービスイノベーションコース	0	0

平成22年度在学生の専門コース申請者数・合格者数一覧

コース名	申請者	合格者
社会経済システムコース	22	7
現代経済分析コース	18	1
公共政策コース	28	4
国際経済コース	14	1
金融システムコース	25	2
現代ファイナンスコース	20	2
企業分析コース	54	1
戦略マネジメントコース	56	4
マーケティングコース	50	2
企業会計コース	49	5
経営情報コース	25	3
情報システムコース	7	1
法システムコース	16	0
歴史と経済コース	3	0
環境コース	11	0
現代社会分析コース	19	4
グローバリーゼーションコース	21	1
サービスイノベーションコース	11	1

TA/SAの任用実績（平成22年度春学期）

No.	科目等	提出教員	指導教員	人数	期　間	担当曜日	担当時間	合計時間数	備考
1	比較金融システムⅠ（春学期）・ 比較金融システムⅡ（秋学期）	有馬敏則	有馬敏則	(TA) 1名	H22.4.13～H23.1.25	火曜日	5限（16:10～17:40）	96時間	（通年）任用1人 院Dr.負担軽減
2	証券市場論（春学期）・ コーポレートファイナンス論（秋学期）	二上季代司	二上季代司	(TA) 1名	H22.4.9～H23.1.21	金曜日	（春）5限（16:10～17:40） （秋）2限（10:30～12:00）	70時間	（通年）任用1人 院Dr.負担軽減
3	コンピュータ会計論Ⅰ（春学期）・ コンピュータ会計論Ⅱ（秋学期）	後藤實男	後藤實男	(SA) 2名	H22.4.1～H23.3.31	金曜日	2限（10:30～12:00）	（1.5時間×30回）×2名＝90時間	（通年）任用2人 院Dr.負担軽減
4	海外地域経済論（春学期）・ 世界経済論（秋学期）	小倉明浩	小倉明浩	(TA) 1名	H22.4.13～H23.1.18	火曜日	1限（8:50～10:20）	1.5時間×30回＝45時間	（通年）任用1人
5	情報リテラシー（昼間主） 情報リテラシー（夜間主）	堀本三郎	堀本・柴田・冨田	(SA) 3名	H22.4.1～H22.9.30	月・水・木曜日	（月） 12:00 - 14:00 （水） 12:00 - 14:00 （木） 17:30 - 19:30	（2時間×15回）×3名＝90時間	（春学期）任用3人 ※授業時間以外に、情報処理センター演習室にて、課題の作成や使用方法等についての質問に対応する業務が必要
6	計量経済学Ⅰ（昼）	得田雅章	得田雅章	(TA) 1名	H22.4.12～H22.7.12	月曜日	月・1限（8:50～10:20）	1.5時間×15回＝22.5時間	1人のTAが、15回の授業補助
7	論理の世界	渡辺凡夫	渡辺凡夫	(TA) 1名	H22.4.5～H22.7.30	水曜日	4限（14:30～16:00）	1.5時間×15回＝22.5時間	1人のTAが、15回の授業補助
8	コアセッション・ミクロ経済学B①②	大川良文	大川良文	(SA) 3名	H22.4.8～H22.8.31	金曜日	4限（14:30～16:00）×2名 5限（16:10～17:40）×2名	90時間	1クラスに1人のTA・SAがつき、15回の授業補助
9	コアセッション・マクロ経済学B①②	特任講師(織田陽介)	特任講師(織田陽介)	(SA)12名	H22.4.8～H22.8.31	木曜日	4限（14:30～16:00）×8名 5限（16:10～17:40）×6名	315時間	1クラスに2～3人のTA・SAがつき、15回の授業補助（計12名）
10	コアセッション・統計学A①	中野裕治	中野裕治	(SA)2名　(TA)1名	H22.4.8～H22.8.31	木曜日	3限（12:50～14:20）×2名	45時間	1クラスに2人のTA・SAがつき、15回の授業補助（1クラス開講）
11	コアセッション・統計学B①②	大濱巌	大濱巌	(SA)6名	H22.4.8～H22.8.31	金曜日	3限（12:50～14:20）×4名 4限（14:30～16:00）×4名	180時間	1クラスに2人のTA・SAがつき、15回の授業補助（3限2クラス，4限2クラス，計4クラス開講予定）（計6名）
12	コアセッション・簿記会計A①②③④⑤	特任教員(稲山訓央)	特任教員(稲山訓央)	(SA)12名	H22.4.8～H22.8.31	木曜日	3限（12:50～14:20）×12名	270時間	1クラスに2～3人のTA・SAがつき、15回の授業補助(計12名)
13	コアセッション・簿記会計B①	赤塚尚之	赤塚尚之	(SA)3名	H22.4.8～H22.8.31	金曜日	3限（14:30～16:00）×3名	67．5時間	1クラスに3人のTA・SAがつき、15回の授業補助(計3名)
14	学習教育支援室	（弘中史子）	（弘中史子）	コア・セッション担当のTA・SAでシフトを組み交代勤務	H22.4.8～H23.2.28	月～金曜日	4時間（90分・90分・60分） シフト1～2名体制	1,200時間	授業期間中、コアセッション担当のTA・SAがシフトを組んで、学習教育支援室で質問、相談の受付を行う。 1日あたり4時間（90分・90分・60分）を1～2名体制で勤務。
15	滋賀大学で学ぶ		（学長　他）	(TA) 1名	H22.4.16～H22.8.31 H22.10.1～H23.2.28	金曜日	3限（12:50～14:20）	60時間	1人のTAが、期間中30回の授業補助

資料5

16	統計学A①	中野裕治	中野裕治	(TA)1名	H22.4.8～H22.8.31	木曜日	1限(8:50～10:20)	1.5時間×15回＝22.5時間	1人のTA・SAが、15回の授業補助
17	社会システム特殊講義(1)(ジャーナリズム論)	土江真樹子	土江真樹子	(SA) 1名	H22.4.8～H22.731	月曜日	5限(16:10～17:40)	42時間	1人のTA・SAが、1回3時間の授業補助 (サービス・イノベーション経費)
18	映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト	井手 一郎・土江 真樹子	土江 真樹子	(SA) 1名	H22.4.12～H22.731	火曜日	2限(10:30～12:00)	51時間	1人のTA・SAが、1回3時間の授業補助 (サービス・イノベーション経費)

TA/SAの任用実績(平成22年度秋学期)

NO	科目等	提出教員	指導教員	人数	期間	担当曜日	担当時間	合計時間数	備考
1	コア・セッション マクロ経済学A①②	特任講師 (織田 陽介)	特任講師 (織田 陽介)	〔SA〕9名	H22.10.1～H23.2.28	木曜日	4限 (14:30～16:00)×3 5限 (16:10～17:40)×3	135時間	1クラスに2～3人のTA・SAがつき、15回の授業補助
2	コアセッション 統計学A②③	得田 雅章	得田 雅章	〔SA〕7名	H22.10.1～H23.2.28	金曜日	3限 (12:50～14:20)×4 4限 (14:30～16:00)×4	180時間	1クラスに2人のTA・SAがつき、15回の授業補助(3限2クラス, 4限2クラス, 計4クラス開講予定)
3	コアセッション 統計学B③	中野裕治	中野裕治	〔TA〕2名	H22.10.1～H23.2.28	木曜日	4限 (14:30～16:00)×2	45時間	1クラスに2人のTA・SAがつき、15回の授業補助
4	コアセッション 簿記会計B②・③・④・⑤	特任教員 (稲山訓央)	特任教員 (稲山訓央)	〔SA〕9名	H22.10.1～H23.2.28	木曜日	3限 (12:50～14:20) ×9	203時間	1クラスに2～3人のTA・SAがつき、15回の授業補助(計9名)
5	コアセッション 簿記会計A⑥	衣笠陽子	衣笠陽子	〔SA〕3名	H22.10.1～H23.2.28	木曜日	4限 (14:30～16:00)×2	45時間	1クラスに2人のTA・SAがつき、15回の授業補助
6	コアセッション ミクロ経済学A①②	河相 俊之	河相 俊之	〔SA〕4名	H22.10.1～H23.2.28	金曜日	3限 (12:50～14:20)×4 5限 (16:10～17:40)×4	180時間	1クラスに3～4人のTA・SAがつき、15回の授業補助
7	学習教育支援室	(吉川 英治)	(吉川 英治)	コア・セッション担当のTA・SAでシフトを組み交代勤務	H22.10.1～H23.2.28	月～金曜日	4時間 (90分・90分・60分)	(年間) 1200時間	授業期間中、コアセッション担当のTA・SAがシフトを組んで、学習教育支援室で質問、相談の受付を行う。 1日あたり4時間(90分・90分・60分)を1～2名体制で勤務。
8	経済数学Ⅰ	中野 裕治	中野 裕治	〔TA〕1名	H22.10.1～H23.3.31	水曜日	1限 (8:50～10:20)	30時間	1人のTAが15回の授業補助 ※授業時間(90分)以外に、授業の準備・学生の出欠チェック・学生へのアドバイス・解答指導など30分を必要とする。
9	科学方法論	渡邉 凡夫	黒石・柴山・西村、渡邉	〔TA〕2名	H22.10.1～H23.1.30	金曜日	2限 (10:30～12:00)×2	45時間	1クラスに1人のTAが、15回の授業補助 2クラスでTA2名任用
10	アクティブ・ラーニング・ラボ(ALL)における主体的・集団的学習支援	吉川 英治	吉川、坂野、出原	〔SA〕5名	H22.10.1～H23.3.31	月～金曜日	17:30～19:30(2時間) (2時間×20日×6カ月)	240時間	5名がシフトを組み、原則として1日2時間、1名のSAを配置。 ALLの管理運営及び利用者支援(学習支援、講習会・学習会・相談会等)を行う。
11	社会システム特殊講義 (現代のジャーナリズム)	土江 真樹子	土江 真樹子	〔SA〕1名	H22.10.1～H23.1.31	月曜日	3時間(15:00～18:00)	42時間	1人のSAが14回の授業補助

12	映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト2010秋	土江　真樹子	土江　真樹子	〔SA〕 1名	H22.10. 1～H23. 3.31	火曜日	3時間(9:00～12:00)	51時間	1人のSAが12回の授業補助と合評会及び編集補助
13	相手に理解してもらうための技法ー教える経験100人計画Ⅳ	大濵　嵌	大濵　嵌　　弘 中　史子	〔SA〕 2名	H22.10. 14～H23. 1.20	木曜日	2時間(10:20～12:20)	52時間	学術後援基金

資料6

社会システム論特殊講義　授業内容

（「ジャーナリズム論」「現代のジャーナリズム」）

土江真樹子（特任准教授）

2008年度秋学期

10月 2日　開講ガイダンス
　　9日　ジャーナリズム概論、ドキュメンタリー鑑賞
　　16日　記録するとは
　　23日　竹内弘一氏（KBS 京都アナウンサー）「対談、インタビューとは」
11月 6日　三原渡氏　（NHK 大津放送局長）「放送とは」
　　13日　川端俊一氏（朝日新聞東京本社）「新聞記者とは」
　　20日　綿井健陽氏（アジアプレス）「光市母子殺人事件、もう一つの見方」
　　27日　テレビメディア論
12月 4日　テレビニュースとは
　　11日　言美幸一氏（ニュースタイムジャパン）「カメラマンの仕事」
　　18日　新聞メディアとは
　　25日　新聞を読む
1月　8日　松本修氏（朝日放送プロデューサー）「探偵！ナイトスクープ制作の現場から」
　　15日　アイリーン・スミス氏（グリーンアクション代表）
　　＊「滋賀大学で環境を学ぶ」との合同授業

2009年度

4月 13日　只友景士准教授　講義内容説明、ドキュメンタリー上映
　　20日　ドキュメンタリー上映およびドキュメンタリー概論
　　27日　メディアリテラシー、新聞記事の読み方
5月 11日　竹内弘一氏（KBS 京都アナウンサー）「コニュニケーションとしての対談、インタビュー」
　　18日　戦争報道について
　　25日　綿井健陽氏（アジアプレス）「あのサダムフセインは誰が倒したのか～テレビが写し出す光景～」
6月　1日　新聞記事を読む
　　8日　原寿雄氏（本共同通信編集主幹）「ジャーナリズムの役割」
　　＊公開講座

　　15日　阿部裕一氏（読売テレビ報道局）「テレビニュースの現場から」
　　22日　川端俊一氏（朝日新聞東京本社）「検証報道」
　　29日　メディアリテラシー概論
7月　6日　メディアリテラシー概論
　　13日　森達也氏（映画監督／ドキュメンタリー作家）「メディアと向き合う」
　　＊公開講座

10月 19日　新聞記事を読む
　　26日　太田昌克（共同通信編集委員）「核密約スクープを追って」

11月 2日　テレビメディア論
　　9日　沢田隆三氏（毎日放送報道部）「ローカルテレビ局のありかた・テレビドキュメンタリーとは」
　　16日　ローカル局とキー局概論
　　23日　沖縄密約報道の歴史と経過
　　30日　西山太吉氏（元毎日新聞記者）「沖縄密約の今日的課題」
　　＊公開講座

12月 7日　吉岡功氏（オルタスジャパン）「テレビドキュメンタリーの現場」
　　14日　松元剛氏（琉球新報政経部）「地方紙の役割と可能性」
　　21日　竹内弘一氏（KBS 京都アナウンサー）「インタビューとは」

2010年度

4月　12日　ジャーナリズム、メディアリテラシー論概論
　　19日　新聞の読み方
　　26日　竹村登茂子（読売新聞大阪本社）「新聞社、新聞を巡る現状」
5月　10日　綿井健陽氏（アジアプレス）「THE COVE」
　　17日　宮城さつき氏（フリーアナウンサー）「記憶を聞き取る」
　　24日　記憶を記録すること
　　31日　平井裕子氏（テレビ東京報道部）「ガイアの夜明けが出来るまで　経済を映像化すること」
6月　7日　インタビュー概論
　　14日　新聞を読む
　　21日　國森康弘氏（フリーフォトジャーナリスト）「写真が語る戦争」
　　28日　新聞記事を読み解く
7月　5日　新聞を読み比べる
　　12日　阿武野勝彦氏（東海テレビ報道部）「ドキュメンタリーとは」
10月　4日　平井裕子氏（テレビ東京報道部）「経済人に学べ」
　　18日　メディアリテラシー概論
　　25日　冨田直子氏（MEMORO 代表）「記憶の銀行」
11月　1日　西村美智子氏（朝日放送報道部）「自分の考えを持つ」
　　8日　黒田福美氏（俳優）「事実は真実を伝えるか～メディアによって操作される朝鮮報道」
　　15日　アリカワコウヘイ氏（画家）「アリカワコウヘイ！の生き方」
　　22日　新聞を読む
　　29日　竹内弘一氏（KBS 京都アナウンサー）「インタビュー、対談」
12月　6日　川良浩和氏（NHK エンタープライズ）「ドキュメンタリーとは」
　　13日　ウィキリークスと報道
　　20日　石丸次郎氏（アジアプレス）「不可視の北朝鮮報道を伝える、記録する」
　　27日　松石泉氏（構成作家）「テレビ番組が出来るまで」

以上

資料7

映像関係のプロジェクト科目で学生が制作した映像作品のリスト

注：ーーーは作品なしでの報告。
作品を完成できなかったグループの学生数は記載していない。

「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト2008年秋学期」合評会　2009年3月24日

作品タイトル	制作にかかわった学生数
曾山寺駅	1
ほ・な・ね	1
俺たちのガンバ	1
面接をしよう！	6
彦根散歩	1
ーーー	1

「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト2009年春学期」合評会　2009年8月31日

作品タイトル	制作にかかわった学生数
滋賀大CM	3
ヴォーリズ建築を訪ねて	4
果匠禄兵衛ー木之本からの挑戦ー	1
ひこにゃん研究レポート	3
弓道 master	2
ネマニャ君が教えてくれたこと	3
生協の割引について	1

「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト2009年秋学期」合評会　2009年2月9日

作品タイトル	制作にかかわった学生数
囲碁部へGO！	4
アルティメットPV	3
フランスフジオン村のワークキャンプ	1
SIFEの挑戦	3

「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト2010年春学期」合評会　2010年8月24日

作品タイトル	制作にかかわった学生数
Achaper　～俺たちの挑戦～	4
滋賀大を元気にするプロジェクト ～チーズスティックバー編～	2
滋賀大7不思議	2
＝SIFE	6
陵水新聞ができるまで	1
アルティメットPV	3
ヴォーリズ建築に生きる～ダレン・ダモンテ～	4
カモンちゃんPV	1
Third-hand smoker	1
ESS　PV	4

「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト2010年秋学期」合評会　2010年12月21日

作品タイトル	制作にかかわった学生数
全力投球★留学生	1
警備員から見た滋賀大学	1
秋の記憶	1
アメリカ横断記	1
祖父母の記憶	1
おばあちゃんの子供のころ	1

同　合評会（2回目）　2011年2月22日

作品タイトル	制作にかかわった学生数
国際交流会館紹介	1
普段着の冒険～あなたの知らないこの街の魅力	2
彦根キャッスルズ	1

仕事と現代経済プロジェクト2009作品

作品タイトル	制作にかかわった学生数
滋賀大学を撮る　滋賀大学を編集する	5
ソーシャルアセット	3
日本電産	3
障害者雇用	5
戸田一雄氏～文系としてのイノベーション	3

仕事と現代経済プロジェクト2010作品

作品タイトル	制作にかかわった学生数
FC 岐阜	2
たねや伝統と革新	2
ホロニック	3
日本電気硝子	2

資料8

プロジェクト科目企画申請書

プロジェクトの名称	映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト（略称：彦根映像プロジェクト）
プロジェクトの概要	１．学生が主体となって、滋賀大学彦根キャンパス、彦根・湖東湖北地域の町並み・自然、地域の学生生活・学生文化等を、ヴィデオカメラ、写真機等で撮影し、編集を加え、映像作品にまとめる。 ２．地域の人々や企業等を調査・取材し、インタヴューを通じて、地域の魅力や可能性、課題等を明らかにし、それらを1と合わせて映像作品に仕上げる。 ３．これらの作品をインターネット上で公開する。 なお、本プロジェクトはサービスイノベーション人材育成事業の一部として計画・実施されるものである。
担　当　教　員	井手一郎准教授（経済学部） 土江真樹子特任准教授（経済学部）
具体的な授業形態及び授業計画	本科目は講義と実習で構成される。 井手は、サービスイノベーション人材育成事業や本科目の創設の意図、滋賀大学経済学部の競争的位置、地域の競争力強化のためのメディア戦略、地域に優秀な人材を集めるためには大都市優先の価値観を転換する必要があること等、全体戦略に関する講義を行う。 土江は、映像作品をまとめる過程で必要となる実践的なスキル、特に、インタヴューの技法やドキュメンタリー制作の手順等を講義する。実習においては、受講生はカメラやマイク等を持って地域に出て取材・撮影を行うが、その実践的な指導は主に土江が担当する。 10月に参加者を募集し、11月に本格稼動する。3月までに映像作品を仕上げ、インターネット上で公開したい。
認 定 単 位 数	１単位　講義　７時間，体験学習　１６時間
成績評価 の 方法	積極的な議論への参加、制作への貢献、最終的な作品の出来等を総合的に評価する。
期待される教育効果	１．きわめて汎用性の高い映像スキルの修得。 ２．チームとして映像作品を仕上げることを通じる、リーダーシップや共同作業の経験の蓄積。 ３．地域を良く見て取材・撮影することを通じる、地域の可能性への開眼効果・批判能力の育成。 ４．インタヴューの前提として専門知識が必要であることから生じる専門的学習へのインセンティヴ効果。 ５．インタヴューを通じる、年長社会人との交流経験の蓄積。
募集人数及び要件等	２０－３０人。技能的な要件は特に設けない。 （なお、本プロジェクトは来年以降も継続・充実されるべき一連の映像関連プロジェクトの着手と位置付けられるので、来年度以降への継続性という点からは、１－２回生の多数の応募を期待している。）

プロジェクト科目企画申請書

プロジェクトの名称	映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト 2009 年度春学期 （略称：「彦根映像プロジェクト 09 春」あるいは「彦根映像プロジェクト」）
プロジェクトの概要	昨年度秋学期から開始された「彦根映像プロジェクト」を継承・発展させ、新たな科目名の下で、より高度な題材を含む新課題に取り組ませ、本学の映像スキルの向上・サービスイノベーション事業への一層の展開を支援したい。 具体的な作業の概要は以下の通り。 １．学生が主体となって、滋賀大学彦根キャンパス、彦根・湖東湖北地域の町並み・自然、地域の学生生活・学生文化等を、ヴィデオカメラ、写真機等で撮影し、編集を加え、映像作品にまとめる。 ２．地域の人々や企業等を調査・取材し、インタヴューを通じて、地域の魅力や可能性、課題等を明らかにし、それらを１と合わせて映像作品に仕上げる。 ３．これらの作品をインターネット等で公開する。 なお、本プロジェクトはサービスイノベーション人材育成事業の一部として計画・実施されるものである。
担　当　教　員	井手一郎准教授（経済学部） 土江真樹子特任准教授（経済学部）
具体的な授業形態及び授業計画	本科目は講義と実習で構成される。 井手は、サービスイノベーション人材育成事業や本科目の創設の意図、滋賀大学経済学部の競争的位置、地域の競争力強化のためのメディア戦略、地域に優秀な人材を集めるためには大都市優先の価値観を転換する必要があること等、全体戦略に関する講義を行う。 土江は、映像作品をまとめる過程で必要となる実践的なスキル、特に、インタヴューの技法やドキュメンタリー制作の手順等を講義する。実習においては、受講生はカメラやマイク等を持って地域に出て取材・撮影を行うが、その実践的な指導は主に土江が担当する。 ４月に参加者を募集、本格稼動し、８月までに映像作品を仕上げ、インターネット等で公開したい。
認　定　単　位　数	２単位　講義　１４時間，体験学習　３２時間
成績評価の方法	積極的な議論への参加、制作への貢献、最終的な作品の出来等を総合的に評価する。
期待される教育効果	１．きわめて汎用性の高い映像スキルの修得。 ２．チームとして映像作品を仕上げることを通じる、リーダーシップや共同作業の経験の蓄積。 ３．地域を良く見て取材・撮影することを通じる、地域の可能性への開眼効果・批判能力の育成。 ４．インタヴューの前提として専門知識が必要であることから生じる専門的学習へのインセンティヴ効果。 ５．インタヴューを通じる、年長社会人との交流経験の蓄積。
募集人数及び要件等	２０－３０人。技能的な要件は特に設けない。

プロジェクト科目企画申請書

プロジェクトの名称	映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト 2009 年度秋学期 （略称：「彦根映像プロジェクト 09 秋」あるいは「彦根映像プロジェクト」）
プロジェクトの概要	昨年度秋学期から開始された「彦根映像プロジェクト」を３期目に継承・発展させ、新たな科目名の下で、より高度な題材を含む新課題に取り組ませ、本学の映像スキルの向上・サービスイノベーション事業への一層の展開を支援したい。 具体的な作業の概要は以下の通り。 １．学生が主体となって、滋賀大学彦根キャンパス、彦根・湖東湖北地域の町並み・自然、地域の学生生活・学生文化等を、ヴィデオカメラ、写真機等で撮影し、編集を加え、映像作品にまとめる。 ２．地域の人々や企業等を調査・取材し、インタヴューを通じて、地域の魅力や可能性、課題等を明らかにし、それらを１と合わせて映像作品に仕上げる。 ３．これらの作品を上映会・インターネット等で公開する。 なお、本プロジェクトはサービスイノベーション人材育成事業の一部として計画・実施されるものである。
担　当　教　員	井手一郎准教授（経済学部） 土江真樹子特任准教授（経済学部）
具体的な授業形態及び授業計画	本科目は講義と実習で構成される。 井手は、サービスイノベーション人材育成事業や本科目の創設の意図、滋賀大学経済学部の競争的位置、地域の競争力強化のためのメディア戦略、地域に優秀な人材を集めるためには大都市優先の価値観を転換する必要があること等、全体戦略に関する講義を行う。 土江は、映像作品をまとめる過程で必要となる実践的なスキル、特に、インタヴューの技法やドキュメンタリー制作の手順等を講義する。実習においては、受講生はカメラやマイク等を持って地域に出て取材・撮影を行うが、その実践的な指導は主に土江が担当する。 １０月に参加者を募集、本格稼動し、年度末までに映像作品を仕上げ、合評会を行いたい。
認　定　単　位　数	２単位　講義　１４時間，体験学習　３２時間
成績評価の方法	積極的な議論への参加、制作への貢献、最終的な作品の出来等を総合的に評価する。
期待される教育効果	１．きわめて汎用性の高い映像スキルの修得。 ２．チームとして映像作品を仕上げることを通じる、リーダーシップや共同作業の経験の蓄積。 ３．地域を良く見て取材・撮影することを通じる、地域の可能性への開眼効果・批判能力の育成。 ４．インタヴューの前提として専門知識が必要であることから生じる専門的学習へのインセンティヴ効果。 ５．インタヴューを通じる、年長社会人との交流経験の蓄積。
募集人数及び要件等	２０－３０人。技能的な要件は特に設けない。今学期は、経験者であるか初心者であるかに応じて、異なる教育プログラムを提供したい。

プロジェクト科目企画申請書

プロジェクトの名称	映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト 2010 年度春学期 （略称：「彦根映像プロジェクト 10 春」あるいは「彦根映像プロジェクト」）
プロジェクトの概要	2008 年度秋学期から開始された「彦根映像プロジェクト」を継承・発展させ、新たな科目名の下で、より高度な題材を含む新課題に取り組ませ、本学の映像スキルの向上・サービスイノベーション事業への一層の展開を支援したい。特に、今回はサークル等へのアプローチを工夫したい。 具体的な作業の概要は以下の通り。 １．学生が主体となって、滋賀大学彦根キャンパス、彦根・湖東湖北地域の町並み・自然、地域の学生生活・学生文化等を、ヴィデオカメラ、写真機等で撮影し、編集を加え、映像作品にまとめる。 ２．地域の人々や企業等を調査・取材し、インタヴューを通じて、地域の魅力や可能性、課題等を明らかにし、それらを１と合わせて映像作品に仕上げる。 ３．これらの作品を合評会で取り上げ、相互評価の対象にする。 なお、本プロジェクトはサービスイノベーション人材育成事業の一部として計画・実施されるものである。
担　当　教　員	井手一郎准教授（経済学部） 土江真樹子特任准教授（経済学部）
具体的な授業形態及び授業計画	本科目は講義と実習で構成される。 井手は、サービスイノベーション人材育成事業や本科目の創設の意図、滋賀大学経済学部の競争的位置、地域の競争力強化のためのメディア戦略、地域に優秀な人材を集めるためには大都市優先の価値観を転換する必要があること等、全体戦略に関する講義を行う。 土江は、映像作品をまとめる過程で必要となる実践的なスキル、特に、インタヴューの技法やドキュメンタリー制作の手順等を講義する。実習においては、受講生はカメラやマイク等を持って地域に出て取材・撮影を行うが、その実践的な指導は主に土江が担当する。 ４月に参加者を募集、本格稼動し、８月までに映像作品を仕上げ、合評会を行いたい。
認　定　単　位　数	２単位　講義　１４時間，体験学習　３２時間
成績評価の方法	積極的な議論への参加、制作への貢献、最終的な作品の出来等を総合的に評価する。
期待される教育効果	１．きわめて汎用性の高い映像スキルの修得。 ２．チームとして映像作品を仕上げることを通じる、リーダーシップや共同作業の経験の蓄積。 ３．地域を良く見て取材・撮影することを通じる、地域の可能性への開眼効果・批判能力の育成。 ４．インタヴューの前提として専門知識が必要であることから生じる専門的学習へのインセンティヴ効果。 ５．インタヴューを通じる、年長社会人との交流経験の蓄積。
募集人数及び要件等	２０－３０人。技能的な要件は特に設けない。

プロジェクト科目企画申請書

プロジェクトの名称	映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト 2010 年度秋学期 （略称：「彦根映像プロジェクト 10 秋」あるいは「彦根映像プロジェクト」）
プロジェクトの概要	2008 年度秋学期から開始された「彦根映像プロジェクト」を継承・発展させ、新たな科目名の下で、より高度な題材を含む新課題に取り組ませ、本学の映像スキルの向上・サービスイノベーション事業への一層の展開を支援したい。 具体的な作業の概要は以下の通り。 １．学生が主体となって、滋賀大学彦根キャンパス、彦根・湖東湖北地域の町並み・自然、地域の学生生活・学生文化等を、ヴィデオカメラ、写真機等で撮影し、編集を加え、映像作品にまとめる。 ２．地域の人々や企業等を調査・取材し、インタヴューを通じて、地域の魅力や可能性、課題等を明らかにし、それらを１と合わせて映像作品に仕上げる。 ３．これらの作品を合評会で取り上げ、相互評価の対象にする。 なお、本プロジェクトはサービスイノベーション人材育成事業の一部として計画・実施されるものである。
担　当　教　員	井手一郎准教授（経済学部） 土江真樹子特任准教授（経済学部）
具体的な授業形態及び授業計画	本科目は講義と実習で構成される。 井手は、サービスイノベーション人材育成事業や本科目の創設の意図、滋賀大学経済学部の競争的位置、地域の競争力強化のためのメディア戦略、地域に優秀な人材を集めるためには大都市優先の価値観を転換する必要があること等、全体戦略に関する講義を行う。 土江は、映像作品をまとめる過程で必要となる実践的なスキル、特に、インタヴューの技法やドキュメンタリー制作の手順等を講義する。実習においては、受講生はカメラやマイク等を持って地域に出て取材・撮影を行うが、その実践的な指導は主に土江が担当する。 １０月に参加者を募集、本格稼動し、２月までに映像作品を仕上げ、合評会を行いたい。
認　定　単　位　数	２単位　講義　１４時間，体験学習　３２時間
成績評価の方法	積極的な議論への参加、制作への貢献、最終的な作品の出来等を総合的に評価する。
期待される教育効果	１．きわめて汎用性の高い映像スキルの修得。 ２．チームとして映像作品を仕上げることを通じる、リーダーシップや共同作業の経験の蓄積。 ３．地域を良く見て取材・撮影することを通じる、地域の可能性への開眼効果・批判能力の育成。 ４．インタヴューの前提として専門知識が必要であることから生じる専門的学習へのインセンティヴ効果。 ５．インタヴューを通じる、年長社会人との交流経験の蓄積。
募集人数及び要件等	２０－３０人。技能的な要件は特に設けない。

資料9

プロジェクト科目企画申請書

プロジェクトの名称	仕事と現代経済プロジェクト2009
プロジェクトの概要	2008年秋学期より開講中のサービス・イノベーション人材育成事業の映像メディアのプロジェクトを発展させたプロジェクト科目である。 具体的には、2009年度秋学期開講予定の外部連携科目「モノづくり、人づくり、地域づくり」及び「創造的仕事の技術と知識」の２科目の企画・調査を本学教員とともに行うこと、当該講義で使用する映像教材の作成、当該講義の記録（アーカイブ化）を行う。 教員と学生、協力いただく外部の方々との三者により、二つの外部連携科目で利用する教材作成という知的共同作業を進めることを中心に行う。本プロジェクトでは、講義の企画と運営、経済学・経営学等に関わる調査研究、映像制作（企画、撮影、編集等）を行う。
担　当　教　員	○只友景士（経済学部経済学科・准教授・総括責任者）、土江真樹子（経済学部特任准教授・映像制作指導）、弘中史子（経済学部企業経営学科・准教授）、伊藤博之（経済学部企業経営学科・教授）、竹中厚雄（経済学部企業経営学科・准教授）　その他の先生にも随時サポートで協力を仰ぐ予定。
具体的な授業形態及び授業計画	本科目は、講義（演習形式）と実習によって構成される。 ■講義（演習形式） ○外部連携科目に協力いただく企業やプロフェッショナルの人々の仕事などを理解するための調査研究。文献調査と輪読。 ○講義の企画研究ワークショップ。 ■実習 ○企業のヒアリング調査取材、映像撮影取材、映像編集作業。教材作成実習。 ○外部連携科目の映像による記録（アーカイブ化）の実習。 ○共同作業の班分けを行い、「共同作業の経験」、「現場の経験」、「教える経験」の三つの経験をしてもらう。また、経験者が指導を行うなど「教える経験」の場面を積極的に創出する。ＳＡ採用も予定。 只友が、総指揮を執り、土江が映像教材の作成に関わる指導を行う。弘中は企画・調査面での研究指導を行う。伊藤と竹中は、学生リサーチの指導助言、映像教材の標準化のための助言等を行う。 映像教材は、ドキュメンタリー制作の手法を使いながら学術的な水準が高いものを作成することを目標にしている。
認定単位数	４単位　講義（３０）時間，体験学習（６０）時間
成績評価の方法	受講レポートの作成と提出を求める。評価は、各人のプロジェクト全体への貢献度によって総合的に評価する。
期待される教育効果	１．サービス・イノベーションに関わる鳥瞰的な知識の習得。 ２．総合的なコミュニケーション能力の養成。 ３．汎用的な映像制作のスキルの修得。 ４．三つの経験（共同作業の経験、現場の経験、教える経験）を通じた学習能力の形成。 ５．企業等へのヒアリング調査を通じた専門知識の習得。 ６．イノベーティブな心の習慣とイノベーション評価能力の養成。 ７．イノベーションと公共性に関わる鳥瞰的な知の体系の修得。
募集人数及び要件等	20名から30名。映像メディアのプロジェクト科目の経験者に限らない。特に要件は設けない。夜間主コース学生の他コース履修30単位制限から解除してカウントする科目とする。

（様式３）（Ｃの事業用ープロジェクト科目経費要求書）

平成　　年　　月　　日

滋賀大学経済学部長

殿

所属　経済学部　〇〇学科

職名

氏名　只　友　景　士　　印

下記のとおり申請します。

	プロジェクト科目：「仕事と現代経済のプロジェクト」の実施経費				
	100,000　円				
期待される効果	※「プロジェクト科目企画申請書」を参照。				
	区　分	員　数	単　価	金　額	備　考

	謝金 映像制作指導謝金	1人	5,000円	30,000円	@5,000×2時間×3コマ ×1人
	消耗品費 図書・雑誌等	21冊	3,000円	63,000円	
	テープ	10本	700円	7,000円	ビデオテープ

※学生が負担すべき旅費、教材費は申請できないので注意のこと。

プロジェクト科目企画申請書

プロジェクトの名称	仕事と現代経済プロジェクト2010
プロジェクトの概要	サービス・イノベーション人材育成事業の「映像メディアプロジェクト」を発展させた「現場重視のプロジェクト科目」である。2010年度秋学期開講予定の外部連携科目「モノづくり、人づくり、地域づくり」及び「創造的仕事の技術と知識」の２科目の企画・調査を本学教員とともに行うこと、当該講義で使用する映像教材の作成、当該講義の記録（アーカイブ化）を行う。2009年度開講実績がある。 教員と学生、協力いただく外部の方々との三者により、二つの外部連携科目で利用する教材作成という知的共同作業を進めることを中心に行う。本プロジェクトでは、二つの外部連携科目の企画と運営、プロフェッショナルの方及び企業への取材・調査研究、講義で使用する映像教材の制作（企画、調査研究、取材、撮影取材、編集等）を行う。昨年度の映像教材を検討することなどを通じて、より良い映像教材づくりのための健全な評価の文化づくりとより良いモノをつくるために協力する経験を積ませる。
担　当　教　員	○只友景士（経済学部経済学科・准教授・総括責任者）、土江真樹子（経済学部特任准教授・映像制作指導）、弘中史子（経済学部企業経営学科・教授）、伊藤博之（経済学部企業経営学科・教授）、竹中厚雄（経済学部企業経営学科・准教授）　その他の先生にも随時サポートで協力を仰ぐ予定。
具体的な授業形態及び授業計画	本科目は、講義（演習形式）と映像制作等の実習によって構成される。 ■講義（演習形式） ○外部連携科目に協力いただく企業やプロフェッショナルの人々の仕事などを理解するための調査研究。文献調査と輪読。 ○講義の企画研究ワークショップ。 ■実習 ○企業のヒアリング調査取材、映像撮影取材、映像編集作業。教材作成実習。 ○外部連携科目の映像による記録（アーカイブ化）の実習。 ○共同作業の班分けを行い、「共同作業の経験」、「現場の経験」、「教える経験」の三つの経験をしてもらう。また、経験者が指導を行うなど「教える経験」の場面を積極的に創出する。ＳＡ採用も予定。 只友が、総指揮を執り、土江が映像教材の作成に関わる指導を行う。弘中、伊藤と竹中は、企画・調査面での研究指導及び学生リサーチの指導助言、映像教材の教育素材としての標準化のための助言等を行う。 映像教材は、ドキュメンタリー制作の手法を使いながら学術的な水準が高いものを作成することを目標にしている。
認定単位数	４単位　講義（３０）時間，体験学習（６０）時間
成績評価の方法	受講レポートの作成と提出を求める。評価は、各人のプロジェクト全体への貢献度によって総合的に評価する。
期待される教育効果	1. サービス・イノベーションに関わる鳥瞰的な知識の習得。 2. 総合的なコミュニケーション能力の養成。 3. 汎用的な映像制作のスキルの修得。 4. 三つの経験（共同作業の経験、現場の経験、教える経験）を通じた学習能力の形成。 5. 企業等へのヒアリング調査を通じた専門知識の習得。 6. イノベーティブな心の習慣とイノベーション評価能力の養成。 7. イノベーションと公共性に関わる鳥瞰的な知の体系の修得。
募集人数及び要件等	20名から30名 映像メディアのプロジェクト科目の経験者に限らない。特に要件は設けない。 夜間主コース学生の他コース履修30単位制限から解除してカウントする科目とする。

（様式３）（Ｃの事業用ープロジェクト科目経費要求書）

平成22年　4月　1日

滋賀大学経済学部長
三ツ石　郁夫　殿

所属　経済学部　経済学科
職名　准教授

氏名　只　友　景　士　　印

下記のとおり申請します。

	プロジェクト科目：「仕事と現代経済のプロジェクト2010」の実施経費				
	100,000　円				
期待される効果	※「プロジェクト科目企画申請書」を参照。				
	区　分	員　数	単　価	金　額	備　考

	謝金 映像制作指導謝金	1人	5,000円	30,000円	@5,000×2時間×3コマ ×1人
	消耗品費 図書・雑誌等	15冊	3,000円	45,000円	
	ビデオテープ	30本	700円	21,000円	
	DVD	2セット	2,000円	4,000円	20枚セット×2

※学生が負担すべき旅費、教材費は申請できないので注意のこと。

プロジェクト科目「仕事と現代経済のプロジェクト」と外部連携科目に関する計画（案）

2009年4月23日

只友景士

■「仕事と現代経済のプロジェクト」

「サービス経済の現場プロジェクト」の一つとして、「映像の現場プロジェクト」との共同企画として、「仕事と現代経済のプロジェクト」を立ち上げる。本プロジェクトは、外部連携新規科目「創造的仕事の技術と知識」と「モノづくり、人づくり、地域づくり」の講義の企画・運営も含めた共同調査研究プロジェクトである。講義で使用する教材の制作を行うとともに、講義時の映像と映像教材は、webを通じた公開を行うとともに映像アーカイブズとして蓄積される。

■外部連携新規科目（専門科目）の新設

○「創造的仕事の技術と知識」

社会の各方面で活躍中の方々から創造的な仕事をする上での技術と知識の身につけ方などを話してもらう講義を想定。講義は、インタビュー形式で進行する。講義の企画段階から「サービス経済の現場プロジェクト」と「映像の現場プロジェクト」の共同企画として推進し、講義の映像は、プロジェクト科目の「映像の現場プロジェクト」により、webを通じた配信を行うとともに映像アーカイブズとして蓄積される。

本プロジェクトでは、仕事とそのノウハウの形成と伝承に着目している。例えば、講師として計画している「外科医」の場合など、外科医が提供する医療サービスの質を高めるためにどのような仕組みがあるのかという問いをたて、その構造を明らかにしていく。その場合、外科医が個人レベルでの研修をどのように行っているのか、勤務する病院レベルではどうなっているのか、大学病院や大学医学部の役割はどうなっているのか、医学界全体ではどうなのかといった様々な側面からの検討が必要である。そうした諸相を検討しながら医療技術の向上と普及という課題を社会制度としてどのように保障されているのかを検討する。こうした具体的な仕事を事例にした検討を通じて、様々な仕事のサービスの質的向上・効率性向上のクリティカルな点を明らかにしていく。

想定している講師

1．外科医（大津日赤病院外科勤務）
2．作家　澤地久枝氏
3．能楽師　宝生和英氏
4．雑誌編集者
5．市民バンク　片岡勝氏
6．学生企画
7．学生企画

○「モノづくり、人づくり、地域づくり」

複数の企業のトップを招き、「製造・営業の戦略」、「人的資源管理の戦略」、「財務戦略」などを話してもらうとともに、企業の地域への貢献の在り方などを議論する。

本講義も「創造的仕事の技術と知識」と同様に講義の企画段階から「サービス経済の現場プロジェクト」と「映像の現場プロジェクト」の共同企画として推進し、講義の映像は、プロジェクト科目の「映像の現場プロジェクト」により、webを通じた配信を行うとともに映像アーカイブズとして蓄積される。

本講義では、製造業（電機・機械、食品、製薬）、不動産業、金融（銀行、証券）、流通・販売、文化産業、レンタル業などの様々な企業による講義を計画中である。サービス・イノベーションであるにもかかわらず、製造業を入れているのは、滋賀県が近年製造業の立地・集積により成長を遂げてきているという特異な状況にあること、一方で、国家レベルの成長戦略上、製造業のサービス化が重要な課題になると考えられるためであることなどから製造業を入れている。多様な産業におけるサービスの概念を学ぶことからサービスの多様な側面を考察する。

○協力依頼候補企業

1．フジテック（製造業）
2．ヤンマー（製造業）
3．日清食品（製造業）
4．幻冬舎（出版）
5．日本理化学工業（製造業・チョーク）
6．ソーシャル・アセット（不動産）
7．イーモバイル（通信）
8．ツタヤ（レンタル業）
9．コロンビア・レコード（文化産業）
10．トランコム（運輸）
11．エヌ・ピー・シー（製造業・太陽電池製造装置）
12．日本風力開発
13．学生企画
14．学生企画

○外部連携科目の運営について

プロジェクト科目「仕事と現代経済のプロジェクト」担当教員3から5名と履修学生集団による運営を行う。企業に対する質問事項については、共通質問事項の作成と個別企業への質問事項の作成を行う。

講義企画、企画対象への事前のリサーチ、訪問ヒアリング調査、撮影取材、教材化、講義

運営の一貫した流れのコントロールが必要。

■以下が協力依頼企業への依頼内容（依頼文書から抜粋）。

○講義期間：2009年10月から2010年1月

○講義回数：1社あたり1から2回程度を予定（1回講義時間90分）　全15回

○協力企業数：10社程度

○映像教材作成

外部連携科目『モノづくり、人づくり、地域づくり』の講義への協力とともに、「仕事と現代経済のプロジェクト」による映像教材の作成に協力願いたいと考えております。2009年9月末までに、講義の打ち合わせとともに、撮影取材および教材化作業を完了させ、2009年秋学期講義の際に使用したいと考えております。映像教材の扱いについては、今後協議させていただきたいと考えておりますが、可能であれば、webを通じた公開の可能性を検討したいと考えております。

○講義記録の出版

講義の記録は全て文字に起こし、協力いただいた企業様にご確認いただき、とりまとめて講義記録を出版したいと考えております。講義の記録を出版したものとして、『「個」としてのジャーナリスト』早稲田大学出版部（2008年）がありますが、同様な取り組みであると考えていただけますと幸いです。文字に起こす作業等は、本学が行います。

○外部評価委員会

サービス・イノベーション人材育成プロジェクトは、プロジェクト全体の外部評価を受けるように文部科学省から求められております。滋賀大学では、外部連携科目にご協力いただいた全ての企業様に、外部評価委員の派遣をお願いするという方針を持っております。ただ、外部評価委員のお願いは、企業様に負担であることは重々承知しておりますので、外部評価委員の方は、ご協力いただける場合だけで結構でございます。外部評価委員会は、年度末に1回開催し、委員交通費と委員謝金を支払う予定にしております。

参考資料

プロジェクト科目「仕事と現代経済のプロジェクト」と外部連携科目に関する計画（案）

2009年4月23日

一部修正2010年4月28日

再訂版2010年10月22日

只友景士

■「仕事と現代経済のプロジェクト」

「サービス経済の現場プロジェクト」の一つとして、「映像の現場プロジェクト」との共同企画として、「仕事と現代経済のプロジェクト」を立ち上げる。本プロジェクトは、外部連携新規科目「創造的仕事の技術と知識」と「モノづくり、人づくり、地域づくり」の講義の企画・運営も含めた共同調査研究プロジェクトである。講義で使用する教材の制作を行うとともに、講義時の映像と映像教材は、webを通じた公開を行うとともに映像アーカイブズとして蓄積される。

■外部連携新規科目（専門科目）の新設

○「創造的仕事の技術と知識」

社会の各方面で活躍中の方々から創造的な仕事をする上での技術と知識の身につけ方などを話してもらう講義を想定。講義は、インタビュー形式で進行する。講義の企画段階から「サービス経済の現場プロジェクト」と「映像の現場プロジェクト」の共同企画として推進し、講義の映像は、プロジェクト科目の「映像の現場プロジェクト」により、webを通じた配信を行うとともに映像アーカイブズとして蓄積される。

本プロジェクトでは、仕事とそのノウハウの形成と伝承に着目している。例えば、講師として計画している「外科医」の場合など、外科医が提供する医療サービスの質を高めるためにどのような仕組みがあるのかという問いをたて、その構造を明らかにしていく。その場合、外科医が個人レベルでの研修をどのように行っているのか、勤務する病院レベルではどうなっているのか、大学病院や大学医学部の役割はどうなっているのか、医学界全体ではどうなのかといった様々な側面からの検討が必要である。そうした諸相を検討しながら医療技術の向上と普及という課題を社会制度としてどのように保障されているのかを検討する。こうした具体的な仕事を事例にした検討を通じて、様々な仕事のサービスの質的向上・効率性向上のクリティカルな点を明らかにしていく。

○「モノづくり、人づくり、地域づくり」

複数の企業のトップを招き、**「製造・営業の戦略」**、**「人的資源管理の戦略」**、**「財務戦略」**などを話してもらうとともに、企業の地域への貢献の在り方などを議論する。

本講義も「創造的仕事の技術と知識」と同様に講義の企画段階から「サービス経済の現場プロジェクト」と「映像の現場プロジェクト」の共同企画として推進し、講義の映像は、プロジェクト科目の「映像の現場プロジェクト」により、webを通じた配信を行うとともに映像アーカイブズとして蓄積される。

本講義では、製造業（電機・機械、食品、製薬）、不動産業、金融（銀行、証券）、流通・販売、文化産業、レンタル業などの様々な企業による講義を計画中である。サービス・イノベーションであるにもかかわらず、製造業を入れているのは、滋賀県が近年製造業の立地・集積により成長を遂げてきているという特異な状況にあること、一方で、国家レベルの成長戦略上、製造業のサービス化が重要な課題になると考えられるためであることなどから製造業を入れている。多様な産業におけるサービスの概念を学ぶことからサービスの多様な側面を考察する。

異なる業種の戦略上の違いを一つの講義の中で聞くことによる学習効果があるのではないか。

○外部連携科目の運営について

プロジェクト科目「仕事と現代経済のプロジェクト」担当教員3から5名と履修学生集団による運営を行う。企業に対する質問事項については、共通質問事項の作成と個別企業への質問事項の作成を行う。

講義企画、企画対象への事前のリサーチ、訪問ヒアリング調査、撮影取材、教材化、講義運営の一貫した流れのコントロールが必要。

■今年度『創造的仕事の技術と知識』、『ものづくり、人づくり、地域づくり』の合同講義にご協力いただく企業及びプロフェッショナルの方々は下記に様になっております。（順不同・調整中のものを含む）

日本電気硝子（製造業）
神戸市産業振興財団（公共）
アリカワ・コウヘイ（画家）
黒田福美（女優）
富田直子（「記憶の銀行」日本代表）
ナノオプトニクス・エナジー社(製造業)
ＦＣ岐阜（プロスポーツ）
尾池工業（製造業）
ホロニック(ホテル業)
たねや（製菓業）

■昨年度の実績

■「創造的仕事の技術と知識」「ものづくり、ひとづくり、地域づくり」講義

□外部講師・特別講師の講演

※は学生映像教材の上映があった講義。

2009年10月20日　澤地久枝氏（ノンフィクション作家）
「歴史への近づき方～澤地久枝・人生の生き方～」
10月27日　高橋信二氏（滋賀県中小企業家同友会）※
「障害者雇用とイノベーション」
11月10日　君塚賢氏（トネリコ）※
「産業とデザイン」
11月17日　山田将志氏（ニューロ・スカイ・本学3回生）
11月24日　居川信彦氏（菓匠禄兵衛・代表取締役）※
12月 1日　渡部隆夫氏（ワタベウエディング株式会社・会長）
「変化の中の創造」
12月 8日　藤本祥徳氏（コクヨマーケティング株式会社）
大西達也氏（コクヨマーケティング株式会社）
12月 22日　戸田一雄氏（松下電器産業（株）元副社長・滋賀大学特任教授・本学OB）※
「中村改革とV商品づくり」

2010 年1月12日 井上仁氏（日本電産株式会社・滋賀技術開発センター所長）※

「製造業の開発戦略」

1月19 日　中野桂氏（滋賀大学経済学部・教授）

「スロー･イノベーションを考える」

■以下が協力依頼企業への依頼内容（依頼文書から抜粋）。

○講義期間：2010年10月から2011年1月

○講義回数：1社あたり1から2回程度を予定（1回講義時間90分）　全15回

○協力企業数：10社程度

○映像教材作成

外部連携科目『モノづくり、人づくり、地域づくり』の講義への協力とともに、「仕事と現代経済のプロジェクト」による映像教材の作成に協力願いたいと考えております。2009年9月末までに、講義の打ち合わせとともに、撮影取材および教材化作業を完了させ、2009年秋学期講義の際に使用したいと考えております。映像教材の扱いについては、今後協議させていただきたいと考えておりますが、可能であれば、webを通じた公開の可能性を検討したいと考えております。

○講義記録の出版

講義の記録は全て文字に起こし、協力いただいた企業様にご確認いただき、とりまとめて講義記録を出版したいと考えております。講義の記録を出版したものとして、『「個」としてのジャーナリスト』早稲田大学出版部（2008年）がありますが、同様な取り組みであると考えていただけますと幸いです。文字に起こす作業等は、本学が行います。

○外部評価委員会

サービス・イノベーション人材育成プロジェクトは、プロジェクト全体の外部評価を受けるように文部科学省から求められております。滋賀大学では、外部連携科目にご協力いただいた全ての企業様に、外部評価委員の派遣をお願いするという方針を持っております。ただ、外部評価委員のお願いは、企業様に負担であることは重々承知しておりますので、外部評価委員の方は、ご協力いただける場合だけで結構でございます。外部評価委員会は、年度末に1回開催し、委員交通費と委員謝金を支払う予定にしております。

資料10

プロジェクト科目企画申請書

プロジェクトの名称	教える経験100人計画プロジェクト―話す力・教える力を育む―
プロジェクトの概要	本プロジェクト科目は，学生の話す力・教える力を育むことを目的としている。話す力・教える力を向上させることは，サービス・イノベーションを実現できる人材育成に直結するものである。とりわけ，「教える」という行為は，相手の立場・理解度にあわせて，表現・伝達していくことでもあるため，公共的対話にも必要な重要なスキルとなる。 経済学部ではコア・セッションという独自のユニークな制度を運用している。しかしながら，人前で話すことにプレッシャーを感じていたり，そもそも人前で話した経験が少ないため，TA/SAへの応募を躊躇する例もみられる。 この講義では，コア・セッションを題材にして話す力・教える力を育むため，TA/SA応募へのハードルが低下するとともに，より質の高いTA/SAの育成にもつながると考えられる。 なお，実施にあたっては，「産学連携による実践型人材育成事業－サービス・イノベーション人材育成－」による資金を利用することとする。
担当教員	弘中史子（代表：学習教育支援室運営委員会委員長） 吉川英治（ミクロ経済学を担当） 中野　桂（マクロ経済学を担当） 宮西賢次（簿記会計を担当） 大濱　巖（統計学を担当）
具体的な授業形態及び授業計画	授業については，下記の内容を想定している。 1.　「話す」「教える」ための基礎知識に関する講義 2.　各科目を題材とした体験学習と講義 （マクロ経済学，ミクロ経済学，簿記会計，統計学の４セットを予定） 3.　現役およびOBのTA/SAとのグループ・ディスカッション 4.　公開パネルディスカッション： 教員および学生によるパネルディスカッションを行い，まとめとする。 具体的には，本科目を通じて「話すこと」「教えること」をどのようにとらえるようになったのかについて議論を行う。 なお，プロジェクト科目という性質上，学生の到達度により，講義の順序・内容の変更も見込まれる。
認定単位数	２単位　講義（２２）時間，体験学習（８）時間
成績評価の方法	・毎回の授業への参加状況，体験学習への態度・意欲，小レポートおよびディスカッションの状況などを総合的に勘案して，評価する。
期待される教育効果	・学生の話す能力，教える能力が高まる。そのことが，サービス・イノベーションを実現できる人材の育成につながる。 また，短期的効果として，就職活動を控えた学生にとっても，本科目で得たスキルが役立つことが予想される。 ・コア・セッションを題材にすることで，より質の高いTA/SAが養成できる。
募集人数及び要件等	・将来的にTA/SAになることに関心を持つ学生および，現役のSAでティーチングスキルを高めたいと望む学生を，受講者として優先する。 ・４つのコア科目すべてが受講済みでなくても，受講できる。聴講するという立場から講義に貢献できるためである。 ・定員に余裕があれば，話す能力に自信のない学生等も受け入れる予定である。

プロジェクト科目企画申請書

プロジェクトの名称	人前で話そうプロジェクト ―教える経験100人計画Ⅱ―
プロジェクトの概要	2008年度秋学期には，教える経験100人計画プロジェクトと題して，主としてSA・TAの養成を目的として講義を行った。本プロジェクト科目はその流れを組みつつも，学生の「話す力」を養成することに重点をおいて企画したものである。 「人前で話す」という行為は，相手に配慮しつつ，自分の思い・意見を伝えるものである。サービス・イノベーションを実現できる人材を育成するにあたって，その基本的スキルの涵養につながるものと考えることができる。 講義では，実習を多くとりいれる。また様々なテーマ・条件下で「話す」ことを体験する。また担当教員以外にも協力を仰ぎ，大学入門セミナーにおいて，短時間ではあるが下級生の前で話す（教える）ことを体験する。 毎回の講義においては，学生の話す力が着実に養成できるように，教員・受講者間で改善点をフィードバックするようにつとめる。 なお，本プロジェクト科目では，学習効果をあげるために，ＳＡの雇用も計画している。
担　当　教　員	大濵　巖，弘中史子 （そのほかにも，サービス・イノベーション関係教員の協力を仰ぐ予定）
具体的な授業形態及び授業計画	授業については，下記の内容を想定している。講義においては，できるだけ多く実習を取り入れる。入門セミナーでのスピーチにおいては，講義内での練習を十分に行う。 1. ガイダンス 2. 自分のことを話してみる①(自己紹介とは？) 3. 現役SAと「話す力の鍛え方」についてディスカッションする。 4. テーマに基づいて，予め準備して話してみる。 5. その場でテーマを与えられて，話してみる。 6. 入門セミナーで下級生に話してみる。 7. グループ・ディスカッション体験 8. 自分のことを話してみる②（就職活動における自己PRの模擬体験） 9. 結び：この授業をふりかえる。
認　定　単　位　数	２単位　講義（２２）時間，体験学習（８）時間
成績評価の方法	・ 毎回の授業への参加状況，実習およびディスカッションの状況などを総合的に勘案して，評価する。
期待される教育効果	・ 学生の話す能力が高まる。そのことが，サービス・イノベーションを実現できる人材の育成につながる。 ・ ２回生を対象とすることで，より専門演習の受講効果を高める。また将来の就職活動にも活かすことができる。 ・ 入門セミナーでの実習などを通して，上級生が下級生に教えるという文化を育むことができる。
募集人数及び要件等	・ ２回生を主たる対象とし，定員は20名程度とする。 ・ 定員に余裕があれば，３回生以上も受け入れる。

プロジェクト科目企画申請書

プロジェクトの名称	教える経験100人計画 ―話す力・教える力を育む―
プロジェクトの概要	本プロジェクト科目は，学生の話す力・教える力を育むことを目的としている。話す力・教える力を向上させることは，サービス・イノベーションを実現できる人材育成に直結するものである。とりわけ，「教える」という行為は，相手の立場・理解度にあわせて，表現・伝達していくことでもあるため，公共的対話にも必要な重要なスキルとなる。 経済学部ではコア・セッションという独自のユニークな制度を運用している。しかしながら，人前で話すことにプレッシャーを感じていたり，そもそも人前で話した経験が少ないため，TA/SAへの応募を躊躇する例もみられる。 この講義では，コア・セッションを題材にして話す力・教える力を育むため，TA/SA応募へのハードルが低下するとともに，より質の高いTA/SAの育成にもつながると考えられる。 昨年度秋学期にも同様のプロジェクト科目を開講したが，そのときの学生からの評価は高く，継続開講を希望する声も多かったので今年度も申請するものである。
担　当　教　員	大濵　巖，弘中 史子（その他数名の教員に協力をお願いする予定）
具体的な授業形態及び授業計画	授業については，下記の内容を想定している。 1. 11月10日から12月22日までの全7回（火曜3限） 2. 「話す」「教える」ための基礎知識に関する講義・実習 3. 少人数での実習（模擬授業）を重視し，少なくとも一人2回は体験させる 4. 実習後は受講者に質疑応答をさせ，スキルの向上に取り組む（単なる実習の繰り返しにはしない） 5. 実習で使用する教材はミクロ経済学，マクロ経済学，統計学，簿記会計を予定（協力してくれる教員やSAが確保できた科目を実施する） なお，プロジェクト科目という性質上，学生の到達度により，講義の順序・内容の変更も見込まれる。
認　定　単　位　数	1単位　講義（6）時間，体験学習（8）時間
成績評価の方法	・ 毎回の授業への参加状況，体験学習への態度・意欲，小レポートおよびディスカッションの状況などを総合的に勘案して，評価する。
待される教育効果	・ 学生の話す能力，教える能力が高まる。そのことが，サービス・イノベーションを実現できる人材の育成につながる。また，短期的効果として，就職活動を控えた学生にとも，本科目で得たスキルが役立つことが予想される。 ・ コア・セッションを題材にすることで，より質の高いSA・TAが養成できる。
募集人数及び要件等	・ 募集定員は最大16名とする。 ・ 将来的にTA/SAになることに関心を持つ学生および，現役のTA/SAで，ティーチングスキルを高めたいと望む学生を，受講者として優先する。 ・ ４つのコア科目すべてが受講済みでなくても，受講できる。聴講するという立場から講義に貢献できるためである。

プロジェクト科目企画申請書

プロジェクトの名称	相手に理解してもらうための技法―教える経験 100 人計画Ⅳ―
プロジェクトの概要	本プロジェクト科目は，学生が「相手に理解してもらうための口頭表現力」を育むことを目的としている。相手に自分を理解してももらうスキルを向上させることは，サービス・イノベーションを実現できる人材育成に直結するものである。 相手に理解してもらうための技法を学ぶことは，専門演習をはじめとするセミナー形式の授業でも役立つほか，就職活動においても一定の効果を発揮すると考えられる。 また本科目はコア・セッションを担当するＳＡの養成も視野に入れている。経済学部ではコア・セッションという独自のユニークな制度を運用している。しかしながら，人前で話すことにプレッシャーを感じていたり，そもそも人前で話した経験が少ないといったことから，SA への応募を躊躇する例もみられる。 相手に理解してもらうための技法を学ぶことは，TA/SA 応募へのハードルが低下するとととともに，より質の高い TA/SA の育成にもつながると考えられる。
担　当　教　員	大濵　巖，弘中 史子（その他数名の教員に協力をお願いする予定）
具体的な授業形態及び授業計画	・ 開講時限は木曜２限である。 ・ 授業形態としては，座学に加えて，実習もできるだけ多くとりいれることを特徴としている。 ＜授業計画＞ 1. イントロダクション　１回 2. 自分を表現するための技法　１回 3. 簡単なテーマに基づいた表現技法２回 実習とフィードバック，グループディスカッション 4. 難易度の高いテーマに基づいた表現技法７回 実習とフィードバック，グループディスカッション 5. 自己分析をして，表現する２回 6. まとめ　１回
認　定　単　位　数	２単位　講義（２０）時間，体験学習（１０）時間
成績評価の方法	・ 毎回の授業への参加状況，体験学習への態度・意欲，小レポートおよびディスカッションの状況などを総合的に勘案して，評価する。
待される教育効果	・ 相手に理解してもらうための技法を学ぶことができる。そのことが，サービス・イノベーションを実現できる人材の育成につながる。 ・ 就職活動を控えた学生にとも，本科目で得たスキルが役立つことが予想される。 ・ コア・セッションを担当する SA を養成できる。
募集人数及び要件等	・ 募集定員は最大 16 名とする。 ・ 2 回生，3 回生および SA になることに関心を持つ学生を，受講者として優先する。

資料11

Cross Report

【テーマ：滋賀大学彦根校の課題】

大学と制服

【このレポートを見る】【投稿者：そんなまさかの吟遊詩人】【投稿日：2010-11-29】

課題というわけでもないが，大学に制服があったらおもしろいかなと思ったので滋賀大学の制服を提案してみた。

このレポートを評価する

コメント（1件） 【コメントを追加】

2010-12-06 02:12:07 sample1さん

コメントというより情報の追加ですが。

星野まりこ著『ボローニャの大実験』三推社/講談社p. 122に以下のような記述があります。

以下、チェントロというのは、ボローニャの中心にある旧市街地（歴史的中心街）。ポルティコは通りにある回廊（通りに面した二階以上の部分を道に張り出させ柱で支えて、下を通ることができるようにしたもの）。

%%%%%%%%%%

ザンボーニ通り午後10時。ポルティコの下に張り出したバーやオステリアに学生たちが集まりはじめ、モルタデッラ（特産ハム）を分け合いながらグラス1杯のビールで何時間もおしゃべりにふける。人と人の対話がここにはまだ残っている。色とりどりのマントと帽子姿の一団に出会った。
「ねえ、それ、何着てるの？」
「学生クラブのマント。数百年も前から伝わっているものでね」。そう言って一面にアップリケや刺繍の施されたマントを広げて見せてくれた。女の子が被っている鳥の頭のような形をした帽子の色は学部を表し、緑は法学部だ。それにしても大変な人出で、ビール片手に楽しそうだ。
「今日はお祭りなの？そんな格好して？」
「いや、いつもこんなもんだよ。気が向くとマントを着てここに来るのさ」
ボローニャ大学の学生であることや自分の通っている学部に誇りを持っていること、麻薬をやる学生もいるが、自分たちはほとんどやらないこと、チェントロはアパートが不足している上に高いから、2，3人で同居するしかないこと、何ヶ月にも及ぶ試験、特に口頭試問は恐怖だけど、毎晩ザンボーニに来て友人と話すのが楽しみである・・・。そんな話を学生たちは代わる代わるしてくれた。

%%%%%%%%%%

イタリアの学生もマントを着ているようですね。

→このコメントの返信一覧
このコメントに対して 返信する｜評価する

Copyright (C) 2010 SHIGA-UNIVERSITY. All Rights Reserved.

大学と制服

大学に入学したての頃，「明日なにを着ていくか」で悩んだことはないだろうか。大学には制服がない，と一般的には思われている。ファッションに敏感なのは男女関係ないようで，本学の学生諸君はおしゃれな人はおしゃれだ。職員の方々は「仕事」で大学に来ているので服装規定もあるかも知れないので今回の議論からははずそう。教員の方々には服装規定はないと聞いているが，正確なところ良く分からない（見た目，割と自由だ）。ただ，今回の議論の的は主に学生だ。

大学に制服は存在するのだろうか。実はある。
儀礼服であればアカデミックガウンだ。

図 1

右から順に，博士，修士，学士。
（(画像の出典：三越外商部
http://www.mitsukoshi.co.jp/gaisho/uniform_6.html ）
アカデミックガウンはそのルーツを司祭の儀礼服にもつという。東京大学の学生は卒業式に着用するらしい。(東京大学生協のホームページで１月から注文開始らしい
http://www.utcoop.jp/gown/)
アカデミックガウンは司祭や牧師のガウンと見た目が似ている。その通り，アカデミックガウンはルーツが西洋の昔の学者たちの服装にある。教会の付属施設でもあった大学に働く彼らが来ていた服だった。アカデミックガウンは，見ていると物語の「ハリー・ポッター」に出てきそうな雰囲気がする（あれは魔法学校の魔法使いの服だが)。現在国立大のほとんどは学士でのアカデミックガウンの着用を推奨はしていないようだ。大学生協から貸出や購入の注文ができれば卒業式に着用する機会もあるのではないかと思われる。スーツだけでは物足りない人もいるはずだ。

では，普段着ではどうか。
普段着の場合であると，船舶に関する専攻科を持つ大学は本当のセーラー服というのか，航海士が着用するようなユニフォームをもつ (ex:東京海洋大学)。それ以外のところであると，無い。流行り以外で学生みんなに共通するファッションはみられない。(やすそうな書類ケースとか，就職活動中の真っ黒いスーツとか，そういったものは共通している)

大学生にも制服はあってよいのではないだろうか。見た目で学生と分かる何かが，学生には必要ではないだろうか。最近は学生にも色々な人がいる。バイトばかりしていたり，

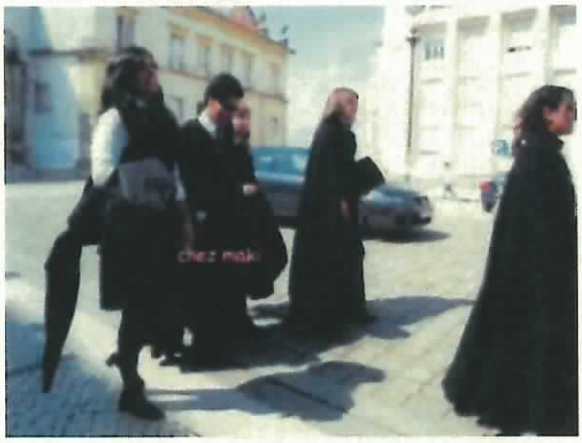
部活に明け暮れていたり。それはそれで良い。ただ，学生であることを忘れてはいけないと思う。制服は，着ているだけでその人の身分をあらわす。わかりやすくてよろしい。もちろん強制することはしなくて良いと思うが，著者は滋賀大学に「制服」を提案してみたい。

主に制服が必要な時とはいつだろうかと考えたときに、大きいもので２点あると思った。まず，他の大学との区別をつけるとき。就職活動などに使えたら「ああ，滋賀大の学生だ」と分かって企業側としても分かりやすいだろう。次に，学生であることを自覚すべき場面。卒業式，入学式，などなど。

彦根の冬は寒い。秋冬に着ることのできるマントはどうだろう，と著者は思いついた。もともと彦根高等商業学校であったのだし，マントも雰囲気があってよいのではないだろうか。高等商業学校時代のマントは，次の図のようなものが多かったようだ。
いわゆる，「バンカラ」な感じである。(http://www.kishodo.co.jp/museum/cap/hakusen.htm)

「ドクトルマンボウ青春記」によればこの帽子を改造したりマントを切ってみたり，いろいろしたそうである。この格好も悪くはないのだが，女子にそのまま着せるのにはちょっとバランスが悪いかんじがする。第一，丈が中途半端な感じがしないだろうか。
そこで，著者はオランダの大学生が着るマントはどうだろうと考えた。こちらなら男女共用で着用できそうだ。
http://blog-imgs-31-origin.fc2.com/p/l/u/plusbeaujour/Coimbra7.jpg

図 2　成蹊高等學校二条白線帽　マント（成蹊学園史料館展示）



そもそも大学生になってまで制服なんていらないとは言わずに，大学生が玉石混交な今こそ，制服について議論してみようではないか。
たとえば就職活動は一種の対外試合。黒いスーツで他の大学の学生と交じるのもありなのだろうが，全く交じってしまうよりは，マントコートで差別化を図ってみるのも面白いかと思う。喋りで差別化するのは難しいけれど，服装ならばすぐにトライできる。著者はそう考える。

図 3　　オランダの大学生

Cross Report

【テーマ:公共的対話システムについて】

①菓匠禄兵衛をみて

【このレポートを見る】【投稿者:たつのこ】【投稿日:2010-12-21】

人口8000人の小さな町、滋賀県長浜市木ノ本町に有限会社菓匠禄兵衛という和菓子屋がある。菓匠禄兵衛では、年商1億2000万円という和菓子屋では大きな売り上げを誇っている。その強みは和菓子の美味しさだけでなく、有限会社トネリコにデザインを頼み、本店の近代的な建築、インテリアだけでなく和菓子にまで関わっていることだ。その和菓子は「くう」という最中で、密封ラッピングした餡を、ドーナッツのような中心に穴が開いた皮で挟むものだ。発売2週間で1万個以上売り上げたという。
　代表取締役の居川さんがおっしゃるには滋賀県産の地元の素材を使っており、これは地元産を使うことにより地域活性の糸口になればと考えたからである。

　この作品を観た感想として、和菓子屋とデザイン会社がコラボしようと考えた発想がすごいと感じました。私の印象では和菓子は日本伝統的なもので、保守的な印象を持っていて、高齢者しか買わないだろうと思っていました。しかし、禄兵衛さんのような贈り物にしたいようなモナカは食べたいし、贈り物にはいいと思いました。他にインターネットで検索するとマカロンを和菓子にしたまかろんや、寒天のもりのおとなどがありました。

和菓子とそうでないものの区別は何だろうと疑問が出てきました。Goo辞書によると和菓子は以下の通りになります。

日本風の菓子。製法により、生菓子・干菓子・半生菓子などに大別される。羊羹(ようかん)・最中(もなか)・煎餅(せんべい)など。⇔洋菓子。
goo辞書

ということは、和菓子＝日本風の菓子というややあいまいです。調べてみると、和菓子たらしめているのは、素材だけでなく、季節を象徴した菓子だということです。
しかし、現在日本特有の季節を感じる心情は少ないと思います。たとえば、桜餅、柏餅、おはぎ、月見だんごなど。だから和菓子を売っていくには従来のものに何か工夫がいると感じました。これまで和菓子は唐菓子から油で揚げる、粉で混ぜる技術を吸収し、南蛮のカステラの南蛮菓子に影響を受けたといいます。いまでも時代のニーズに合った和菓子の進化が求められている風に感じました。そのひとつに「くう」というパリパリとした食感に、餡を自分で乗せる面白さやユニークさがある最中が出てきたのだと思いました。

映像自体の感想は、少々説明不足があると感じました。初めに居川さんのインタビューからはじまって、どなたかな？と思ったので、初めのつかみは年商1億2000万円の和菓子屋などの興味を持たせる内容から始めたほうがより面白くなると思います。他には、トリネコがどんな活動しているかや、他にもデザインがよい和菓子はどんなものがあるかなど時間があれば取材すれば、完成度が高い作品になると思います。

参考文献
http://www.elle.co.jp/atable/pick/komatsu090310/node_380020#subtop（まかろん）
http://www.sakakobo-taro.com/（もりのおと）
http://dictionary.goo.ne.jp/leaf/jn2/237612/m0u/ （goo辞書）
http://www.wagashi.or.jp/history.htm （和菓子の歴史）

このレポートを評価する

コメント（5件）　【コメントを追加】

2011-01-14 02:01:18 hy_1217さん

和菓子に縁遠くなってしまっている若者に、食べたいと思わせるような和菓子を作るこの企業は和菓子と若者のパイプ役のような役割を果たしていますね。和菓子といえばついこの間、いと重の埋れ木を食べました。ケーキやアイスなどばかり食べていた私にとって大変やさしい味に感じました。この企業もまた菓匠禄兵衛と同じように私たちを和菓子というものの魅力を伝えてくれる企業だと思います。

→このコメントの返信一覧
このコメントに対して 返信する | 評価する

2011-01-12 08:01:43 icericeさん

和菓子屋さんなのに、中は近代的と言うのに驚きました。新しい和菓子の発想もいいですが、やはり地元の食材を使うことにこだわりをもつことが素晴らしいと思います。これからも地元の食材を使っていって欲しいです。

→このコメントの返信一覧
このコメントに対して 返信する | 評価する

2011-01-06 15:01:27 baskeloverさん

確かに和菓子という分野はあいまいな気がします。
私は、滋賀県産の材料にこだわっているところも地元の人に愛される秘訣ではないかと思います。
また、映像の撮り方までよく見られていて、尊敬します。

→このコメントの返信一覧
このコメントに対して 返信する | 評価する

2011-01-04 23:01:50 rsk_1125さん

発想のおもしろさに共感しました。企業にとってアイデア、新しい発想はやはり重要かとおもいます。それにプラスその企業の『こだわり』があると、今回の企業さんのように、消費者に愛される企業となれるのではないでしょうか。

また、映像に関しては、同じく内容の充実度は大切だと感じます。
これを見る相手は予備知識はないのだという観点からの映像づくりが大切なのでないかと思いました。

Copyright (C) 2010 SHIGA-UNIVERSITY. All Rights Reserved.

Cross Report

【テーマ：公共的対話システムについて】

日本電産を見て

【このレポートを見る】【投稿者：たつのこ】【投稿日：2010-12-24】

②日本電産株式会社

携帯電話のマナーモードにしていると振動するバイブレーション。このバイブレーションのモーターを製造し、シェア20%を占めているのが日本電産である。創業は1973年に3人で行われた。駆動技術製品に特化した企業である。
製品の特徴は、ブラシレスモーターで静電子やモーターをなくしたことである。このモーターはiPodのHDDにも使われている。
日本電算ではM＆Aが多い。モーターに関する技術を有する企業のみ対象にし、特徴として4つある。
1、時間を買う。
2、救済型M＆A。
3、買収先の従業員を解雇しない
4、投資ファンドのような転売を目的にしない。

日本電産は私自身全く知らないBtoB企業で、HDDにモーターは言ってることさえも知らなかった。調べてみると、精密小型モーターでシェアが大きい。これがつかわれているのが、パソコン、DVD、ゲーム機、カーナビゲーションシステム、携帯音楽プレーヤーなど多岐にわたり身近なところにもモーターがつかわれているのだと感じた。。

最近ではアメリカのエマソン社EMC部門を買収した。電気自動車部門を大きくするためだ。今の車載用のモーターは300億円ぐらいの売り上げだが、2015年までに5000億円の売り上げが目標である。

電気自動車は成長産業である。また現在は歴史的な円高であるので、M＆Aがしやすい。だから電気自動車用のモーターの成長で日本電産がさらに発展すると思った。

このレポートを評価する

コメント（4件） 【コメントを追加】

2011-01-12 08:01:46 icericeさん

M&Aのやり方が、敵対型でないのがいいと思いました。あまり分野を広げず、モーターに絞った事業展開は尊敬に値します。正直、分野を広げたほうが利益を上げやすいと考えていましたが、一点集中でも利益を上げれると知ることが出来て良かったです。これからもこの体制で、どこまで成長出来るのかに興味が沸きました。

→このコメントの返信一覧
このコメントに対して 返信する｜評価する

2011-01-11 03:01:34 kkさん

小型化に有効な、ﾌﾞﾗｼﾚｽﾓｰﾀｰという精密小型ﾓｰﾀｰを開発した日本電算株式会社のすごさを感じました。これからの時代、ガソリンで動く自動車に代わり、電気自動車が走っている車のほとんどを占める日がやってくるのも、そんなに遠い日ではないかもしれない。

→このコメントの返信一覧
このコメントに対して 返信する｜評価する

2010-12-27 13:12:48 creamさん

ビデオから、興味をもち、その業界を調べているのがよいと思いました。

→このコメントの返信一覧
このコメントに対して 返信する｜評価する

2010-12-25 08:12:39 ひこにゃん。さん

M&Aについて、この4つの柱を中心に行う日本電産のことは、私もこの映像をみて初めて知ることが多かったです。 電気自動車についても、これから頑張って言って欲しいなと思いました。

→このコメントの返信一覧
このコメントに対して 返信する｜評価する

Copyright (C) 2010 SHIGA-UNIVERSITY. All Rights Reserved.

資料12

公共的対話システムに関する利用者アンケート

学籍番号：　　（任意）
氏　　名：　　（任意）

【必須事項】
記入日：２０１　年　　月　　日
学　年：　　回生　　性別：　男　女

（１）公共的対話システム（クロスレポート）を利用した全般的な感想を教えてください。
（自由記述）

（２）公共的対話システム（クロスレポート）におけるコメント機能に関してあなたの感想を聞かせてください。
①他の学生のレポートを読んだり、それにコメントしたりすることについて

②他の学生からコメントをもらったことについて

（３）今後の公共的対話システム（クロスレポート）システムの改善課題、このような機能があったらよいなど今後の改良に向けてあなたの意見を教えてください。

以上

公共的対話システム利用アンケート集計

質問事項（1） 公共的対話システム（クロスレポート）を利用した全般的な感想を教えてください。（自由記述）

アンケート番号	回生	属性 1:男性 2:女性	回　答
1	3	2	今までにない面白い取り組みだと思いました。
2	1	1	他人からのコメントをもらえるのは便利だと思う。
3	4	1	面白かった。もっとほかの講義でも使った方が良い。人の意見を生で聞く方が、はるかに面白く、楽しい。
4	2	1	使い方が良く分からなかった。
5	1	1	他人の考えを知ることができるし、自分でも書き込みでき、また名前は匿名ではあるが、使用者の範囲が絞られる点ではいいと思う。
6	1	1	初めてアクセスしたが、10分くらい使い方などが分からなかった。
7	2	1	―
8	4	1	人間の数だけものの考え方は存在するということもあり、自分の考えに意見をもらえることや、逆に意見することもできるという、双方向のコミュニケーションができることが素晴らしいと感じました。
9	1	2	始め使い方が分からなくて、戸惑った。（文章を添付しなければいけないなど）
10	1	2	匿名性が自由な発言を促してよいと思った。
11	1	1	利用していない
12	3	2	大学のレポートは一方的に学生が提出し、先生が採点のみ行うというパターンが多い中、クロスレポートは他の学生からのフィードバックがレポートへのやる気にもつながったように思います。難しい題のレポートが出たとしてもクロスレポートなら、他の学生のレポートを見て、解決のヒントや糸口も見つかると思うので、今後もぜひ利用したいです。
13	1	1	教授が学生の名前を知ることができるため本音で話せないので無意味なものだと思った。
14	1	2	―
15	1	2	簡単にいろいろな人の意見を知ることができて便利だと思った。
16	3	1	クロスレポートで提出した文書をさらに直筆にして提出する意味がよくわからない。匿名にはなっているが、教員側からは誰が提出したかわかるはずなので、二度手間はやめてほしい。あと、今回の課題はクロスレポートの実験みたいな感じだったので、正直腹が立った。
17	1	1	まず大学にこのようなサイトがあることを知らなかった。面白い試みだと思う。しかし、一度間違えて投稿したものを削除できなかったので、その辺の機能を付けてほしいと思った（私が見つけれられなかっただけかもしれないが）。
18	3	1	コメントがおとなしめ（批判的な意見が少ない）だったかなと。
19	1	1	―
20	1	1	通常のレポート提出では聞くことができない他人の新鮮な意見を聞けてよかった。
21	1	1	手軽にレポーをアップできてよい。他人のをすぐに読める。
22	1	1	何でPDFしかアップできないですが、操作のほうがちょっと分かりません。
23	1	1	前回欠席していたので利用していない。
24	2	1	自分の意見を発表できても討論はできないなと思いました。
25	1	1	手軽にレポートをアップすることができ、また、ハンドルネームのため自由に自分の意見を書くことができてよい。
26	1	2	人それぞれが考える環境面が違って、どれも納得させるものでした。皆がこのビデオを見て、どれだけ深く感じたのかが伝わってきて自分も考え直させられました。
27	1	1	他人の意見を知れたのは良かったと思う。

質問事項(2) 公共的対話システム(クロスレポート)におけるコメント機能に関してあなたの感想を聞かせてください。
①他の学生のレポートを読んだり、それにコメントしたりすることについて

アンケート番号	回生	属性 1:男性 2:女性	回　答
1	3	2	レポートを出してそれで終わり、でなくて他の人のレポートを見ることで自分が考えたものとは違った考え方を知ることができることがよいと思います。
2	1	1	便利
3	4	1	難しい。他者の論理構造を短文から完全に理解することはなかなか疲れました。
4	2	1	様々な意見が見れて良かった。
5	1	1	まあまあいいんじゃないかなと思う。Mixi等よりも気兼ねなく書き込みしやすい→知っている人が少ないため。
6	1	1	他の意見に自らの意見をコメントすることで疑似的なゼミ(グループワーク)のような形式がとれる。
7	2	1	一人より二人、二人より十人。多くの方々の意見を読み、コメントすることで新たな考えと出会うことが可能なことは素晴らしいと思います。
8	4	1	他人の価値観に触れることで視野が広がります。
9	1	2	なかなかできないことで新鮮だった。
10	1	2	他者の考えをレポートやそのレポートへのコメントを通して知ることができるというのは面白く、また参考になった。
11	1	1	正直な意見を互いに言い合えたりするのはいいと思った。
12	3	2	自身とは異なった文章表現の方法を他の学生から学べただけでなく、さまざまな物事を捉える角度を知ることができてよかったです。
13	1	1	―
14	1	2	自分とは異なる目線から見た意見が知れてよかった。
15	1	2	データとしてパソコンにあるから時間のあるときに他の学生のレポートを読んだりできてよかった。
16	3	1	課題作成のために読むだけで、正直興味がない。コメントはしたい人がすればいい。それを課題にすることはおかしい。
17	1	1	一つのテーマに対して多くの学生のレポートを読めるというのは、さまざまな視点から一つのことを見れるのでよかったと思った。
18	3	1	自分一人では気づかないような意見も得られたのでよかったと思います。
19	1	1	他の学生が絞った知識を読めることによって、ある程度自分の知識の一部になって、よかったと思う。
20	1	1	―
21	1	1	コメントは意見を深めるうえで重要で、新しい知識を手に入れる上でよい。
22	1	1	他の学生のレポートを読んだら、勉強になります。自分が考えてないところ、もう勉強になります。
23	1	1	自分とは違う視点で描かれていたりするので、視野を広げる効果があると思う。
24	2	1	いろいろな意見が聞けてよかったと思う。
25	1	1	自分の意見だけでなく、他人の意見を見ることで視野が広がるので良い。
26	1	2	どれだけのそのレポートに人が賛同、共感したのかが明白にわかる機能なので、よいと思います。
27	1	1	自分との意見の違いが分かり、客観的に問題を考えることができるのがよかった。

質問事項(2)②他の学生からコメントをもらったことについて

アンケート番号	回生	属性 1:男性 2:女性	回　答
1	3	2	何人かからフィールドバックがあることはもう一度自分の書いた意見を見直すきっかけにもなるし、どのように人に伝わったのかを確認できるのでよかったです。
2	1	1	同意しかなかったので批判の声もあっていいと思った。
3	4	1	確認していないので、わかりません。
4	2	1	コメントをもらえなかった。
5	1	1	まだ見てないのでわからない。チャットみたいに討論になりにくい。
6	1	1	自らの考えに新たな視点をもたらすことができた。
7	2	1	＊モチベーションの向上(賞賛や助言等) ＊レビューに役立つ(気づかされる) ＊共感されることで安心感、次へのインセンティブ
8	4	1	自分の意見と照らし合わせることで、自分の間違っているところやもっとブラッシュアップすべき点などが見つけられました。
9	1	2	なかなかできないことで新鮮だった。
10	1	2	他者の意見は貴重だと思った。
11	1	1	―
12	3	2	フィードバックを得られてうれしかったし、コメントから自分のレポート内容を捉える観点も広がりました。
13	1	1	―
14	1	2	純粋にうれしい。
15	1	2	自分の意見に賛成してくれたりするとうれしい。
16	3	1	読んでいない。
17	1	1	コメントをもらったかどうかはわからないので、何も言えない。
18	3	1	―
19	1	1	自分の考えにより、他の学生からのコメントをもらったことのおかげで、ある程度に自分の長短所、自分が知識の不足面を知ることができて、すごくいいと思う。
20	1	1	―
21	1	1	自分の意見が深まるので良い。コメントをもらえるとレポートの価値がよりあがる。
22	1	1	他の国だから、資源とか環境とか勝手に使うことを許してくれる力
23	1	1	コメントの中には否定的なものもあると思うが、それがあることによって、自分の書いた理論の弱い部分や矛盾点があれば、それが分かるので、考えがより深まり、よいと思う。
24	2	1	コメントをもらえてうれしかった。
25	1	1	自分の意見を評価してもらうことによって、自信につながる。
26	1	2	レポートを出していないので、もらっていません。ですが、もらった側の気持ちになると普通にうれしいと思いますし、またコメントをしてもらうことで自分が気付かなかったところにも目を向けることができるのではないでしょうか。
27	1	1	ほめられたらうれしいし、意見をもらったら考えさせられる。機会が与えられてよかったと思う。

質問事項(3) 今後の公共的対話システム(クロスレポート)システムの改善課題、このような機能があったらよいなど今後の改良に向けてあなたの意見を教えてください。

アンケート番号	回生	属性 1:男性 2:女性	回　答
1	3	2	―
2	1	1	今のところない。
3	4	1	PDFだけと表示していたけど、何故か？WordでもUPできました。なぜ？
4	2	1	PDFファイル以外にもアップできるようにすべきだ。
5	1	1	コメントが来たら表示やメールする。自分が書き込みするページを探すのに時間がかかる。そのまま打ち込めず他媒体を使わないといけないのが面倒であり、知らずに書きこんだら内容をまた打ち返さなければならない等の欠点がある。投稿方法が分かりにくい。
6	1	1	レポート提出の仕方が分かりにくい。
7	2	1	＊堅い気がする　＊対話というくらいなら、もっとラフにすべき。
8	4	1	意見を言う時に"さぁ言うぞ"という気力が必要なのでもう少し気軽に(twitter程ではなくていいので)意見を出せるようになればいいなと思いました。
9	1	2	―
10	1	2	特にありません。
11	1	1	―
12	3	2	提出締め切りぎりぎりに出す人もいるので、コメントを作る期間は別締め切りで設けたほうがもっと全員がフィードバックを得ることができていいのではないでしょうか。
13	1	1	―
14	1	2	パソコンでこのシステムを開こうとしたら、「セキュリティが万全でないサイトである可能性がある」と表示され不安になったので改善してほしい。
15	1	2	特にないです。
16	3	1	使い方の手順の一切が書かれていないので、初めて使う人は苦労すると思う。
17	1	1	特になし。
18	3	1	レポート課題の提出の代わりにこのシステムを利用してもよいかなと思います。
19	1	1	単なる文字だけではなく、もっと多い手段を操作できるようになってほしい。例えば、図やビデオなど。
20	1	1	―
21	1	1	―
22	1	1	―
23	1	1	匿名性がある以上、イタズラをする人が現れる可能性があるので、意味のない(記号や同じ文字の羅列など)コメントは自動的にはじかれるようにすればよりよいシステムになると思う。
24	2	1	―
25	1	1	―
26	1	2	もっともっと多くの人の意見が見たかったです。この時間内では見ることはできないでしょうが、時間を分けても少しずつ皆の意見を配ったらどうでしょうか。
27	1	1	―

アンケート公共的対話システムに関する利用者アンケート集計

質問事項(1)

アンケート番号	回生	属性 1:男性 2:女性	回　答
1	3	1	システムは正直若干分かりにくいが、内容が充実しているため、あまり気にならない。
2	1	1	過去に投稿されたものやサイトマップなど、見づらさが目立った(*行きたいところが見つけにくい)。しかし、記事を見つけたあとは返信しやすかった。アップロードする際もとても快適だった。
3	2	1	ワードでも入力できると思っていたんですが、自分のパソコンからだとワードで入力ができませんでした。結局ワードのファイル形式を変えていかなければ入力できなかったのが少し残念なところでした。
4	3	1	送信ができませんでした。
5	2	2	使い方は分からないですから、また、レポートを提出できたか分からないです。家のパソコンじゃ、まだ完全に認識されてないみたいです。開けられる時も開けられない時もあります。
6	1	1	純粋にいろいろな人の意見を知ることができたので、自分の考え方に幅ができたと思う。
7	2	2	思ったページに行かなかったり、操作が困難だった。
8	4	1	最近の流行に乗っている感じのレポートで非常に書きやすかったです。
9	2	2	コメントの仕方は分かったけれど、レポートの書き方(載せ方？)が分からず、コメントしかできなかった(コメントの仕方は友達に聞いた)。
10	3	1	他人のレポートを見比べることができたおかげで、みんなが共感した点を知ることや、人それぞれの固有の考え方に触れることができた。
11	2	2	―
12	*	*	少し使いにくい部分もあったが、意見を交換し合うという意味ではとても良いシステムだと思った。
13	1	2	―
14	1	2	―
15	2	2	レポートの提出方法としてはあたらしく、初めはどこにどうレポートを提出すればいいか分からずとまどいました。最初間違えてたようで、何回提出してもエラーになるという風になって焦りました。
16	2	2	レポートをアップしようと試みたがうまくいかず、パソコンが苦手な私にとっては難しく、レポートの提出を諦めました。コメントに関してはなんとかできたのでよかった。
17	4	1	特に問題もなく、良かったと思います。
18	3	1	きちんとした説明を聞かないと使いづらいと感じました。
19	4	2	個人の感想が共有できておもしろかった。自分の考え以外にも新たな視点を発見でき、より視野が広がり良かったと思う。自分の意見が提出できているか分からず、不安に感じた。
20	4	2	自身のレポートをアップするのに何度もエラーが出て、その理由もわからず大変苦労しました。
21	3	2	提出先が2つあったのか、町気て出してしまった人がいたのか、どちらに出せばいいのか分からなくなってしまったので、あいまいなままになってしまいました。また、冬休み中、PCの故障のため、レポートができない状況にあり、コメントのみとなりました。このような際に対応できないのが、やや不便だと感じます。
22	3	2	○他の人にレポートを見るときに、PDF化しているので、すぐにパッと見れず、ダウンロードしなければならないのが少し面倒でした。 ○他の人のレポートも自由に読むというのは初めての体験で、とても面白かったです。
23	4	1	こういった形式でのレポート提出は初めてだったので、良い経験だった。他の人のレポートにコメントするのは気恥ずかしい気持ちもあったが、他の人のレポートにコメントすることは斬新で面白かった。ただ少しレポートを載せるのが難しかった。
24	2	1	初見のシステムだったので、少々使いづらかった。できればHELPがほしいと感じた。
25	4	1	面白い試みだと思う。誰かに読まれ、自分の評価がコメントとしてあらわれる。他の人の意見を知れるし、自分がどれくらい習熟しているかわかるので良いと思う。
26	2	1	システム自体はとても画期的なものであったが、少し使いづらい面もあったので、その辺を改善してほしい。
27	2	1	○ログイン後の進み方が分かりにくかった。(例:ある項目でログインしてしまうと、その項目の範囲内でしか見れない) ○1回1回ログインが必要なところが面倒だった。(例:"レポートの提出"や"レポートを見ること"が同時にできない)

28	2	1	たくさんの人のレポートが見れるので、さまざまな考えに触れることができた点が良かった。でも、うまく提出できなかったりして困ったという点もあった。
29	2	2	PDF出アップするのか本文に書けばいいのか、分からなかった。ネット上で他の学生の考えが見られるのは面白いなと思った。
30	2	2	レポートを提出しようとしたらエラーが出て、投稿できなかった。大学でも家でも試したが何故かできなかった。
31	1	1	手間がかかって、いやだった。
32	2	2	途中から使い方が分からなくなって、できなかった。使いにくかった。
33	1	1	新らしい試みで面白いと思ったが、少し手続きが面倒臭いと思った。
34	2	2	レポート提出の仕方がいまいちわからなかった。レポート一覧にアクセスするまでの操作がめんどくさい。
35	2	2	見方やレポートの提出の仕方が難しかった。
36	1	2	感想を書いて投稿しようとして登録をクリックしたら、文章が全部消えて登録されなかった。説明をもう少し多く書いてほしかったです。

質問事項(2)①

アンケート番号	回生	属性 1:男性 2:女性	回　答
1	3	1	レポートを書いて提出して、コメントを書いてもらっても、そのコメントを読まなければその人のためにはならないので、コメントを読ませる工夫が必要だと感じた。
2	1	1	どの程度の返信をしていいのか、匙加減が分からなかったので、コメントに困った。一部よく議論されているところがあれば、そこを参考にできるよう見本がほしかった。
3	2	1	悪いことではないと思います。しかし、素晴らしいのから平凡以下のものと幅広いので、コメントをするところが集中しやすくなるのではないかと感じました。
4	3	1	他の学生のレポートを読んで、大いに参考になりました。
5	2	2	便利です。
6	1	1	自分とは違った見方や展開で書かれていたレポートが書かれてあって、驚いた。
7	2	2	様々な人の意見が見れて良かった。
8	4	1	それがかなり早めに書きこんだので、ほんとに少数の方のレポートしか読むことができなかったのが心残りです。
9	2	2	他の人の意見を知ることができてよかった。
10	3	1	いろんなコメントを見ることが非常に参考になったし、面白かった。
11	2	2	ふだん、人のレポートを読むことはないので、レポートを読んで新しい発見があり、おもしろい。
12	*	*	他の人の意見や感想を知るいいシステムだと思った。
13	1	2	他の学生の意見や勧化方を知ることができて、とても興味深かった。
14	1	2	人のレポートを見るというのは、今まであまりなかったことなので新鮮な感じがしました。人それぞれ見る観点が違うなといろんな意見を見て知ることができたので、とてもよかったです。
15	2	2	他の学生のレポートを読むことは普段ないので、勉強になりました。また、他の学生レポートに対する、他の学生のコメントも見て、とても参考になりました。
16	2	2	ログインしてから他の方のレポートを開くまでに結構てこずりました。またコメントするにあたって、コメントするをクリックしたら「注釈を書く」みたいなのが出てきて他の方のレポートに支障をきたさないか不安でした。
17	4	1	人の意見にコメントすることは難しかったが、いい機会になりました。
18	3	1	他人のレポートを読めることは刺激にもなるので、良いと思った。
19	4	2	コメントができることで一方的な意見だけでなく、まさにクロスして話題を深められる点が良いと思う。コメントしやすい人としにくい人が偏ってしまう。
20	4	2	一つのことに関して、他の学生がどのような感想・考えを持っているのか、たくさんを読んだことは、初めてのことだったので、みんながどのような考えを持っているのか知ることができてよかったです。
21	3	2	PDFファイルで投稿すると、すぐに見られず、DLしなければならないので手間になり、また、全てDLするのは難しく、パッと見て分かりづらいことが難点かなと思いました。
22	3	2	―
23	4	1	他の人の考えを知ることができて、とてもよかった。自分と同じ考えを持つ人がいて嬉しかったり、違う考えに刺激を受けたり、本当によかった。特に「障害者の就職難」について他の人の考えを聞きたかったので、良かった。
24	2	1	意見の共有を図ることができて、素晴らしいと思う。
25	4	1	まとめることが大半で、自分の意見を書いている人が少ないと感じた。
26	2	1	不特定多数のレポートを読んで、より広い視野を広げることができたように思う。
27	2	1	自分には考えられなかった視点で、レポートを書かれている学生がいたので、その点に関しては自分にとって新たな発見につながり、良かった。
28	2	1	自分以外の人の考えに触れることができ、いいと思う。
29	2	2	面白いと思った。けれど、どうコメントしていいのか分からなかったり、同じようなコメントばかりになってしまっているのが、もったいない。

30	2	1	同じくコメントもエラーが出て、できなかった。
31	1	1	いろんな考えを見ることができてよかった。
32	2	2	―
33	1	1	他の人の意見が読めるのは参考になった。
34	2	2	いいと思う。自分のレポートと周りの考え方が違うといろいろな意見が聞ける。
35	2	2	誰がコメントしているのかが分からないから、コメントしやすかった。他の人のコメントも見れるから、いろいろな捉え方があることが分かって良かった。
36	1	2	―

質問事項(2)②

アンケート番号	回生	属性 1:男性 2:女性	回　答
1	3	1	―
2	1	1	もらったのか分からない。
3	2	1	コメントされるのはいい面もあったり、悪い面もあったりします。学生同士ですから、遠慮がちなコメントをする傾向が見られたのは残念なところです。きつい言葉がいいとは思いませんが、当たり障りのない言葉だけというのは、むしろ不安に感じました。
4	3	1	―
5	2	2	自分の不足点を分かるように
6	1	1	自分の意見が周りにどう見られているのかが分かって、とてもよかった。
7	2	2	―
8	4	1	単純にうれしかったです。
9	2	2	―
10	3	1	反応があって、面白かった。その中には「面白い」とコメントして下さった方もいて、とてもうれしかった。
11	2	2	自分のレポートを他人はどう理解するのかが分かりますし、自分のレポートがほめてもらえてうれしい。
12	*	*	うれしかった。
13	1	2	まだ確認していなかったので、分かりません。
14	1	2	まだ自分のレポートにコメントをもらったかどうか見ていないのでわかりません。
15	2	2	―
16	2	2	―
17	4	1	人からの評価をもらうことは少ないので、賛否関係なくうれしかった。
18	3	1	自分では気付かなかった視点や感想を与えてくれるので、良いと思った。
19	4	2	自分にコメントがあるとうれしく思う。直接相手から受ける(言葉や態度を含まない)コメントはさまざまにとらえやすい。
20	4	2	―
21	3	2	―
22	3	2	うれしかったです。
23	4	1	自分のレポーを投稿し、コメントを入れた後はチェックできませんでした。
24	2	1	自分の意見を読んでもらえてうれしかった。自分と似たような感想を持った人、異なる意見を持った人からコメントを得られて良かった。
25	4	1	いい加減に評価して、いいところしか書かない人がいるので、ちゃんと欠点も書いてほしい。
26	2	1	自分の意見を評価してもらえるのはとても貴重な経験となった。
27	2	1	―
28	2	1	自分の意見がズレてないかなと確認できてよかったと思う。
29	2	2	もらえるのはうれしい。見ていないので何とも言えない。
30	2	1	―
31	1	1	さまざまなコメントがもらえてよかった。
32	2	2	―
33	1	1	いつもとはない感じでうれしかった。
34	2	2	うれしい。なるほどと思うことがあった。
35	2	2	―
36	1	2	―

質問事項(3)

アンケート番号	回生	属性 1:男性 2:女性	回　答
1	3	1	PDF以外でも投稿できるようにすれば、もっとお手軽にレポートを出せるのではないだろうか。
2	1	1	・サイトマップ　・コメント例　・過去ログの増加　・少し個別ページに区切りすぎかも (駄文and入り組んだことをすいませんでした)
3	2	1	もっと入り口を増やした方がいいと思いました。URLを一部の方だけしか知らないと思いますから、大学のホームページにリンクを貼っておくと利用しやすいのではないかと思います。
4	3	1	私は**パソコンについて知識がないために、よくわかりませんでした。
5	2	2	―
6	1	1	使い方をもっとシンプルに、わかりやすくしてほしい。
7	2	2	―
8	4	1	まだやり始めたばかりで、私もそうですが、改良すべき点もまだ分からない状態です。ですが、良いシステムだと思います。
9	2	2	もう少し、web上にも、この前配ったプリントより分かりやすい説明を載せておくべきだと思います。
10	3	1	もっと使いやすくしてほしい。使いづらい面がある。
11	2	2	ケイタイでの利用。
12	*	*	―
13	1	2	特にないです。
14	1	2	ネット上で行うということで便利なことも多いと思いますが、なかなかサイトにつながらなかったので、そこがもう少しスムーズにいけばいいと思いました。
15	2	2	少し使い方が分かりにくかったような気がします。
16	2	2	公共的対話システムにレポートをアップするにあたって、ワードなどを用いてファイルで載せるのか、そのままレポートを書き込めるようにするのか、どちらかにしてほしいと思いました。添付ファイル式にするより書き込めるようにしていただけると、もっと利用しやすくなるのではと感じました。
17	4	1	―
18	3	1	まず、認知度を高める必要があると思う。そして、やはりまだ非常に使いづらい部分があるので、簡単に使えるように改善してほしい。
19	4	2	今後も授業などで有効活用すべきであると思う。自由に討論できるため互いの理解向上にもつながる。
20	4	2	―
21	3	2	―
22	3	2	―
23	4	1	投稿方法を分かりやすくできればと思う。あと、みんなのお勧めのレポートとかをチェックできると面白いかと思う。
24	2	1	トラブルシューティング機　説明不足
25	4	1	○4つテーマがあったので、テーマごとのフォルダー分け。 ○Wordじゃなくて開かずに見れた方がいいと思う。 ○5段評価で、評価順に表示できる。
26	2	1	添付ファイルをつけなければ登録できなかったので、できれば事前に明示してほしかった。
27	2	1	質問事項(1)で述べた点に関しての改善
28	2	1	直接入力で提出できなかったので、そこを改善してほしい。
29	2	2	PDFで上げないといけないのが手間。
30	2	1	―
31	1	1	―
32	2	2	レポートの提出ができなかったので、提出をもっと簡単にしてほしいし、使い方が分かりやすく載っていればいいと思う。

33	1	1	掲示板形式でもっと手軽に利用できたらいいと思います。
34	2	2	しくみを簡単にした方がいいと思います。
35	2	2	もう少し操作を分かりやすくしてほしい。特に、レポートの提出の仕方がもう少し簡単になればいいと思った。
36	1	2	―

資料13

産学連携による実践型人材育成事業－サービス・イノベーション人材育成－
申請書

●プロジェクト　　名称：公共的対話と知的共同作業をベースにイノベーティブな「心の習慣」と「イノベーション評価能力」を養成し、地域的競争力の強化にコミットメントする中核的人材育成事業

●設置形態　　(1) 国立　　2 公立　　3 私立

●大学名等　　滋賀大学

●学長名　　成瀬龍夫

●所在地　　（郵便番号５２２－８５２２）
滋賀県彦根市馬場１丁目１番１号

●取組責任者
所属部局：経済学部経済学科
職名：准教授
氏名：只友景士
電話番号：０７４９－２７－１０３０（代表）

●事務担当者
所属部局：学務課教育改革室
職名：室長
氏名：西村浩一
電話番号：０７４９－２７－１０３５
ＦＡＸ番号：０７４９－２４－５１２２
E-mailアドレス：kaikaku@biwako.shiga-u.ac.jp

●連携する大学（共同申請の場合）
大学名：なし
部局名：
担当者名：
電話番号：
ＵＲＬ：

（様式１）

大学名　滋　賀　大　学

１　プロジェクトの内容等について

（１）　プロジェクトの概要（２００字以内）

滋賀大学経済学部に「サービス・イノベーション専攻コース」を設置する。サービス科学の基礎的知識の修得を進めるとともに、公共的対話システムの中での相互評価（レフェリー）の経験と知的共同作業経験をベースにした「心の習慣」と「イノベーション評価能力」の養成を行い、知識基盤社会に相応しい知的クラスターと地域ネットワーク形成をすすめ、地域競争力の強化にコミットメントする中核的人材を養成することを目的とする。

（２）プロジェクトの内容について（開発する教育プログラムの具体的内容（カリキュラム、学生数等）等）

経済学部専門コース制に「サービス・イノベーション専攻コース」を新設する。サービス・イノベーションの基礎となる学識は、経済学、経営学、会計学、情報科学（IT 技術）など多様な学問領域に渡る学際的な学習を必要としている。とりわけ、サービス・イノベーションの基礎となるサービス科学の基礎的素養を修得させるために、「科学的・経営工学的手法」の計画的修得を進める必要性が高い。本学部は 6 学科体制であり、サービス科学の基礎的知識を習得する上で必要とされる科目を従来から一定提供している。しかしながら、科目が学科ごとに提供されているために、学生にとってはサービス・イノベーションに的を絞った履修計画を立てにくいと言う問題もあり、また、サービス・イノベーション人材育成に必要な新規科目等の整備・充実を図る必要もある。

経済学部専門コース制に新たに「サービス・イノベーション専攻コース」を新設し、履修の便宜を図るとともに、コース制を前提としたコース関連科目内容の総合的な調整・管理を推進し、サービス・イノベーション人材育成教育カリキュラムの開発を行う。

専門コース制の教育体制の充実は、①学部の既存の教育資源の活用しながらも新規科目の開発・整備を推進し、②公共的対話システムにおける相互評価（レフェリー）を経験し、４つの現場（プロジェクト科目）の知的共同作業体験を通じて、サービス・イノベーションの基礎となる「心の習慣」と「イノベーション評価能力」の養成を図るという二本柱で進める。二本柱の総合的教育体系の整備を推進することで、①サービス・イノベーションの知識・手法に関わる個々人の力量アップを図り、②「新しくしていこう、新しいものを見つけよう、創ろう」といったイノベーティブな「心の習慣」と「イノベーション評価能力」を養成し、③個人・企業の枠を超えたイノベーションを育む地域的ネットワークなど「イノベーティブな地域」を創り、地域競争力を高めていくことに主体的にコミットメントする（心の習慣を持った）中核的人材の養成をめざす。

○経済学部専門コース制「サービス・イノベーション専攻コース」を新設する。

指定する科目表から所定の単位数（４０単位）を習得した者に対してコース認定を与える。コース認定目標数を学部定員１学年 550 名に対して年間 200 名を目標とする。

コース科目の一部を公開授業として、一般に公開し、体系的な科学的方法の普及啓発を進める。

○公共的対話システムにおける相互評価（レフェリー）の経験の導入

1．「サービス・イノベーション専攻コース」科目の科目横断的レポート課題「クロス・レポート」に対する相互評価（レフェリー）の経験。

「サービス・イノベーション専攻コース」科目の受講者（600～900 名を想定）を対象に、科目横断的レポート課題「クロス・レポート（仮称）」を課す。受講者を 3 グループに分け、3 週間に 1 度レポート作成、3 週のうちレポートを作成しない 2 週はレフェリーを担当するローテーションを組む。レポート課題の作成は、教員集団が行い、学生の課題提出からレフェリー担当学生への配信、レフェリー学生の評価書提出までを一貫した IT システム上で管理を行う。学生の提出レポート及びそれへの評価書はすべて匿名で公開し、評価書に対するコメントも当事者以外から自由に投稿できる仕組みとする。

レポート執筆の経験だけにとどまらず、相互評価（レフェリー）の経験をすることで、イノベーティブな「心の習慣」の形成と「どの点が優れているか」「どの点が新しいか」といった評価センス、イノベーション評価能力を養うことが出来るとともに、創造的なレポート作成への「知性」の涵養に資する。

○外部連携新規科目の新設（案）

1．教養科目

◇「創造的仕事の技術と知識ー学ぶこと、働くこと、生きることー」（仮称）

社会の各方面で活躍中の方々から創造的な仕事をする上での技術と知識の身につけ方などを話してもらう講義。講義は、インタビュー形式で進行する。講義の企画段階から「サービス経済の現場プロジェクト」と「映像の現場プロジェクト」の学生が参加した共同企画として推進し、講義の映像は、プロジェクト科目の「映像の現場プロジェクト」により、web を通じた配信を行うとともに映像アーカイブズとして蓄積される。

2．専門基礎

◇「モノづくり、人づくり、地域づくり」（仮称）

複数の企業のトップを招き、「生産・営業の戦略」、「人的資源管理の戦略」、「財務戦略」の講義、企業の地域貢献の在り方などを議論する。（1 企業 2 回 1 シリーズ 6 社、イントロダクション 1 回、学生レポート合評会 2 回　全 15 回）

◇「リスク基礎」（仮称）

食品の安全管理を素材に、リスク評価の基礎知識の習得と評価方法の基礎について講義を行う。産官学の連携による事業推進を行う。

○既存科目の枠組みに新たな実施体制を盛り込む科目

1．プロジェクト科目

●４つの現場

①アーカイブ形成の現場プロジェクト

（ｉ）大学アーカイブズ形成

・本学の大学公文書等の整理・保管事業を基盤に、「滋賀大学 大学ア

ーカイブズ（仮称）」の形成。

（ⅱ）公害資料写真のアーカイブズ（環境アーカイブズ）形成

・公害関係写真資料の整理・保管事業を中核に、環境に関わる企業・NPO等の文書蓄積を進め、環境アーカイブズの形成を推進する。

（ⅲ）滋賀県関係行政資料アーカイブズ形成

・滋賀県に関わる研究に必要とされるデータや政策情報について検討し、経済学部における資料収集の方策をさぐるとともに、地域研究のプラットフォームを形成する。

・アーカイブズの公開と知的インフラとして活用した研究教育を推進する。

・本プロジェクトの推進体制強化のために特任教授１名を採用する。

②公共政策の現場プロジェクト

（ⅰ）公共サービス・公共政策研究

・「滋賀県関係行政資料アーカイブズ形成」と連携しながら滋賀県下の公共サービス研究を進め、行政情報の在り方を切り口に、公共サービスの質的向上を図る上での必要とされる「共通知」の形成、情報の在り方、行政組織の在り方などの相互連関を研究するプロジェクト。

（ⅱ）産業地区形成、イノベーション・エリア形成の公共政策

・滋賀県下の産業立地の動向、中小企業の動向などのフィールド調査を通じて、イノベーション・エリア形成の公共政策研究プロジェクト。

③映像・メディアの現場プロジェクト

・多様なサービス産業への波及効果の大きい映像を中心とするメディアの制作を行うプロジェクトである。映像・メディアの制作プロジェクトは、新規科目「創造的仕事の技術と知識ー学ぶこと、働くこと、生きることー」「モノづくり、人づくり、地域づくり」などの企画段階から参画するとともに、講義のウェブ中継、シンポジウム等の web 中継やアーカイブ化などを手がける。本プロジェクトでは、「人に伝える」「情報に価値を吹き込む」をテーマに制作活動を進める。また、本プロジェクト科目では、映像メディア制作のノウハウの蓄積と継承の伝統を学生集団の中に作り出す実験を行う。

・本委託事業の web site の運営、教育・研究成果の web 発信を行い、発信した情報がどの様に伝わり利用されるのかをも研究することで、web を通じた効果的な情報発信のイノベーションに学生主体で挑戦する。

・本プロジェクトの推進のために、特任教授１名を採用する。

④サービス経済の現場プロジェクト

・近江商人研究を踏まえ、サービス経済の歴史的形成過程の共同研究を学生参画で推進。

・彦根高商以来の伝統を持つ陵水会（経済学部同窓会）の協力を得ながら多様なサービス業の現場をテーマにサービス・イノベーション共同研究プロジェクトを推進する。また、地元中小企業を優先的に取り上げること、新規科目「モノづくり、人づくり、地域づくり」への参加企業とすることとし、参加企業同士の相互交流も行い、産学の共同研究の緩やかなフォーラム形成を推

進する。

2．基礎文献研究

・サービス経済やイノベーションを題材とした古典の講読を進める。古典から学ぶ態度の涵養、文章読解能力の向上を図る。

3．インターンシップ

・インターンシップ委員会と連携しながらサービス業へのインターンシップの拡大を図る。

○既存科目の活用

1．コア科目：「統計学A・B」「経営学」「ミクロ経済学A・B」「簿記会計A・B」

2．プレ・セミナー科目：「基礎文献研究」「BSセミナー」

3．関連する各学科科目

学科	科目例
経済学科	情報とリスクの経済学　産業政策論　産業組織論　応用統計学　数理統計学　計量経済学Ⅰ・Ⅱ　地域経済論　経済地理学　他
企業経営学科	近江商人経営論　経営組織論　経営管理論　企業成長論　経営戦略論　流通システム論　経営史総論　人的資源管理　生産マネジメント　マーケティング論　マーケティング戦略　組織行動論　他
ファイナンス学科	金融のミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ　ファイナンス基礎数学　他
情報管理学科	データベースシステムⅠ・Ⅱ　経営情報システム設計論Ⅰ・Ⅱ　経営システムの数理Ⅰ・Ⅱ　オペレーションズ・リサーチ　多変量解析　情報ネットワークⅠ・Ⅱ　確率・統計　他
会計情報学科	財務会計総論Ⅰ・Ⅱ　財務諸表分析論Ⅰ・Ⅱ　他
社会システム学科	マス・メディア論　産業心理学Ⅰ・Ⅱ　消費者心理学Ⅰ・Ⅱ　他

4．新設及び再編科目群（再掲）

・新設科目：「創造的仕事の技術と知識」「モノづくり、人づくり、地域づくり」「リスク基礎」

・再編科目：「基礎文献研究」「BSセミナー」「インターンシップ」「プロジェクト科目」

・その他：コース制の完成に必要な新規科目の提供を検討する。

（3）プロジェクトの実施計画について（連携体制・協力内容等も含む）

○サービス・イノベーション専攻コース教育調整会議

・コース科目の構成等に関して責任ある体制を確立するために、コース科目担当者から構成される「サービス・イノベーション専攻コース教育調整会議」を設置し、学務委員会等との連携をとりながら教学体制の管理を行う。教学マネジメント責任者、ＦＤ連携責任者、情報発信責任者、産学連携責任者、プロジェクト科目責任者を選任し、コース制教育の充実と改善、情報発信の推進、産学連携の円滑化の責任体制を確立する。

・平成２０年度に本プロジェクトの実施準備に着手するために準備委員会を設置し、準備が整えば、調整会議に切り替える。

○サービス経済研究会（平成２０年度設置）

・サービス経済化研究班、公共サービス研究班の２班を構成し、コース制の基盤をなす本学教員を中心とした共同研究組織を編成する。本研究会の研究成果も踏まえて、次項にあげる「サービス・イノベーション専攻コース教育調整会議」において教学の在り方も検討する。

（４）プロジェクトの有効性について

○本プロジェクトは、コース制を新設することで、学生の履修目標を明確化するとともに、「クロス・レポート」の実施を含む３つの新規科目（必修）、知的共同作業である４つの現場プロジェクト科目の履修により、イノベーティブな「心の習慣」及び「イノベーション評価能力」の養成を行うことが可能となる。プロジェクト科目では、学生集団の中にノウハウを蓄積し、経験者が後輩への指導を行うなど「教える経験１００人計画」を含む。

○本プロジェクトでは、個人の能力養成を行うだけにとどまらず、イノベーションは、組織レベルの内部経済的側面や地域レベルの外部効果などにも依存することを体感させること、イノベーションの多面的側面への開眼効果がある。

○評価システムで言及した「オープンなフォーラムの開催」により、サービス・イノベーションに関する知識の普及啓発を推進する。また、このフォーラムそのものが、「産学」・「産産」の相互評価システムを構成するとともに、地域の競争力の強化に繋がる知的共通基盤としてのネットワークの形成に資する。

（５）プロジェクトの評価体制について

○４つの現場から外部評価委員会

●自治体政策担当者、民間事業者、陵水会（経済学部同窓会）など本事業に関わった学外関係者全員による評価システム及び相互交流組織を設置する。

○公共的対話システムによる学生も参加した評価コミュニティの形成

●クロス・レポートに使用する公共的対話システムを活用して、本プロジェクト全体を学生・教員・参加民間事業者・自治体関係者など多様な主体による相互評価作業を行う。相互評価の結果をオープンなフォーラムにおいて議論を深める。オープンなフォーラムの開催により、サービス・イノベーションに関する知識の普及啓発に繋がるとともに、フォーラムそのものが地域の競争力の強化に繋がる知的共通基盤としてのネットワークの形成に資する。

○前述の二つの評価を踏まえて、サービス・イノベーション専攻コース教育調整会議の教学マネジメント責任者（全体統括担当者）、ＦＤ連携責任者、情報発信責任者、産学連携責任者、プロジェクト科目責任者と学務委員会とで構成するサービス・イノベーション専攻コース評価委員会により学部内評価を行い、教授会に報告する。

（６）委託期間終了後の方針について

○サービス・イノベーション専攻コース制として、学部教育に定着させるとともに、委託事業終了後に発展的に大学院教育への拡張を検討する。

○委託事業終了後については、大学独自の財源措置により事業継続可能であると考える。

（様式２）
大学名　滋　賀　大　学

２　プロジェクトに係る経費

対象となる経費は、「産学連携による実践型人材育成事業ーサービス・イノベーション人材育成ー」の遂行に必要な経費に限定されます。

平成２０年度～２２年度までのプロジェクトに係る予定経費（年度毎に記載してください）

【平成２０年度】　（単位：千円）

経費区分	経費	積算内訳
＜旅費＞		
国内旅費	１，０５０	特任教授旅費
	９００	非常勤講師旅費
	５００	研究会等旅費
＜人件費＞		
謝金	２４０	講演講師謝金
雇用等経費	４，０００	特任教授人件費　２名分
	１，２００	事務補佐員人件費　２名分
	２，８００	教務補佐員人件費　４名分
	６００	非常勤講師手当
	５００	ＴＡ・ＳＡ・ＲＡ人件費
＜事業推進費＞		
消耗品費	７，０００	アーカイブ形成、映像・メディアプロジェクト、シンポジウム、フォーラム、プロジェクト科目推進等経費
印刷製本費	３００	シンポジウム、フォーラムチラシ印刷
通信運搬費	１００	チラシ、事務連絡文書等郵送代
雑役務費	８，０００	公共的対話システム開発委託費
会議費	５０	シンポジウム、フォーラム打合せ会議費
借損料	２，０００	公共的対話システム機器借料
	５００	シンポジウム、フォーラム会場借料
小計	２９，７４０	

【平成２１年度】　　（単位：千円）

経費区分	経費	積算内訳
＜旅費＞		
国内旅費	２，１００	特任教授旅費
	１，８００	非常勤講師旅費
	５００	研究会等旅費
＜人件費＞		
謝金	２４０	講演講師謝金
雇用等経費	８，０００	特任教授人件費　２名分
	２，４００	事務補佐員人件費　２名分
	５，６００	教務補佐員人件費　４名分
	１，２００	非常勤講師手当
	１，０００	ＴＡ・ＳＡ・ＲＡ人件費
＜事業推進費＞		
消耗品費	２，０００	アーカイブ形成、映像・メディアプロジェクト、シンポジウム、フォーラム、プロジェクト科目推進等経費
印刷製本費	３００	シンポジウム、フォーラムチラシ印刷
通信運搬費	１００	チラシ、事務連絡文書等郵送代
雑役務費	１，０００	公共的対話システム開発改良委託費
会議費	５０	シンポジウム、フォーラム打合せ会議費
借損料	４，０００	公共的対話システム機器借料
	５００	シンポジウム、フォーラム会場借料
小計	３０，７９０	

【平成２２年度】　　（単位：千円）

経費区分	経費	積算内訳
＜旅費＞		
国内旅費	２，１００	特任教授旅費
	１，８００	非常勤講師旅費
	５００	研究会等旅費
＜人件費＞		
謝金	２４０	講演講師謝金
雇用等経費	８，０００	特任教授人件費　２名分
	２，４００	事務補佐員人件費　２名分
	５，６００	教務補佐員人件費　４名分
	１，２００	非常勤講師手当
	１，０００	ＴＡ・ＳＡ・ＲＡ人件費
＜事業推進費＞		
消耗品費	２，０００	アーカイブ形成、映像・メディアプロジェクト、シンポジウム、フォーラム、プロジェクト科目推進等経費
印刷製本費	３００	シンポジウム、フォーラムチラシ印刷
	１，５００	報告書印刷
通信運搬費	２００	チラシ、報告書、事務連絡文書等郵送代
雑役務費	５００	公共的対話システム開発改良委託費
会議費	５０	シンポジウム、フォーラム打合せ会議費
借損料	４，０００	公共的対話システム機器借料
	５００	シンポジウム、フォーラム会場借料
小計	３１，８９０	

合計	９２，４２０千円

資料14

■成果報告会・外部評価委員会進行表

（１）ＳＩ人材育成事業の概要報告【報告担当：只友景士】（ 10分）

（２）教育実践報告　（一報告 10分　×６：　60分）

①「イノベーション概論」【報告担当：陳韻如】書類による報告

②「社会システム論特殊講義」【報告担当：土江真樹子】

③「映像の中の滋賀大学彦根校プロジェクト」【報告担当：土江真樹子、井手一郎】

④「仕事と現代経済プロジェクト」【報告担当：只友、土江】

⑤「ものづくり、人づくり、地域づくり」「創造的仕事の技術と知識」【報告担当：只友】

⑥「教える経験　100 人計画プロジェクト（人前で話そうプロジェクトを含む）」【報告担当：大濱厳、弘中史子】

（３）開発中の新規科目及び教育・研究基盤づくり（一報告 10分　×３：　30分）

①新規科目「サービス経済論」の開発【報告担当：井手】

②滋賀大学アーカイブづくりに向けた取り組み報告【報告担当：阿部安成、青柳周一】

③公共的対話システムの構築と教育実践報告【報告担当：井手】

【10分間休憩】

（４）滋賀大学経済学部の教育カリキュラムの充実に向けて【報告担当：只友】（ 10分）

（５）学生制作の映像作品の上映（70分）

（６）外部評価委員会（ 40分）

■外部評価委員会名簿

・平井裕子氏（テレビ東京・「カンブリア宮殿」担当プロデューサー）

・久保田裕氏（コンピューターソフトウエア著作権協会・専務理事）

［付記］

サービス・イノベーション人材育成事業成果報告会及び外部評価委員会は、当初　2011年３月15日（火）に開催を予定しておりましたが、　３月11日（金）に発生した東北地方太平洋沖地震のため開催を延期しました。再度の日程調整の結果、滋賀大学卒業式の開催される３月25日に改めて開催する運びとなりました。今般の大地震と津波により亡くなられた方の冥福を祈り、福島第一原子力発電所災害の終息、被災者の方々の生活が一日も早く

再建されること、東日本の震災からの復興を切に願います。

資料15

特集

サービス・イノベーション専攻コース創設への挑戦

―「経験」は越境する知性を育む―

経済学部准教授 只友 景士

滋賀大学経済学部は、平成20年度文部科学省委託事業「産学連携による実践型人材育成事業ーサービス・イノベーション人材育成ー」に採択されました。この聞き慣れない「サービス・イノベーション」とは何か？その謎と可能性について紹介させていただきます。

プロジェクトの名称と概要

本プロジェクトの事業名は、**『公共的対話と知的共同作業をベースにイノベーティブな「心の習慣」と「イノベーション評価能力」を養成し、地域的競争力の強化にコミットメントする中核的人材育成事業』**です。長い事業名です。役員会で、「落語の寿限無か？」と冗談が出たとも伝えられる長い事業名です。事業名は長かったのですが、申請40件の中から1次審査で12件に絞られ、面接審査の後、最終の7件の採択校に入ることができました。この長い事業名には、これまでの教育改革をふまえ、現代社会・経済のニーズを見すえた様々な設計思想が込められています。

さて、次に本学の事業の概要を説明しましょう。事業の完成型を一言で言えば、委託事業期間の3年間で「経済学部の学部教育プログラムとして、サービス・イノベーション専攻コースを新たに設置する」と言う明確な完成目標を持っています。このコースは、現在、暫定リリース中で、平成22年4月に正式スタートします。

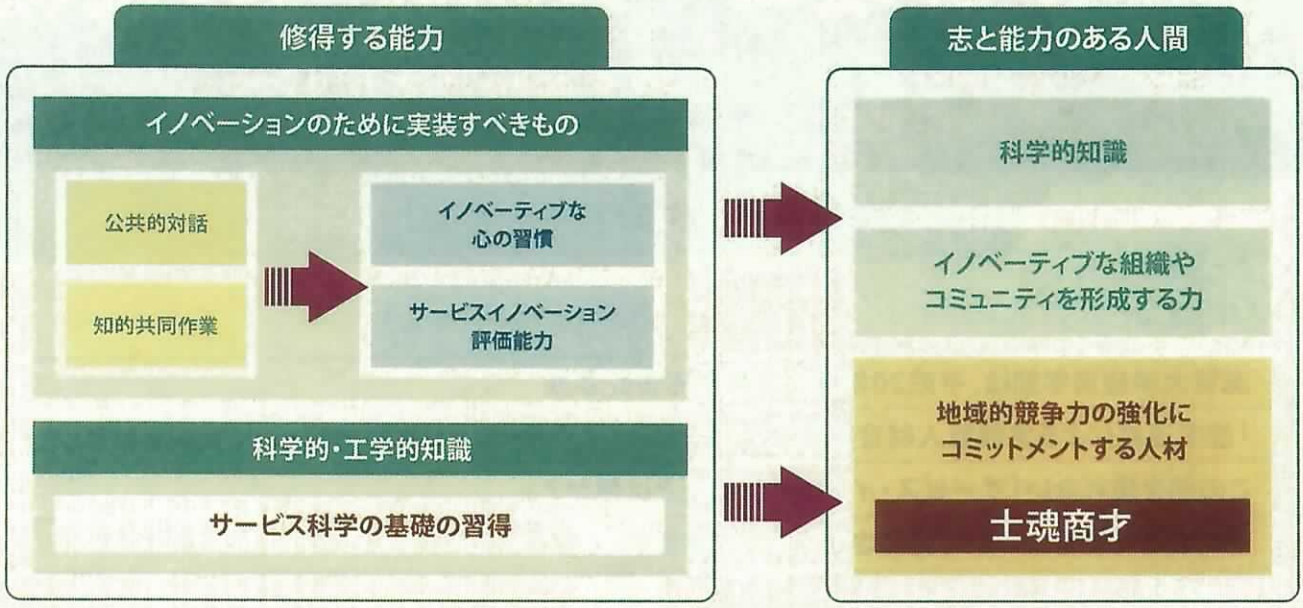
本コース教育プログラムでは、①学際的なサービス科学の基礎知識を学ぶこと、②新しいものを創っていこうというイノベーティブな「心の習慣」の養成、③新しさや優れているモノを評価できる「イノベーション評価能力」を養うことを柱として構成し、知識基盤社会における知的クラスターと地域ネットワーク形成を進めることで、地域競争力強化にコミットメントする中核的な人材を育てようと考えています。

サービス・イノベーション人材育成とは？

文部科学省委託事業「産学連携による実践型人材育成事業ーサービス・イノベーション人材育成ー」とは、文部科学省が「ビジネス知識、IT知識、人間系知識等の分野融合的な知識を兼ね備え、サービスに関して高いレベルの知識と専門性を有するとともに、サービスにおいて生産性の向上やイノベーション創出に寄与しうる資質をもった人材を育成するための教育プログラムの開発を大学に委託する」事業です。平成19年度から開始され、本年度2年目を迎えた委託事業です。大学の教育・研究の改善を図ることを目的とするのは当然のことですが、具体的な人材育成が求められており、また、その人材育成のプログラムの開発とその普及も求められております。

本委託事業が創設された背景として、サービス経済化の進む日本経済の構造転換を踏まえ、「サービス分野での生産性向上、イノベーションの創出に寄与する人材の育成は急務である」という国民経済上の必要性に迫られたものであります。既に本学経済学部の卒業生の70％～80％が、

〈図表1〉 滋賀大学のサービス・イノベーション人材育成事業の目標



金融をはじめとするサービス関連産業に就職しているのが現状ですし、就業者統計でも我が国の就業者の７割が第三次産業に就業しています。ですから「このコースの出口はどこだ」と聞かれると「出口はサービス化の進んだ日本経済そのもの」と言うことになります。また、サービスには「ソリューションの提供」もはいりますが、「ものづくり」から「ソリューション・ビジネス」への転換を目指す企業も数多く存在するのが現状です。IBMがコンピューターの生産部門を中国企業に売却して、ITソリューション・ビジネスを展開しているのが典型です。そのIBMは、ITソリューションタイプのサービス・イノベーションの旗振り役として極めて大きな存在でもあります。

サービス経済化が著しい中で国家レベルの成長戦略自体がサービス産業の成長に焦点を当てざるを得ない状況にあります。そうした中でサービスの生産性の向上及びサービス・イノベーション人材育成に繋がる教育体制の整備は、長期的視点に立った国民経済上の要請からも大学教育改革上の重要課題となってきているといえます。本学では、こうした喫緊の課題に取り組むべく、経済学部を主体に当該事業に申請したと言うわけです。ただし、本学の申請内容は、IBMタイプのサービス・イノベーションとはひと味違うニュー・タイプとなっています。ではその違いについて、次項のカリキュラムの側面からみてみましょう。

カリキュラムの教育目標

サービス・イノベーション専攻コース制が設計可能になったのは、平成16年度カリキュラム改革の成果です。平成16年度改革で、三層制（大学入門科目・コア科目・専門科目）のカリキュラム構造と認定コース制を導入したこと、プロジェクト科目という知的共同作業の科目を導入していたことは、今回の制度設計上大変有効でした。コース制を活用することで、経済学部の社会科学系の総合力と情報工学系の力を柔軟に組み合わせることにより基本的な教育カリキュラムを組むことができました。つまり、滋賀大学には、サービス・イノベーション人材育成の潜在力が十分に備わっていたのです。

本人材育成事業の目標をまとめると〈図表1〉のようになります。サービス科学の基礎となる科学的・工学的知識の習得を基礎力とし、その上で、イノベーションのために実装すべき能力として「イノベーティブな心の習慣」と「サービス・イノベーション評価能力」を養成することとしています。本プログラムは、イノベーティブな組織やコミュニティを形成する力をもち、地域的競争力の強化にコミットメントする「志と能力のある人間」を育てることを目的としています。本学の教育理念である「士魂商才」プログラムであるといえます

サービス・イノベーション専攻コース教育の特色

コース教育の特徴についてみておきたいと思います。コース教育の特色は、〈図表2〉にあるように、①既存科目の活用、②新規科目の開発、③既存科目の枠組みを活用し発展的な運用の三つの領域に分けられます。①既存科目の活用は、本学の総合力であり、潜在力を活用した部分です。

一方で、既存科目には、イノベーションをテーマにした科目等がやや弱く、イノベーション教育が弱かったことは否めません。そこで、新規科目では、イノベーションをテーマとした新規科目群の新設を行います。サービス・イノベーション人材育成のためには、サービス科学の専門知識ベースに、サービス・イノベーションのための新規科目が必要となります。

外部との連携により開講される外部連携新規科目として、クリエーティブな仕事をしている人から仕事とはなにか、創造的な仕事をするために知識や技術をどう磨いてきたのかなど職業人としての魂・気概などを学ぶ科目として「創造的な仕事の技術と知識」、企業のトップから企業の戦略を学ぶ「モノづくり、人づくり、地域づくり」、「リスク・マネジメント基礎」の3科目を新設します。

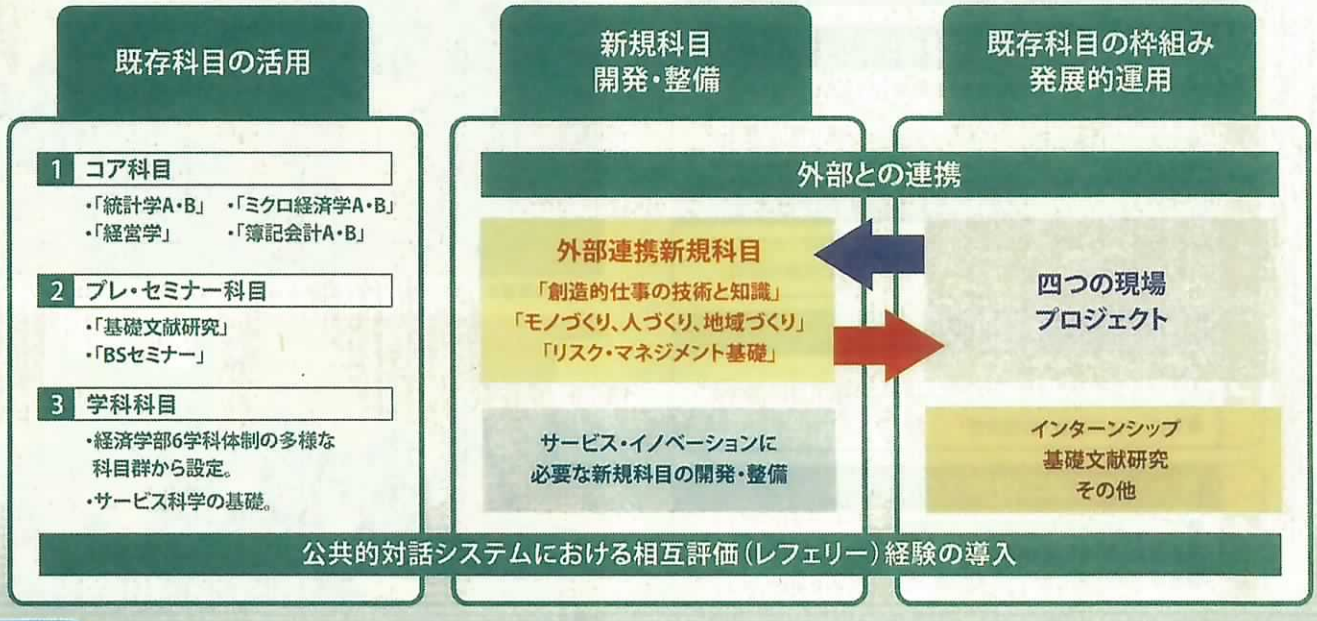
サービス・イノベーションに必要な新規科目の開発整備を進めます。例えば、イノベーションの具体的な事例を学ぶ科目「グッドプラクティス・ケース・スタディ」、イノベーションの類型論「イノベーション分析論」、サービス科学の最新の動向を提供する科目、サービス業全体を俯瞰するような視点を提供するような科目などを新規科目として新設する予定です。

更に、本コースの特色ある取組として、「現場重視」でイノベーションの原動力を実装するために、①学生・実務家・教員が一緒になって、課題を解決する知的共同作業の経験をおこなう「四つの現場プロジェクト（現場重視のプロジェクト）」、②イノベーションの原動力となる「心の習慣」と「イノベーション評価能力」の獲得を目指す「公共的対話による相互レフェリー経験（公共的対話システムによるクロス・レポート）」の二つの取組を行います。

サービス・イノベーション専攻コース創設への取組の現状

現在、新規科目の開発に取り組むとともに、特色ある取組である「四つの現場プロジェクト（現場重視のプロジェクト）」と「公共的対話による相互レフェリー経験（公共的対話システムによるクロス・レポート）」の設計・開発に取り組んでいます。

〈図表2〉 サービス・イノベーション専攻コース教育の特色



〈図表3〉は、申請段階の現場プロジェクト案ですが、平成20年秋学期から「映像・メディアの現場プロジェクト」、「教える経験100人計画プロジェクト」などのプロジェクト科目を立ち上げ、実施してきました。この実施した経験から私たちは当初予想もしなかった二つの重要な教訓を得ることができました。一つは、「人材育成の総合性」であり、二つめは、「相互学習による学習能力の向上」です。例えば、映像メディアのプロジェクトでは、「映像という無形物づくりを経験することで、イノベーティブな心の習慣と評価能力の養成、自分の作品と他人の作品への評価（自分の評価と他者からの批評）を通じ、自覚的に改善を行おうとする心の習慣を実装すること」「映像作品作成の基礎技術の習得」などをねらいとしていましたが、そうした当初の期待を超えて、コミュニケーション能力など学生の総合的な力を飛躍的に高めていることが観察されました。また、学生にとって日常である「大学教育」を素材にした「教える経験100人計画プロジェクト」では、「教える行為の多様性」を学生も教員も知ることができましたし、教える立場に学生の「立ち位置を変える」ことから視点の転換を経験させ、自覚的に教育サービスの本質を考えさせる効果があったと考えています。こうしたプロジェクト科目は、まさに「立ち位置」と「経験」からサービスを自覚的に深く考える良い切っ掛けを提供していると言えます。その全過程に観察されるのが、「相互学習による学習能力の向上」です。イノベーティブな心の習慣と評価能力の実装も始まっていると推測されます。

本プロジェクトの申請チームは、現在、サービス・イノベーション教学調整会議とそのサポーターとして、コース教育の完成に向けた取組を進めています。私たちは、申請段階からイノベーター養成にとどまらない人材育成を考えていました。イノベーターだけでなく、「出る杭を助ける」人材つまりイノベーターを支援する人材も養成したいと考えています。産業革命以来、人類はモノづくりのために多くの創意工夫や技能や、組織、制度を発達させてきました。現代においては、「変化」をつくるという課題に熟達しなければならない時代に入っています。

私たちは、申請段階で、このコースによる認定数を200名、10年で2,000名と大見得を切りました。このコースを認定された卒業生たちが、タンポポの綿毛のように世界に飛び立ち、思いがけないところで素晴らしいイノベーションと変化の花を咲かせてくれることを願っています。

〈図表3〉

4つの現場プロジェクトの知的共同作業

1 アーカイブ形成の現場プロジェクト
- 滋賀大学アーカイブズ（仮称）の形成
- 環境関係写真資料の環境アーカイブズ化
- 滋賀県行政関係資料アーカイブズ形成

2 公共政策の現場プロジェクト
- 公共サービス・公共政策研究（滋賀県 行政関係資料アーカイブズと連携）
- 産業地区形成、イノベーションエリア形成の公共政策研究

3 映像・メディアの現場プロジェクト
- 映像・メディアの制作
- 外部連携新規科目等の企画・記録・広報
- Web siteの運営・情報発信

4 サービス経済の現場プロジェクト
- サービス経済の形成過程の共同研究
- 陵水会（経済学部同窓会）との連携による共同研究プロジェクト
- 産学共同研究フォーラムの形成

▲撮影の練習をする学生

▲教える経験の実習風景

Report 活躍する学生たち②

サービス・イノベーション人材育成事業
―現場重視のプロジェクト科目―

経済学部

経済学部准教授
只友 景士

事業紹介

経済学部では、平成20年度に文部科学省の「サービス・イノベーション人材育成事業」に採択されました。現在、平成22年度から専門コース制の一つとしてサービス・イノベーション専攻コースの設置に向けて準備を進めています。

本学のサービス・イノベーション人材育成事業では、イノベーティブな「心の習慣」の養成とイノベーション評価能力の養成を目標に新規科目の新設など様々な教育プログラムの開発を進めています。そうした教育上の特色ある取組の一つとして、現場重視のプロジェクト科目を展開しています。今回は、その「現場重視のプロジェクト科目」の「映像プロジェクト」と「仕事と現代経済プロジェクト」の受講生を紹介します。このプロジェクト科目では、「改善する経験」を通じて、良くしていこうという「イノベーションの精神」の一端でも獲得してくれたならば成功だと考えています。

Report **活動内容**

映像制作から学んだ「こだわりを持って取り組むこと」

企業経営学科4回生　利田 陽平

私は2009年度の春学期、秋学期を通じてサービス・イノベーション科目の「映像プロジェクト」を通じて映像作品を制作しました。前期にはNATO空爆を経験した滋賀大の留学生を取り上げた作品「ネマニャ君が教えてくれたこと」を制作し、後期は自分自身が参加したフランスにおけるNGOのワークキャンプを取り上げた作品「フランス　フジオン村でのワークキャンプ」を制作しました。わたしがこれらの映像作品制作を通して学んだことは、映像の撮影、構成、編集全てにおいてこだわりを持って物事に取り組むことです。そのこだわりとは、映像制作において必要とされる「見る人の立場に立ちながら、物事の真実に迫る映像を作ること」です。その為には自己を相対化する事、探究心を持つ事が重要です。

利田君の編集作業風景

私の場合、それらの能力をどのような経験の中で養成してきたのかとふりかえってみると、春学期の作品では、ネマニャ君の口から彼自身の戦争体験を聞いた時に感じた哀れみにもました複雑な思いを分かり易く映像で伝えようと苦闘し、彼自身の戦争に対する考え方に常に疑問を持ち、「どうして、どうして」と問い続けてきた経験の中だったと思います。また、秋学期の作品では、フランスにおける異文化を日本人の視点からうまく解きほぐして表現しようと取り組んだ経験から得られたのだと思います。しかしながら、気が遠くなるような編集作業、ネマニャ君へのインタビューを通して感じた「言葉に表せない複雑な思い」を分かりやすく説明する為に、インタビューの言葉を削ぎ落として構成しなければならないジレンマも抱え大変であったのも事実です。けれども、それを乗

イノベーティブな「心の習慣」と イノベーション評価能力を養成する プロジェクト科目を展開

り越えて編集作業が終わった時の達成感は例えようのないものです。より多くの滋賀大生がこの科目を受講することを望んでいます。

最後に、私は四回生なので卒業ですが、社会に出て働き出しても映像制作という主体的に取り組んで行う「ものづくり」を通して得た能力を存分に生かし活躍したいと思っています。何も分らないゼロからスタートして数々のサポートを頂いた先生方に御礼申し上げます。

Report 活動内容

「仕事と現代経済プロジェクト」で学んだ大切なこと

社会システム学科3回生　大窪 晴美

仕事と現代経済プロジェクトでは５人１組で取材相手への依頼、取材、構成、編集までをすべて自分たちの手で行い、講義用の映像作品を作りました。私の班は障害者雇用の問題と本学ＯＢの戸田一雄さん（元松下電器産業（株）副社長）の松下時代のご経験をもとにした２本の映像教材を作りました。なんとこの映像教材は、経済学部の講義である「ものづくり、人づくり、地域づくり」「創造的仕事の技術と知識」のなかで、実際に教材として使われました。

「障害者の雇用」をテーマにした作品では、滋賀労働局、教育学部附属特別支援学校、障害者を雇用している企業の「農環」、「障害者合同就職面接会」など様々な所へ取材に行きました。特別支援学校へ取材に行った時、知的障害をもった生徒さんにカメラを向け、インタビューをしようとすると、その生徒さんが驚いて大声をあげて、教室の隅に隠れてしまったことがあります。それ以来、相手の世界に突然踏み込むのではなく、まずは相手がリラックスして話せる関係を築こうと心がけました。そのために、相手の目の高さに合わせる、笑顔で身近な話題から話しかけるなどの工夫をしました。すると、最初は緊張していた相手でも表情が和み、向こうから話しかけてくれるまでになりました。この経験を通じ、コミュニケーションの際、相手に応じ臨機応変に対応し、信頼関係を築くことの大切さを学びました。

また、取材した企業の中には「障害者を雇うメリットはない」というところもありました。「障害者を雇用することは会社の負担になる」というのが一般的な認識なのかもしれません。しかし、取材した「農環」では「障害があってもできる仕事」を作業工程全般の見直しから創り出していました。まず先に組織や工程があり、そこに人を配置するという従来の考え方ではなく、人ができる仕事を創り出す逆転の発想がそこにはありました。また、障害を持つ人を雇ったことによる作業全般の見直しで、事業や作業の簡素化、効率化が図れる経営上のイノベーションの可能性が有ることも教えられました。障害者雇用の現場から経営のイノベーションと社会イノベーションを実現する企業の力強さを実感する取材でした。

戸田さんの取材では、家電製品のイノベーションが、現場でどのようになされていくのかを学びました。戸田さんは松下で長年商品企画に携わり、ＶＩＥＲＡやＬＵＭＩＸなどのヒット商品を世に生み出してきた方です。戸田さんは文系出身者として市場の声をつかみ、それを技術屋の技術と融合することで、お客さんに本当に喜ばれる商品作りをしてきました。本学ＯＢの話であり、将来就職した際の参考になるものでした。

このプロジェクトを通し、自主的に行動し、困難にぶつかったら自分たちで工夫して乗り切ること、そして、普段の教室の中で学ぶ内容がどのように現実の社会で生かされ、改善されているかを学ぶことができました。

戸田一雄氏インタビュー風景（陵水会館にて）